

小松市内遺跡発掘調査報告書 Ⅲ

高堂遺跡

千代才オキタ遺跡

矢田野遺跡

符津 C 遺跡

漆町遺跡

薬師遺跡

2007. 3

石川県小松市教育委員会

例言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。

【高堂遺跡】

【調査地】	石川県小松市高堂町
【調査原因】	個人住宅建設
【調査面積】	125m ²
【発掘調査】	1997.10.27～1997.12.26
【調査担当】	川畑謙二

【千代オオキダ遺跡】

【調査地】	石川県小松市千代町
【調査原因】	工場建設（個人）
【調査面積】	330m ²
【発掘調査】	2000. 6.19～2000. 8. 9
【調査担当】	福海貴子

【矢田野遺跡（矢田借屋古墳群）】

【調査地】	石川県小松市月津町
【調査原因】	個人住宅建設
【調査面積】	1,500m ²
【発掘調査】	2001. 7.16～2002. 3.26
【調査担当】	岩本信一・宮田 明

【符津 C 遺跡】

【調査地】	石川県小松市符津町
【調査原因】	共同住宅建設（個人）
【試掘調査】	2004. 5.21
【試掘担当】	坂下義視
【調査面積】	271m ²
【発掘調査】	2004. 7.14～ 8.30
【調査担当】	宮田 明・岩本信一

【漆町遺跡（白江・ツカマツ地区）】

【調査地】	石川県小松市白江町
【調査原因】	共同住宅建設（個人）
【試掘調査】	2004. 9.13
【試掘担当】	坂下義視
【調査面積】	300m ²
【発掘調査】	2004.10.18～2004.11.30
【調査担当】	宮田 明・岩本信一

【薬師遺跡】

【調査地】	石川県小松市矢崎町
【調査原因】	個人住宅建設

- | | |
|--------|-----------------------|
| 【試掘調査】 | 2004.10.15 |
| 【試掘担当】 | 坂下義視 |
| 【調査面積】 | 144m ² |
| 【調査期間】 | 2005. 7.11～2005. 8.26 |
| 【調査担当】 | 宮田 明・廣田いずみ |
4. 発掘調査は、（社）小松市シルバー人材センターに委託して作業員を確保し、一部、調査員の補助として臨時作業員を雇用して実施した。
 5. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 18 年度に実施した。
 6. 遺構の実測及び写真撮影は、各発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、各執筆担当者が行った。
 7. 本書の執筆は各担当者を目次に付記し、編集は宮田・川畑が担当し、下演貴子の協力を受けた。
 8. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市教育委員会一括保管している。

凡例

1. 本書に示す座標は世界測地系（VII 系）に準拠している。座標が明示されないものは、基準点測量を実施していない。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 本書に示す高度は標高（T.P.）である。
4. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
5. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録では、時代名称は原則として『石川県遺跡地図』の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

目次

I 位置と環境	……………(宮田)…………	1
II 高堂遺跡発掘調査	……………(川畑)…………	15
III 千代オオキダ遺跡発掘調査	……………(川畑)…………	25
IV 矢田野遺跡発掘調査	……………(岩本)…………	47
V 符津 C 遺跡発掘調査	……………(宮田)…………	59
VI 漆町遺跡発掘調査	……………(宮田)…………	74
VII 薬師遺跡発掘調査	……………(宮田)…………	87
写真図版 1～15		
報告書抄録		

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

1 市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約20km、南北約30kmに跨る市域は面積371.13km²を測る。南は大日山(1368m)で福井県勝山市と境し、ここより約5km北に位置する鈴ヶ岳(1174m)を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約11万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣7町村を合併して昭和15年市制施行、その後2次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

2 加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地(加越山地)は新第三紀火砕流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約20m程度あるが、平均的には5~10m程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約3分の2が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・滓上川等を合わせて国府台地をめぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図2は明治時代の河道と水域を合成したもののだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

3 梯川と梯川デルタ

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ



図1 小松市の位置



図2 小松市の地形

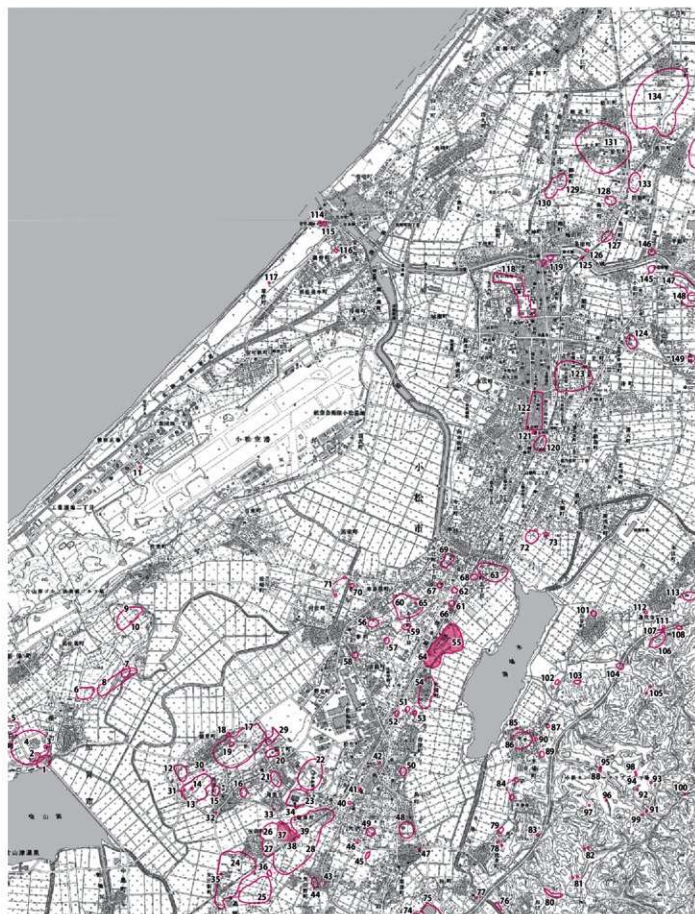


图3 遺跡分布图



れてきた。明治44年～大正12年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江湯・木場湯を結んだ領域を指している。図2に表示はないが、この領域には明治20年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば洪水被害を引き起こし、明治32年の耕地整理法以降、用水確保と洪水防除の必要から用排水路の整備が繰り返行われた。

第2節 歴史的環境

1 旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵境界で言えば、河田山遺跡(205)や八里向山A～F遺跡(229～234)など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、明確な集落遺跡としての確認例はない。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷A～D遺跡や宮竹うっしょやまA・B遺跡(いずれも図郭外)など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡(22)が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。多くが、近現代の開発も含め、後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一事例を提供してくれる。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

2 弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡(123)が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂遺跡(135)、大長野A遺跡(140)、漆町遺跡(150)、荒木田遺跡(174)のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡(205)や八里向山A遺跡(229)で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3 古墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山5・6号墳、秋常山1号墳(いずれも図郭外)、和田山5号墳(294)を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する。能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵境界では、中期後半以降、河田山古墳群(206)や下開発茶臼山古墳群(303)など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在しないいずれかのみ構成で築造される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代オオキダ遺跡(156)で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では白のほぞ古墳(29)や御幸塚古墳(67)などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群(37)のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石横積六式石室が採用される。

4 古墳時代～古代の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6世紀以降8世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7世紀代の月津台地では、額見町遺跡（17）の発掘調査以降、矢田野遺跡（28）、薬師遺跡（55）でL字形カマドを設けた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動勢が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相関性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8世紀、在郷の財氏関連遺跡とされる佐々木遺跡（161）が異彩を放つほかは、概ね盛期が9世紀後半～10世紀前半になる傾向が知られている。墨書土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図3には中宮八院（248、251、260、267、276、277、278、281）を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺跡（172）、八里向山B遺跡（230）、里川E遺跡（243）が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。

製陶遺跡群について、6世紀前半には二ツ梨東山古窯跡（図郭外）で須恵器生産が確認され、以後、10世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。紙幅の都合で殆どが図郭から外れているが、辛うじて図郭に収まる林タカヤマ古窯跡（75）は、7世紀前半の須恵器窯3基が調査されている。一方の能美丘陵では、7世紀前半に八里向山J遺跡（地蔵谷古窯跡：238）で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群（347）に操業の拠点を移動する。8世紀前半には和気古窯跡群（321）へさらに移動し、9世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯1基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッシュウタン遺跡（108）で製鉄に伴うと見られる製炭窯が7世紀後半～末ないし8世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡（300）、下開発遺跡（301）が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡（147）、漆町遺跡（150）は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡（148）は、『能美郡志』によれば、従前の白江念仏寺塔遺跡（150）周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りにおいては、ここに比定すべきだろう。

5 中世の遺跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩割城跡（268）、岩倉城跡（274）、波佐谷城跡（283）など、縄張り図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、糞を中心とした日用雑器類の生産が主力であったと

される。操業の期間が短く、12世紀末までには二ツ梨奥谷1号窯(図郭外)で操業を開始したが、14世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯(図郭外)で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

6 近世～現代

近代窯業の関連で、19世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯(165)に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯(111)、小野窯(192)などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括りで言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり(土百古墳:66)、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり(左門殿古墳:30)するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている訳である。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

表1 遺跡地名表

No	名 称	種 別	時 代	備 考
1	柴山水成貝塚	貝塚	縄文	
2	柴山甲塚	その他の墓	中世	
3	柴山神社遺跡	散布地	不詳	
4	柴山城跡	城跡	中世	
5	一白A遺跡	散布地	古墳～古代	
6	柴山貝塚	貝塚・集落跡	縄文	加賀市指定史跡
		集落跡	古代	
7	柴山水成遺跡	貝塚	弥生	柴山田村遺跡A地点に所在する貝塚
8	柴山田村遺跡(A地点)	集落跡	弥生	
	柴山田村遺跡(B地点)	集落跡	古代～中世	柴山貝塚に隣接する地点
9	山の上遺跡	散布地	縄文	
10	佐美萩塚	萩塚	不詳	
11	日本萩塚	萩塚	不詳	
12	額見町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
13	新山A遺跡	散布地	不詳	
	新山B遺跡	散布地	縄文	
14	新山新記遺跡	その他(祭壇)	古代(奈良)	
15	月津オカ遺跡	散布地	古墳・中世	
16	月津A遺跡	散布地	古代(奈良)	
		散布地	縄文	
17	額見町遺跡	集落跡	古墳～中世	
18	額見神社前A遺跡	散布地	古墳	額見町遺跡の一部
19	額見神社前B遺跡	散布地	縄文	額見町遺跡の一部
20	中町遺跡	散布地	縄文・不詳	
21	月津新遺跡	散布地	縄文・古代	
22	念仏林遺跡	集落跡	縄文	
23	念仏林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
24	矢田新遺跡	集落跡	古代(奈良)	
		散布地	縄文	
25	刀阿塚遺跡	集落跡	古代～中世	
26	矢田A遺跡	散布地	縄文	
27	矢田B遺跡	散布地	古墳	矢田野遺跡の一部

No	名 称	種 別	時 代	備 考
28	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
29	白のほそ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
30	左門跡古墳	古墳	古墳	円墳
31	新山古墳	古墳	古墳	円墳、2段築成
32	興宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
33	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
34	念仏林古墳	古墳	古墳	円墳、木芯粘土室
35	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室、家形石積
36	孤森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
37	矢田僧塚古墳群	古墳	古墳	円墳 14、前方後円墳 3、不明 1、木芯粘土室
38	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
39	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳 3、前方後円墳 1
40	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
41	新藤塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
42	四津石山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
43	中村古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
44	矢田野神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
45	下栗津 A 横穴部	横穴墓	不詳	横穴 7～8
46	藤原塚	経塚	不詳	
47	下栗津 B 横穴部	横穴墓	不詳	横穴 2
48	島遺跡	散布地	弥生～古墳・中世	
49	島 B 遺跡	散布地	古代	
50	島 C 遺跡	散布地	古墳	方墳?
51	符津 A 遺跡	散布地	縄文	
52	四津 B 遺跡	散布地	縄文	
53	符津 C 遺跡	集落跡	古墳	
54	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
55	藤原遺跡	集落跡	古墳～古代	
56	串カンノヤマ A 遺跡	散布地	古代(奈良)	
57	串カンノヤマ B 遺跡	散布地	古墳	
58	串カンノヤマ C 遺跡	散布地	古墳	
59	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	
60	孤山遺跡	集落跡	古墳	
61	土百遺跡	散布地	縄文	
62	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
63	五郎塚貝塚	貝塚	縄文	
64	矢崎 B 古墳	古墳	古墳	
65	孤山古墳	古墳	古墳	
66	土百古墳	古墳	古墳	
67	御幸塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、小形市指定史跡
68	今江横穴部	横穴墓	不詳	横穴 4
69	御幸塚遺跡	城跡跡	中世	主郭と曲輪の一部
70	串古窯跡	生産遺跡	中世末	製陶
71	日本瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	横瓦窯
72	大栗遺跡	散布地	古代	
73	茂月跡古観場	その他の墓	中世末	県指定史跡
74	林廻磨寺跡	社寺跡	不詳	
75	林遺跡(林タカヤマ古窯跡部)	生産遺跡	古墳	須虫器窯 3、南加賀古窯跡北部
76	林遺跡(林製鉄跡)	生産遺跡	古代	製鉄炉 2、製炭炉 4、鍛冶炉 2、焼型坑 2
77	井口遺跡	散布地	不詳	
78	林八幡神社経塚	経塚	中世(鎌倉)	
79	津成倉ホットジ遺跡	横穴墓	中世(室町末)	地下式坑 6、2基調査
79	大谷山貝塚	貝塚	縄文	
80	小丸山コガタニ遺跡	散布地	不詳	氈沓散布地
81	小丸山スプト平製鉄跡	生産遺跡	不詳	
82	小丸山オラダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
83	津波倉ハクマイダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	
84	本場古墳群	古墳	古墳	墳場 4
85	本場古墳	古墳	古墳	
86	池田城跡	城跡跡	不詳	
87	本場温泉遺跡	散布地	縄文	
88	本場 A 遺跡 (本場遺跡 H 地区)	生産遺跡	古代 (奈良)	製鉄炉 1, 製炭窯 2
89	本場 B 遺跡	散布地	古代 (平安) ~ 中世	
90	本場 C 遺跡	散布地	弥生	
91	本場遺跡 A 地区 (1 号遺跡)	生産遺跡	古代 (平安)	製炭窯 3, 製鉄散布地
92	本場遺跡 B 地区 (2 号遺跡)	生産遺跡	古代 (平安)	製鉄炉 2, 製炭窯 2
93	本場遺跡 C 地区 (3 号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
94	本場遺跡 D 地区 (4 号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1, 製炭窯 1
95	本場遺跡 E 地区 (5 号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
96	本場遺跡 F 地区 (6 号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
97	本場遺跡 G 地区 (7 号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉
98	本場遺跡 D 地区 (8 号遺跡)	横穴墓	不詳	横穴 1
99	大曲遺跡	散布地	不詳	製鉄散布地
100	長谷岡跡屋の山遺跡	散布地	不詳	製鉄散布地
101	三谷遺跡	散布地	縄文	
102	三谷 B 遺跡	散布地	弥生 ~ 古墳	
103	三谷ト方谷遺跡	不詳	不詳	墳丘又は塚
104	三谷大谷遺跡	集落跡	古代 ~ 中世	
105	三谷大谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1, 製鉄散布地
106	蓮台寺城跡	城跡跡	不詳	小規模な平跡か
107	蓮代寺ムコヤマ製鉄跡	生産遺跡	中世 (鎌倉)	製鉄炉 1, 製炭窯 1
108	蓮代寺ガッシュウタン遺跡	生産遺跡	古墳	製炭窯 3, 製鉄散布地
109	蓮代寺 A 遺跡	散布地	不詳	製鉄散布地
110	本江古京跡	生産遺跡	近世	製陶
111	蓮代寺西跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「蓮代寺窯」
112	蓮代寺瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	焼瓦窯
113	蓮台寺跡	社寺跡	中世	沢田氏菩提寺「蓮台寺」比定地
114	安宅明跡	その他	不詳	県指定史跡
115	安宅住吉神社遺跡	散布地	不詳	
116	安宅中世墓群	その他の墓	中世 (室町)	
117	安宅大塚古墳	不詳	不詳	積石塚とも墳丘の跡石とも。現存せず
118	小松城跡	城跡跡	近世	本丸・二ノ丸・三ノ丸の一部。本丸舞台は小松市指定史跡
119	大川遺跡	集落跡	近世	近世小松城下町・室町の町屋跡
120	幸町遺跡	生産遺跡	中世 (室町)	鍛冶
121	多人神社境内遺跡	散布地	中世 (室町)	埋納瓦田土地
122	本町城跡	城跡跡		本茶氏居館跡伝承地の一
123	八日市地方遺跡	散布地	縄文・中世	
124	小松遺跡	集落跡	弥生	環壕集落
124	上小松遺跡	散布地	古代 (平安)	
124	榑川鉄造遺跡	散布地	弥生	榑川に分断された左岸側包蔵地
126	榑川鉄造 B 遺跡	散布地	弥生	榑川に分断された右岸側包蔵地
127	高田 A 遺跡	散布地	古墳 ~ 古代	
128	高田 B 遺跡	散布地	古墳	
129	新館遺跡	城跡跡	中世 (室町)	
130	真朝遺跡	散布地	弥生 ~ 古代	
130	集落跡	集落跡	中世 (室町)	一向一揆・御一新し郎重親居館伝承地
131	松梨遺跡	散布地	縄文 ~ 弥生・中世	
131	集落跡	集落跡	古墳 ~ 古代	
132	長田遺跡	散布地	弥生 ~ 古墳	
133	長田南遺跡	散布地	弥生・古代 (平安)	
133	集落跡	集落跡	中世 (室町)	
134	中ノ江遺跡	散布地	古墳 ~ 中世	
135	高堂遺跡	集落跡	弥生 ~ 中世	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
136	高堂四方堂遺跡	散布地	弥生	
137	小長野遺跡	散布地	不詳	
138	小長野 B 遺跡	散布地	古墳	
139	小長野 C 遺跡	集落跡	古代	
140	大長野 A 遺跡	集落跡	弥生～中世	
141	大長野 B 遺跡	散布地	不詳	
142	牛島宮の島遺跡	集落跡	古代(平安)	
143	千代アジロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
144	牛島ウハシ遺跡	集落跡	縄文～中世	
145	平岡榎川遺跡	集落跡	弥生	榎川に分断された左岸側急傾地
146	平岡榎川 B 遺跡	散布地	弥生	榎川に分断された右岸側急傾地
147	白江榎川遺跡	集落跡	弥生・中世	
148	白江塚跡	城郭跡	中世(室町)	白江新助墓平・墓域跡継承
149	白江遺跡	散布地	古墳～中世	漆町遺跡の一部
150	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世	
151	一井遺跡	散布地	縄文	
152	一井 B 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
153	一井 C 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
154	定地坊跡	社寺跡	中世(室町)	
155	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世	
156	千代オオキダ遺跡	散布地	縄文～弥生	
		集落跡	弥生～中世	
		古墳	古墳	方墳 6
157	千代小野町遺跡	散布地	古墳	
158	千代城跡	城郭跡	中世(室町)	
159	千代本村遺跡	散布地	古墳	
160	磯地遺跡	散布地	縄文	
161	佐々木遺跡	集落跡	古代	財氏居宅跡(奈良)
162	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	
163	佐々木アサバタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	
164	打越遺跡	散布地	古代	
165	若杉宮跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「若杉寮」、池原式寮
166	吉竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
167	吉竹 B 遺跡(吉竹遺跡 19 地区)	散布地	古墳	日河道の御跡
168	千本野遺跡	散布地	縄文	
	千本野 (A) 遺跡	古墳	古墳	方墳 8
	千本野 (B) 遺跡	集落跡	古墳	
169	櫛生 1 号墳	古墳	古墳	所在不詳、現在するのは現代残土の山
170	釜谷古墳・釜谷 2 号墳	古墳	古墳	切石積穴式石室
171	若杉オンボ山 1 号宮跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯
172	浄水寺跡	社寺跡	古代～中世	創建は加賀国守・因分寺阿比山院寺院跡の一
173	八幡遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～古墳・古代(奈良)・中世(鎌倉)	
	八幡古墳部	その他の墓	古代(平安)	土筑墓
	八幡若杉宮跡	古墳	古墳	円墳 8、木芯粘土室
174	八幡若杉宮跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「八幡若杉寮」、八幡 6 号墳を削平して築いた建原式寮
174	荒木山遺跡	集落跡	古墳～中世	
175	軽海西芳寺遺跡	集落跡	縄文～中世	
176	大谷川遺跡	散布地	弥生	
177	軽海遺跡	散布地	弥生～中世	
178	龜山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
179	軽海中世墓群	その他の墓	中世(室町)	集石墓 9
180	輕原庵寺	社寺跡	古代(平安)	大興寺伝承地
181	西芳寺遺跡	社寺跡	古代(平安)	西芳寺伝承地
182	古府しのまち遺跡	集落跡	弥生～古代	
183	古府遺跡	集落跡	古代(平安)	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
184	古府フンド遺跡	散布地	古代(平安)	
185	十九堂山遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国分寺郡定地
186	十九堂山中世墓群	その他の墓	中世(室町)	
187	古府横穴	不詳	不詳	
188	古府シマ遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
189	南野台遺跡	散布地	縄文	
190	小野遺跡	集落跡	古代(平安)	加賀国府郡定地の一隅
191	小野スギノキ遺跡	集落跡	古代(平安)	加賀国府郡定地の一隅
192	小野窯跡	生産遺跡	近世末	西興九谷「小野窯」
193	前田利常公灰塚	その他の墓	近世	前田利常公が茶室に付された地とされる
194	畑田の虫塚	その他	近世末	青虫の骨提供者と埋葬方法を記した石柱、小松市指定史跡
195	畑田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	
196	畑田ミヤタン遺跡	散布地	不詳	
197	畑田ウラムキ遺跡	散布地	古代～中世	
198	畑田フルカワ遺跡	散布地	古墳	
199	岩谷寺塚敷遺跡	散布地	縄文・中世(室町)	
200	畑田遺跡	散布地	古代	
201	畑田塚	不詳	不詳	
202	畑田後山古墳群	古墳	古墳	円墳 9、木形直葬、木志粘土室
203	畑田山古墳群	古墳	古墳	円墳 12、方墳 4
204	新井提所古墳	古墳	古墳	円墳
205	河山山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落、河山山 10～12号墳が重複
206	河山山古墳群	その他の墓	古代(奈良)	火葬墓、河山山 1号墳の西側に所在
		古墳	古墳	前方後円墳 2、前方後方墳 2、円墳 22、方墳 34、不明 1、木形直葬、木志粘土室、切石磨礮穴式石室
207	河山山 1号窯跡	縄穴墓	不詳	地下式坑、河山山 54号墳の南に開口
		生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河山山支群、河山山 60号墳の北西斜面に所在
208	河山山古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河山山支群
		散布地	縄文・古代(奈良)	
209	河田 C 遺跡	散布地	不詳	
210	下八里横穴群	横穴墓	不詳	地下式坑 6、横穴 1、不明 1、3地点で計 8 基
211	穴堀横穴群	横穴墓	不詳	横穴 2 基
212	上八里横穴群	横穴墓	中世(室町)	横穴 11 基
213	上八里中世墓群	その他の墓	中世(室町)	
214	上八里 A 遺跡	散布地	縄文・古代(平安)	
215	上八里 B 遺跡	散布地	古代(奈良)	
216	上八里 C 遺跡	横穴墓	古墳	横穴 2 基
217	上八里 D 遺跡	散布地	古代(奈良)	
218	上八里 1号窯跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河山山支群
219	上八里 2号窯跡	生産遺跡	不詳	地下式窯窯、能美古窯跡南群 八里・河山山支群
220	谷内横穴	不詳	不詳	
221	河田前遺跡	散布地	縄文・中世	
222	下田地遺跡	散布地	不詳	
223	佐野 A 遺跡	散布地	弥生	
224	佐野 B 遺跡	散布地	古墳	
225	佐野八反田遺跡	散布地	古代	
226	佐野神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
227	河田向山下遺跡	散布地	縄文・古代(平安)	
228	河田向山古墳群	古墳	古墳	円墳 7
229	八里向山 A 遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
230	八里向山 B 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代(奈良)	加賀国府・国分寺町田山社寺遺跡の一

No	名 称	種 別	時 代	備 考
231	八里向山C遺跡	散布地	旧石器～縄文・古代(奈良)	
		集落跡	弥生	
		古墳	古墳	前方後方墳1、本館直葬
232	八里向山D遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	方墳2、本館直葬
233	八里向山E遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		古墳	古墳	方墳1
		集落跡	古代	
234	八里向山F遺跡	散布地	縄文	
		古墳	古墳	円墳10、本館直葬
		その他の墓・竈穴墓	中世(室町)	集石墓1、竈穴3
235	八里向山G遺跡	散布地	弥生・古代(平安)	
236	八里向山H遺跡	その他の墓	中世(鎌倉)	集石墓群、96基調査
237	八里向山I遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・皇行支群
238	八里向山J遺跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・皇行支群
239	里田A遺跡	生産遺跡	不詳	製灰窯2、製灰坑約20
240	里田B遺跡	生産遺跡	不詳	製灰窯
241	里田C遺跡	生産遺跡	不詳	製灰窯
242	里田D遺跡	散布地	縄文	
243	里田E遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国府・因分寺周辺山科寺院群の一
244	里田F遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国府・因分寺周辺山科寺院群の一
245	里田G遺跡	散布地	不詳	
246	遊泉寺・クボタA遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
247	遊泉寺・クボタB遺跡	散布地	古代(平安)～中世	社寺(陳明寺)又は城址伝承地
247	立明寺古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯 (山海集)
248	立明寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可能性も
248	陳明寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
249	遊泉寺遺跡	散布地	縄文	
250	宮の奥墳墓群	その他の墓	(平安)	墳墓4、3基調査。2号墓は鎌倉時代に経塚に利用された?
251	高泉寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
252	常徳寺跡	社寺跡	中世(室町)	一向一揆・宇田常徳の居宅跡とも
253	頼田伊勢跡	城跡跡	不詳	一向一揆・宇田常徳の隠城伝承地
254	頼田竈穴	不詳	不詳	地下式墳?
255	仏大寺仏陀寺跡	社寺跡	中世	
256	仏大寺とうの池古墳	古墳	古墳	
257	仏生寺跡	社寺跡	中世	
258	仏生寺塚	経塚	中世	
259	フッシュウジヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳2、木立粘土室
260	中海B遺跡	集落跡	古墳～中世	
	(伝)長寛寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、地名伝承のみ
261	中海C遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
262	中海遺跡・岩所遺跡	散布地	縄文	
	岩所1野遺跡	散布地	旧石器・中世	
263	長寛寺中世墓群	その他の墓	中世	
264	赤穂谷口遺跡	散布地	縄文	
265	松の木谷竈穴群	不詳	不詳	存在自体が不明、5基開口とされる
266	赤穂谷スビノ半谷竈穴群	竈穴墓	不詳	竈穴9、地下式墳4
267	西興寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院
268	岩所城跡	城跡跡	中世	
269	仏ヶ原城跡	城跡跡	中世	
270	仏御前屋敷跡・仏御前墓	その他の墓	古代(平安)	小松市指定史跡
271	鹿口遺跡	散布地	縄文	
272	下鹿口伊墓群	その他の墓	中世	
273	下鹿口竈穴群	竈穴墓	不詳	竈穴3
274	岩倉城跡	城跡跡	中世(室町)	
275	樺の木山遺跡	散布地	縄文	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
276	昌隆寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
277	瀧田寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院
278	松谷寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
279	平野塚跡	城跡跡	中世(室町)	一向一揆・平野某部城伝承地
280	江船城跡(山神山内跡)	城跡跡	中世(室町)	
281	蓮花寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
282	渡庄谷遺跡	散布地	中世(室町)	
283	渡庄谷城跡 (伝)渡庄谷松岡寺跡	城跡跡 社寺跡	中世(室町)	一向一揆・宇野呂河波守部城伝承地
284	渡庄谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴13、地下式15
285	六蔵遺跡	集落跡	縄文	
286	麻島尾谷遺跡	散布地	縄文	
287	松岡寺跡	社寺跡	中世(室町)	
288	火打山横穴群	横穴墓	不詳	横穴3
289	こたい谷横穴	横穴墓	不詳	横穴1
290	ア山横穴	横穴墓	不詳	横穴1
291	池城竊塚	竊塚	中世(室町)	
292	野山横穴	横穴墓	不詳	横穴1
293	能美古墳群 寺井山・三過山支群	古墳	古墳	円墳1、方墳1、不明4、県指定史跡「寺井山遺跡」
294	能美古墳群 和山山支群	古墳	古墳	前方後円墳1、円墳13、方墳2、不明7、木相竊塚、国指定史跡「和山山・木守山古墳群」
295	和山山下遺跡	散布地	縄文・古墳	
296	石子遺跡	散布地	中世	
297	函谷遺跡	散布地	古墳	
298	秋宮遺跡	散布地	古代(平安)	
299	高津遺跡	集落跡	縄文・古墳・中世	
300	徳久・長尾遺跡	集落跡	縄文・中世	東大寺御廟庄比定地
301	下関元遺跡	集落跡	古墳～古代(平安)	東大寺御廟庄比定地
302	下関元クモミヤ遺跡	集落跡	古代(平安)～中世	
	下関元茶臼山遺跡	集落跡	縄文・中世	
303	下関元茶臼山古墳群 茶臼山霞沢跡群	古墳 生産遺跡	古墳 不詳	円墳28、木相直井、木之島土室 鉄鍬跡8
304	瓦屋古墳群	古墳	古墳	円墳9、方墳11
305	下徳山A遺跡	散布地	古代(奈良末～平安)	
306	下徳山B遺跡	散布地	古代(平安)	
307	下徳山C遺跡	散布地	不詳	
308	下徳山D遺跡	生産遺跡	古代(奈良末)	須恵器窯ほか、能美古窯跡南群 下徳山支群
309	下徳山御焼山古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯ほか、能美古窯跡南群 下徳山支群
310	下徳山村谷古窯跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 下徳山支群
311	和氣小しょうぶ谷1号窯跡	生産遺跡	古代(奈良末)	須恵器窯、能美古窯跡南群 隼山谷支群
312	和氣小しょうぶ谷2号窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 隼山谷支群
313	和氣狐谷遺跡	散布地	古代	
314	上徳山谷山西谷古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 隼山谷支群
315	和氣後山谷北遺跡	散布地	古代	
316	和氣白石古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 隼山谷支群
317	和氣後山谷奥遺跡	生産遺跡	古代(平安)	土師器焼成跡、能美古窯跡南群 隼山谷支群
318	和氣後山谷1号窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 隼山谷支群
319	和氣後山谷2号窯跡	生産遺跡	古代(奈良末～平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 隼山谷支群
320	和氣小しょうぶ谷遺跡	散布地	古代	
321	和氣古窯跡群(和氣1～3号窯跡)	生産遺跡	古代(奈良末～平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 和氣峠山支群
322	下徳山金谷地古窯跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 和氣峠山支群
323	下徳山トモサ夕遺跡	散布地	不詳	
324	和氣和田見遺跡	散布地	不詳	
325	和氣和田見古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 隼山谷支群
326	和氣下和氣古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群
327	和氣近世窯跡	生産遺跡	近世	
328	和氣矢口A遺跡	散布地	縄文	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
329	和氣古瓦屋遺跡	城跡跡	不詳	
330	和氣中和氣古京跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古京跡南群 徳山谷支群
331	虚空蔵城跡	城跡跡	中世	
332	虚空蔵山城六郎	城跡跡	不詳	
333	寺島古京跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古京跡南群
334	寺島薬師坂古墳	古墳	古墳	
335	圓谷社跡	社寺跡	不詳	
336	圓谷中世墓群	その他の墓	中世	
337	圓谷横穴	横穴墓	不詳	
338	圓谷浮跡	城跡跡	不詳	
339	金剛寺跡	社寺跡	不詳	
340	金剛寺坂中世墓群	その他の墓	中世	墳墓
341	徳山寺跡	社寺跡	不詳	
342	上徳山A遺跡	散布地	古代	
343	上徳山B遺跡	生産遺跡	近世	製陶
344	圓屋チョウヅカ遺跡	その他の墓	中世	墳墓 11
345	辰口庵寺	社寺跡	不詳	
346	辰口遺跡	散布地	縄文	
347	圓屋古京跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯、能美古京跡北群
348	圓屋遺跡	散布地	古墳～古代(平安)	
349	船台北野跡	城跡跡	中世	
350	船台南野跡	城跡跡	中世	
351	船台A遺跡	散布地	縄文	
352	船台B遺跡	散布地	古代(平安)	
353	末丸船台遺跡	散布地	縄文	
354	火釜A遺跡	散布地	縄文	
355	火釜B遺跡	散布地	古代(平安)	

参考文献

- イ 石川県教育委員会(1992) 石川県遺跡地図
- 石川県立埋蔵文化財センター(1986) 漆町遺跡Ⅰ
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 漆町遺跡Ⅱ
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 辰口西部遺跡群Ⅰ
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 白江梯川遺跡Ⅰ
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 漆町遺跡Ⅲ
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 漆町遺跡Ⅳ
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 白江梯川遺跡Ⅱ
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 蓮代寺地区遺跡Ⅰ
- 石川県立埋蔵文化財センター(1990) 小松市高堂遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1993) 能美丘陵東遺跡群Ⅰ
- 石川県立埋蔵文化財センター(1995) 石川県小松市荒木田遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1997) 能美丘陵東遺跡群Ⅱ
- 石川県立埋蔵文化財センター(1998) 能美丘陵東遺跡群Ⅲ
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅳ
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅴ
- (財)石川県埋蔵文化財センター(2002) 加賀市柴山貝塚・柴山山村遺跡
- (財)石川県埋蔵文化財センター(2006) 小松市矢田野遺跡群
- (社)石川県埋蔵文化財保存協会(1998) 石川県小松市八幡遺跡Ⅰ
- 石川考古学研究会(1988) 石川県城跡分布調査報告

- ウ 上野 興一 (1965) 考古篇, 小松市史 4. 風土・民俗篇, 小松市教育委員会, 石川県
- カ 軽海用水誌編纂委員会 (1996) 軽海用水誌, 小松東部土地改良区, p75-77, p201-221., 石川県
- コ 小松市教育委員会 (1988) 念仏林遺跡, 石川県
 小松市教育委員会 (1999) 林タカヤマ窟跡, 石川県
 小松市教育委員会 (2000) 矢田借屋古墳群, 石川県
 小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I, 石川県
 小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡, 石川県
 小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群, 石川県
 小松市教育委員会 (2006) 千代才オキダ遺跡, 石川県
 小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡, 石川県
 小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II 矢田借屋古墳群, 石川県
 小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I, 石川県
 小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦, 小松市, 石川県
 小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園, 小松市, 石川県
- ク 辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶臼山古墳群, 石川県能美市
 辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窟跡, 石川県能美市
 辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窟跡 III, 石川県能美市
 辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶臼山古墳群 II, 石川県能美市
 辰口町教育委員会 (2005) 和気後山谷窟跡群, 石川県能美市
- ケ 寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群, 石川県能美市
- コ 日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌, 能美郡役所, p366-375, p642, p823, p1268-1269., 石川県
 日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌, 江沼郡役所, p679., 石川県
- ホ 北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸, 桂書房, p193-208.

第二章 高堂遺跡発掘調査

第1節 調査に至る経緯等

小松市高堂町在住の曾田 孝志氏より、小松市高堂町ハの74番地での住宅建設計画に伴い、平成9年10月15日付けで埋蔵文化財の取り扱いについて、協議書が提出された。当該地は、平成6年に別の事業に伴って行われた試掘調査によって、周知の埋蔵文化財包蔵地である高堂遺跡に含まれることが確認されていた。よって、当該工事計画が地下室を伴う設計であったため、工事による埋蔵文化財の破壊が避けられない状況となった。よって、平成9年10月16日付けで、事業者に対し、事業の実施においては、事前に発掘調査が必要な旨を回答した。これを受けて平成9年10月17日付けで、事業者より埋蔵文化財発掘調査の実施について依頼書が提出された。事業者に対し、同日付けで、埋蔵文化財発掘調査の実施回答を行った。さらに同日付けで、事業者より文化財保護法第57条の2第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が文化庁長官宛に提出された。これにより平成9年10月23日付けで、石川県教育委員会教育長より、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」が事業者に対し通知され、発掘調査を行う旨が指示されるに至った。

発掘調査は、平成9年10月27日から平成9年12月19日までの予定で、工事により埋蔵文化財が破壊される125㎡を対象に行うこととなった。なお、発掘調査に伴う経費については、個人住宅対応であることから、文化庁補助金の対象となり、平成9年度国庫補助事業として行った。

調査は予定通り平成9年10月27日より開始したが、天候不順の影響を受け、やや遅れて平成9年12月26日に完了した。平成10年1月30日付けで、事業者に対し完了報告を行い、当該地の引渡しを行った。



図4 高堂遺跡 調査地位置図

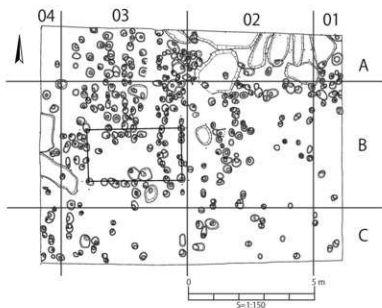


図5 高堂遺跡 グリッド配点図

第2節 調査の経過

1 現地調査の概要

調査に際し、調査区内に5m×5mのメッシュを任意に設定した。水準点に関しては、主要地方道小松・鶴来線沿いの能美市小長野地内に所在する道路基準点から移設し、調査区外にベンチマークを設定した。当該地は湧水が激しいため、調査区内周に排水溝を掘削し、ポンプによる汲み上げを行った。遺構検出時に出土した遺物は、グリッドごとに取り上げた。遺構は、任意の箇所に適時土層観察用のアゼを設定し掘り下げた。遺物については、基本的には層位で取り上げることとし、必要に応じて遺物出土状況図を作成した。

2 調査の経過

発掘調査は、10月27日に重機により表土を除去し、10月30日より作業を開始した。調査区は元々は水田であり、その耕作土を除去すると直ぐに地山が検出される状況であった。このように耕作土と地山の間隔が狭いため、広範囲に攪乱を受けている状況であった。それは、1cm～20cmと深さに差があることから、耕作機械の影響と考えられ、東西南北に縦横無尽に溝が走っている状況として確認された。これは、隣接地で行われた「一般国道8号改築事業（金沢西バイパス）」に係る調査においても同じ状態であったことが、現場写真から判断される。今回の調査は狭小地であるため、これら攪乱を除去しないと遺構プラン確認が不可能であることから、取り去ることとした。攪乱除去後、11月19日より遺構プラン確認および遺構掘削作業に入った。遺構は、ピットが中心だったが、北東隅部に集中して土坑および溝状遺構が検出された。また、掘立柱建物跡も1棟検出された。ここまでの各種記録作業は、調査員1名で行った。12月22日より遺構平面図作成作業を開始し、複数調査員の支援を受けた。12月26日にすべての作業を完了したが、その後の降雪等の天候不良により、翌年1月17日に埋め戻しを行った。

3 出土品整理

出土遺物は非常に少なかったため、調査年度中に調査員によって遺物洗浄を行った。注記・接合・トレース作業は、報告年度である平成18年度に出土品整理作業員が行った。なお、遺物の分類及び実測作業は、調査員が行った。

第3節 遺跡の範囲と既住の調査

高堂遺跡は、今回の調査以前に、昭和54年度～昭和56年度にかけて発掘調査が、石川県埋蔵文化財センター（現財団法人石川県埋蔵文化財センター）によって行われている。その結果、弥生時代～中世に至るまでの大規模な複合遺跡であることが確認された。遺跡の範囲は、南を八丁川右岸付近、西を下郷用水が南へ折れる地点付近、東を能美市寺井病院南側付近、北は下郷用水を境としている。この県の行った調査は、国道8号線金沢西バイパス建設工事に伴うもので、約11,000㎡に渡る広範囲を調査したものである。その結果、各時代の遺跡が、全面に分布しているのではなく、時代ごとに偏在して存在していることが判明している。遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代（9世紀初頭～9世紀後葉頃）、室町時代（14世紀末～16世紀前半）に分けられる。概ね今回調査区で検出された遺物の様相とも合致している。以下、概況を簡単に触れておきたい。

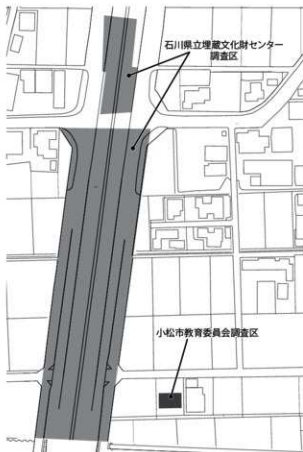


図6 県調査区と市調査区の位置 (S=1:2,500)

〔弥生時代後期～古墳時代前期〕

県道南側調査区の中央部に分布の中心があり、調査区を横断する東西溝に南北を画されている。その区画内から、平地式建物1棟、布堀式掘立柱建物跡4棟が検出されていることが特筆される。南側を画する溝から多量の土器が出土している。

〔古墳時代後期〕

県道南側調査区の中央部西寄りに、田の字プランの倉庫棟と考えられる掘立柱建物跡3棟が検出されている。やや南側の離れた位置に、径約1.5mを図る大型土坑が検出されており、内部より多量の須恵器・土師器や鋤・鉢の未製品等の木製品が出土している。

〔平安時代（9世紀初頭～9世紀後葉頃）〕

県道南側調査区の北側を中心に検出されている。調査区を南北軸で縦断する溝に規制されており、その東岸にのみ建物群が展開している。特に、前述の南北溝に直交する東西溝との区画内で、コの字型に整然と配置された建物群が検出されている。地鎮供養と考えられる皇朝十二銭の埋納遺構や、「金光明最勝王四天王護国品」と記された護国經典を示す木簡の出土が特筆される。墨書土器も多数出土しており、文字は吉祥句が主体である。墨書土器のうち「□弥」が、沙弥であるならば、木簡との関係が目ざされるものである。能美部衙関連遺跡と考えられ、私事を担う宗教施設の可能性がある。

〔室町時代（14世紀末～16世紀前半）〕

県道北側調査区からのみ検出されている。遺構は、溝や土坑のみで建物跡の検出はないが、14世紀末～16世紀前半の遺物が定量出土している。

第4節 発見された遺構

1 基本層位について

当該地は、前述のとおり水田を宅地として埋め立てたものである。よって、新旧の水田耕作土のみが確認された状況であった。地山は灰黄褐色埴土で、耕耘により大きく乱された状態が確認された。上位の耕作土中にも、地山土がブロック状に混入している状態であった。県調査区で確認されていた、黒褐色土層（遺物包含層）は検出されなかった。

2 遺構

検出された主な遺構を解説するが、遺構内からは殆ど遺物は出土しておらず、それによって時期を判断することはできない。また、前述のとおり地山面の直上に旧耕作土が被さる状況であり、遺構の掘削深度の浅さからも、遺構上面は削平されている可能性が高い状況である。よって、遺跡の時期については、隣接地調査の状況を基に、小結において検討したい。

(1) 掘立柱建物跡

SB01

調査区中央からやや西よりの位置で検出された、梁行1間×桁行2間の小規模な建物である。柱間寸法は、梁行204cm（平均）、桁行188cm（平均）を測る。面積は梁行204cm×桁行378cmで約7.7㎡、主軸はN-2°-Wである。平均的な柱間配置をとる。柱穴は約28cm～40cmの不整楕円形であり、柱痕が確認された。柱痕は、約14cm～18cmの大きさを測る。埋土は、黒褐色埴土である。

(2) 土坑

SK01

ほぼ調査区中央で検出され、楕円形を呈する。比較的内壁面が直に立ち、底面は平坦である。最下層は炭化物を多量に含む埴土で埋められていた。

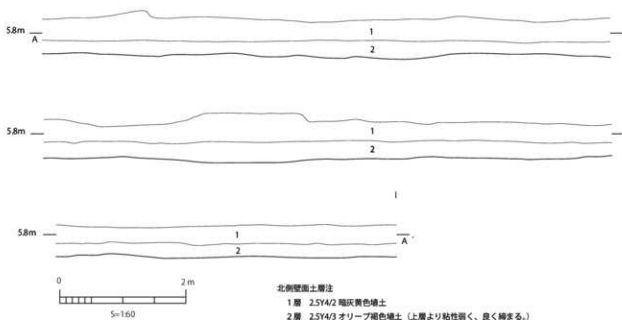


図7 高堂遺跡 調査区北側壁面断面図

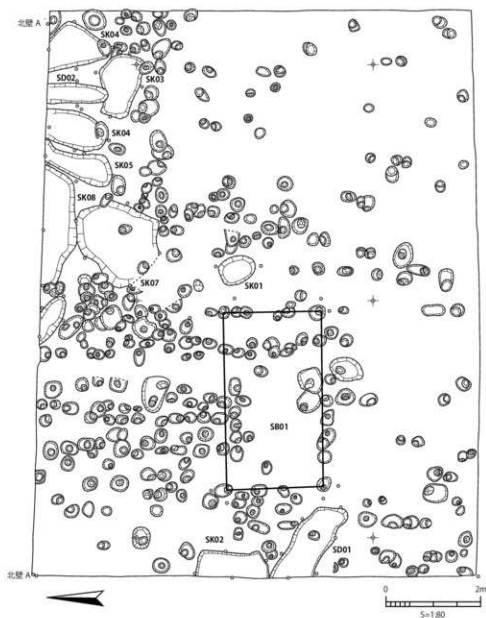


図8 高堂遺跡 平面図

SK02

調査区西端で検出されており、全形は不明だが、方形土坑と推察される。深さは10cm程度しか残存していない。最下層の砂混埴土が埋まった段階でもう一度掘り込まれたようである。その最下層土とSK01の第3層とが共通した土壌であると考えられる。

SK03～08

調査区北東端部で集中して掘削されている土坑群である。SK03は、やや大型だが、SK01と同じ形態の土坑で、壁面が直に立つものである。埋まり方も類似しており、共通性が看取される。SK04～06は、やや不整形な土坑であるが、深さ10～15cm程度で、底面が平坦であるという共通点を持つ。埋土は、SK05・06が同じ黒褐色埴土で埋まっており、同時性がみられる。遺物は、SK05より焼成

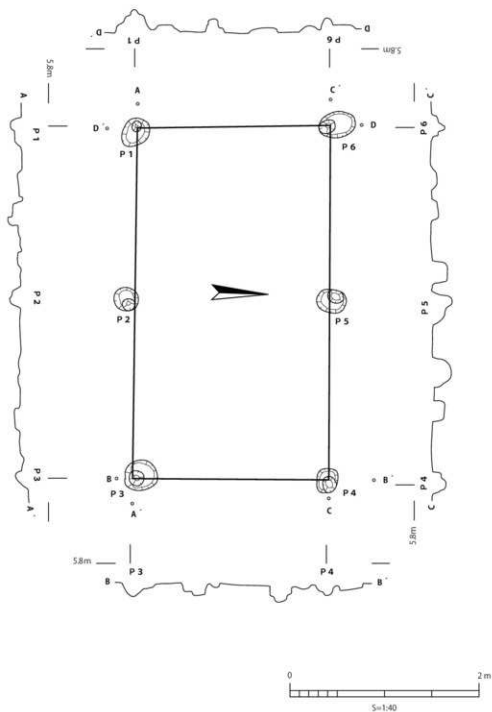


図9 高堂遺跡 掘立柱建物跡実測図

粘土塊が1点出土している。SK07・08は大型の土坑であり、SK07で長軸174cm、短軸146cmを測り、SK08で長軸240cmを測る。深さ10～15cm程度で、底面が平坦であるという点は、共通項といえる。最下層黒褐色埴土の上に暗灰黄色砂壤土が覆うという埋まり方は共通しており、ほぼ同時期に同じ目的で掘削されたことが想定される。両者とも、掘り返しを受けたことが1層土の状況から観察される。遺物は、SK07より焼成粘土塊が1点出土している。

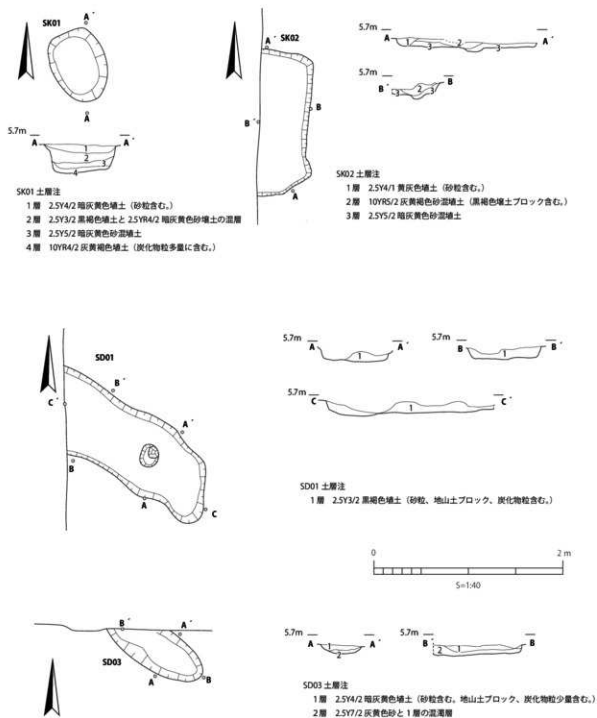


図 10 高堂遺跡 土坑・溝突測図

(3) 溝

SD01

調査区東端、SK02の直ぐ南側で検出された溝である。幅 75～80cmを測る。底面は平坦。

SD02・03

これらの溝は、調査区北西隅部の土坑群の分布域で検出されたものである。主軸方位は異なるが、灰黄色砂埴土の上に暗灰黄埴土が堆積するという過程が共通しており、ほぼ同時期の同じ性格の溝と判断される。幅も、SD02が43cm、SD03が44cmを測り、形態においても類似性が高い。

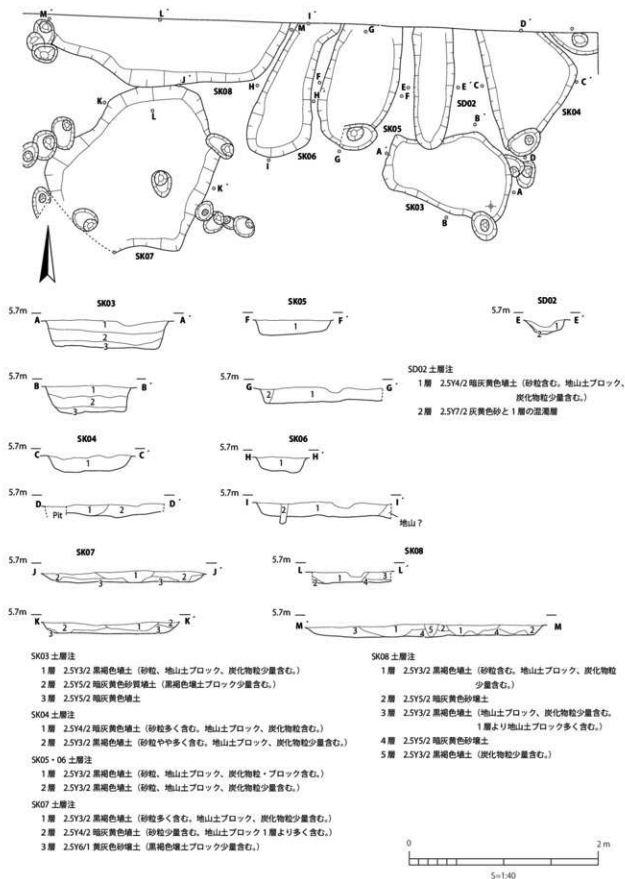


図 11 高堂遺跡 土坑・溝実測図

第5節 出土遺物

はじめに

出土遺物は、概ね古代、中世、近世に分けることができる。その中でも、古代の遺物が主体を占めている。出土量が少なく細片が多いため、詳細な時期は判断に苦しむが、隣接地調査と比較しながら解説を行いたい。

1 古代の遺物

(1) 須恵器 (図 12-1~3)

1・2は甕で、1は体部破片、2は中甕の口縁部破片である。1は、外面に叩き後のカキメが施される。2については、口縁端部の形態から、VI期以降（9世紀4/4頃〜）が考えられる。胎土は、1が能美窯産、2が南加賀産と考えられる。3は底部破片で、坏Bか皿Bが考えられる。胎土は南加賀産と考えられる。2で得られた年代は、県調査区での結果と矛盾がないものと考えられる。

(2) 土師器 (図 12-4・5)

土師器については、実測可能な遺物は特殊品である焼成粘土塊のみであったため、時期の判定には苦しいものがある。ここでは、胎土の特徴から古代遺物と判断して報告する。4・5とも幅は不揃いではあるが、底面が平らで高さ1.6cm前後であり、錘形をなす点が共通項として挙げられる。4は、底面に炭化物の付着が顕著である。5は、串状工具で突き刺した痕跡が3箇所認められるのが特徴である。胎土は、含有物の少ない比較的精良なものといえる。

2 中世の遺物

中世の遺物は少量であり破片も小さいため、詳細な年代観は提示できない。県調査区における14世紀末〜16世紀前半という年代観のなかでは、上限に近いものと推察される。

(1) 瀬戸・美濃 (図 12-6)

平碗の口縁部と考えられる破片が1点出土している。胎土は粗めであり、色調は灰白色である。軸は薄く、粗い貫入が入っており、灰オリーブ色に発色している。後期様式以降のものと考えられる。

(2) 青磁 (図 12-7・8)

輸入磁器である青磁は、碗が2点と器種不明破片1点の計3点が出土している。7は、胎土は緻密であり、釉調は良く、明オリーブ灰色に発色している。片切彫による蓮弁文が施されている。体部小破片であるため法量は不明であるが、龍泉窯系の青磁碗B類（上田分類）と考えられる。年代は14世紀代が推察される。8は青磁碗の底部破片である。軸は透明感のあるもので、底部は露胎である。見込み部分の軸には直径2mm程度の円状の細かいひび割れが生じている。高台部分が欠損しており、詳細は不明である。

3 近世の遺物

(1) 国産磁器 (図 12-9)

9は、碗の底部破片であり、底径で4.2cmを測る。軸は内面が灰白色を呈しているが、外面はやや青みがかっている。高台は内外面及び、底部は露胎である。肥前系と考えられる。

(2) 国産陶器 (図 12-10)

10は、搦鉢の口縁部である。肥前系と考えられ、V期（18世紀末頃）の所産と考えられる。

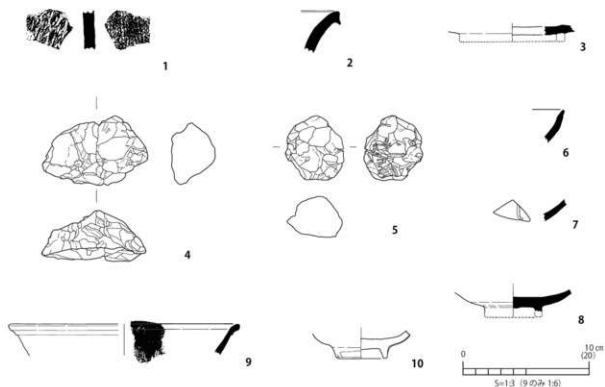


図 12 高堂遺跡出土遺物実測図

第6節 小結

今回の調査区で検出された遺構からは、時期の分かる出土遺物はなく、遺構の帰属年代を確定させるのは非常に困難である。ここでは隣接地の調査状況から検討を行い、小結としたい。なお、近世遺物の出土については、小松市内の水田地帯の調査において広範に見られる現象であり、耕作土混入と判断する。第一に出土遺物総量でみれば、総量が少ないながらも古代の遺物が多い状況にあり、中世の遺物は少ない状況にある。第二に遺構分布の面でみれば、県調査区では中世遺構の分布域は北端部分にあり、当調査区とは約 250 m 離れた位置に所在している。よって、当調査区は中世遺構分布域からは外れた位置にあると考えられる。調査区の位置関係からみれば、弥生時代後期～古墳時代前期遺構と平安時代（9 世紀初頭～9 世紀後葉頃）遺構の分布域に近い。しかし、前述のように当調査区においては、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物は出土していない。その結果、残る選択肢は、平安時代（9 世紀初頭～9 世紀後葉頃）となり、これは出土須恵器から得られた年代間とも矛盾しない。また、掘立柱建物跡の主軸方位も一致することも傍証となろう。よって、当調査区で検出された遺構は、現状では古代の遺構の可能性が高いと考えられる。しかし、当然ながら結論付けるだけの根拠はなく、今後の調査例の増加を待って、再評価が必要である。

引用・参考文献

- イ 石川県埋蔵文化財センター（1990）『小松市高堂遺跡』
- ウ 上田秀夫（1982）「14 世紀～16 世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 2』日本貿易陶磁研究会
- キ 九州近世陶磁学会（2000）『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会 10 周年記念』
- セ（財）瀬戸市埋蔵文化財センター（1996）『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集、愛知県
- タ 田嶋明人（1988）「古代編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会

第 III 章 千代オオキダ遺跡発掘調査

第 1 節 調査に至る経緯等

小松市千代町在住の端野 邦雄氏より、小松市千代町甲 272・273 番地での自動車修理工場建設計画に伴い、平成 12 年 5 月 11 日付けで埋蔵文化財の取り扱いについて、協議書が提出された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である千代オオキダ遺跡に含まれており、隣接地で国道 8 号線小松バイパス建設に伴う発掘調査(以下、バイパス調査区)を行っていた経緯もあり、当該地に遺跡が存在することは確実視された。よって、工事実施の際には、埋蔵文化財に対する保護措置が必要である旨を事業者に伝えた。その後、事業者と協議を重ねたが、当該工事計画が鉄骨建物の建設であったため、工事による埋蔵文化財の破壊が避けられない状況となった。よって、遺跡の破壊が免れない建物部分を発掘調査対象とし、他の部分は簡易舗装を施し盛土保存とすることで合意した。ただし、営利を目的とした建物の建設であったことから、事業者に対し発掘調査費の協力を求めた。しかし、個人経営の零細事業者であるため負担は困難との回答であったため、石川県教育委員会と協議した結果、発掘調査を国庫補助事業として行うこととした。これを受けて平成 12 年 5 月 22 日付けで、事業者より埋蔵文化財発掘調査の実施について依頼書が提出された。平成 12 年 6 月 8 日付けで事業者に対し、埋蔵文化財発掘調査の実施回答を行った。さらに同日付けで、事業者より文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が文化庁長官宛に提出された。これにより平成 12 年 6 月 5 日付けで、石川県教育委員会教育長より、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」が事業者に対し通知され、同日付けで事業者と間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協定書を締結した。発掘調査は、平成 12 年 6 月 19 日から平成 12 年 8 月 9 日の間に、工事により埋蔵文化財が破壊される 330㎡を対象に行った。平成 12 年 8 月 22 日付けで、事業者に対し完了報告を行い、当該地の引渡しを行った。



図 13 千代オオキダ遺跡 調査地位置図

目的とした建物の建設であったことから、事業者に対し発掘調査費の協力を求めた。しかし、個人経営の零細事業者であるため負担は困難との回答であったため、石川県教育委員会と協議した結果、発掘調査を国庫補助事業として行うこととした。これを受けて平成 12 年 5 月 22 日付けで、事業者より埋蔵文化財発掘調査の実施について依頼書が提出された。平成 12 年 6 月 8 日付けで事業者に対し、埋蔵文化財発掘調査の実施回答を行った。さらに同日付けで、事業者より文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が文化庁長官宛に提出された。これにより平成 12 年 6 月 5 日付けで、石川県教育委員会教育長より、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」が事業者に対し通知され、同日付けで事業者と間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協定書を締結した。発掘調査は、平成 12 年 6 月 19 日から平成 12 年 8 月 9 日の間に、工事により埋蔵文化財が破壊される 330㎡を対象に行った。平成 12 年 8 月 22 日付けで、事業者に対し完了報告を行い、当該地の引渡しを行った。

第 2 節 調査の経過

1 現地調査の概要

調査に際し、調査区内に 5m×5m のメッシュを基本として任意に設定した。一部測量時の利便性を考えて、4m 及び 2m のグリッドを設定している(第 14 図参照)。水準点に関しては、隣接するバイパス調査区に設定した 3 級基準点より移設した。

当該地は水田であったため、調査員立会いのもと、表土を重機で除去し、その後人力による遺構検出作業を行っている。湧水対策のため、調査区内周に排水溝を掘削し、ポンプによる汲み上げを行っ

た。遺構検出時に出土した遺物は、グリッドごとに取り上げた。遺構は、任意の箇所に適時土層観察用のアゼを設定し掘り下げた。遺物については、基本的には層位で取り上げる方針とした。

2 調査の経過

発掘調査は、6月19日より着手し、排水溝掘削より開始した。翌日より遺構プラン確認および遺構掘削作業に入った。遺構は、バイパス調査区から続く旧河川跡が検出されており、その旧河川より以南は遺構密度が薄い状況が確認された。また、旧河川以北では、古代の掘立柱建物跡が検出されており、古代集落の分布の広がりを確認するに至った。8月7日までに遺構の掘削を全て完了することができた。8月8日より遺構平面図作成作業を開始した。平面図のうち、コンター測量については、前述の旧河川部分のみ行った。8月9日に全ての作業を完了した。

3 出土品整理

出土遺物は少なかつたため、調査年度中に調査員によって遺物洗浄を行った。注記・接合・トレース作業は報告年度である平成18年度に出土品整理作業員が行った。なお、遺物の分類及び実測作業は調査員が主体となり、作業員の補助を受けて行った。

第3節 既住の調査

千代オオキダ遺跡は、今回の調査以前に、昭和62年度～平成元年度にかけて、石川県埋蔵文化財センター（現財団法人石川県埋蔵文化財センター）によって、発掘調査が行われている。その結果、弥生時代～中世に至るまでの大規模な複合遺跡であることが確認された。また、前述のとおり平成11・12年度に国道8号線小松バイパス建設に伴う調査で、11,000㎡を調査しており、同様の結果を得ている。それらの調査概要は当該報告書を参照して頂きたい。ただし、当該調査区とバイパス調査区は隣接しており、両者に共通する遺構である旧河川跡については、バイパス調査区の成果をもとに概要を記しておきたい。旧河川跡は、幅約10mを測り、梯川本流方向から北への流路が、調査区東端付近で西側に折れており、調査区を横断し東西方向の流れとなっている。時期は、上層と下層部

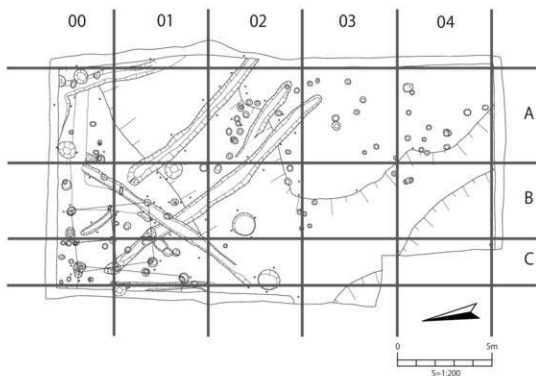


図14 千代オオキダ遺跡 グリッド配点図

分で時期差があり、上層は古墳時代後期～平安時代末、下層は弥生時代後期～古墳時代前半と判断され、古墳時代中期の遺物は出土していない。また、下層以前の流路も確認されている。遺物の出土がなく時期は不明だが、北側肩部より縄文時代後期後葉の深鉢が出土した土坑が検出されており、この時期まで上る可能性がある。さらに、この時期の流路は、調査区東端付近で南側に折れることなく調査区を横断し、直線的である。当該調査との整合性は次節以降で検討していく。

第4節 発見された遺構

1 基本層位について

当該調査区の現況は水田であり、バイパス調査区と同様に、耕作土及び床土直下が遺構確認面である。よって、遺構確認面は削平を受けている可能性が高い。また、掘乱も受けており、調査区を南北に縦断する溝（暗渠？）が調査区中央部に存在する状況であった。遺構確認面の標高は、概ね3.0m～3.1mの間に収まる値を示し、バイパス調査区の近接地部分とほぼ同じ高さである。

2 弥生時代中期～古墳時代前期の遺構

(1) 土坑

SK03・SK04 B02Grに位置し、SD01より下位で検出された直径118cmを測る円形土坑である。深さは、最下底面で45cmを測るが、上面はSD01による浸食作用を受けており、実際はさらに深かったことが予想される。底面は鉢鉢状を呈する。灰黄褐色埴土層で埋るが、遺物は出土していない。但し、SD01との境で弥生時代中期後葉（磯部式）の土器が出土しており、少なくともそれ以前の時期であることはいえる。SK04はC02Grに位置し、SD01より下位で検出された直径100cmを測る円形土坑である。遺物は出土していないが、出土地点や堆積状況から、SK03と類似性が認められ、同時期と推察される。ただし、底面が平坦な点や、覆土において灰味が強く明るい色調を示すという違いが認められる。

(2) 溝

SD01 北東から調査区中央付近で折れ、南下しながら調査区を縦断する大溝である。但し、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む層は、A区・B区付近のみに残存する5層部分のみである。他の地点では、5層の堆積は確認されておらず、当該期以降の流れにより侵食されたと考えられる。それは、各地点で上層から当該期の土器が出土する点や、A区・B区は水流が南下する際に流れが弱まる部分と考えられることから推定される。バイパス調査区（38号溝）では当該期の遺物の廃棄場となっていたことから、この部分からの遺物が流れたことが推察される。遺物の出土量が少なく、接合率が低いことから当該地点での廃棄行為とは認めがたい。今回の調査では、中期（磯部式）以前に遡る堆積が確認されたことや、縄文時代晩期終末の土器が出土したことが特筆される。バイパス調査区38号溝からはこれらの時期の遺物は出土しておらず、その下位に確認された流路（70号溝）に該当する可能性が考えられる。70号溝は、肩部に検出された縄文時代後期後葉の土坑との関係が推察されており、当該流路の形成及び存続時期を考える上で貴重な発見となった。

3 古代の遺構

(1) 掘立柱建物跡

SB01 B・CO・1Grで検出された、梁行2間×桁行2間の総建物である。柱間寸法は、梁行198cm（平均）、桁行158cm（平均）を測る。面積は梁行396cm×桁行316cmで約12.5㎡、主軸はN-1°-Eである。柱間配置に若干歪みが認められ、桁行B-B'間が狭い。柱穴は約35cm～50cmの不整楕円形であり、2段堀が施されている。深さは、30～35cm前後が平均的だが、約8cmと浅いもの（P

2) も存在する。柱部分は、約 20cm～27cmの大きさを測る。埋土は、褐灰色埴土である。

SB02 C0・1Grで検出された、3間分の柱列であり、調査区外に延びる建物と考えられる。柱間寸法は、190cm(平均)を測る。建物東辺570cmが確認され、主軸はN-14°-Eである。柱間配置はP1-P2間がやや広い配置で、若干の歪みもみられる。柱穴は約42cm～50cmの不整楕円形であるが、SB01のように2段階ではない。切り合いから、SB01より後出と判断され、出土遺物から、IV2期頃(田嶋編年(田嶋1988)、以下、特に断らない限り同様)が推察される。

(2) 土坑

検出された3基の土坑からは、遺物が殆ど出土しておらず、廃棄土坑の様相を呈していない。

SK01 B01Grに位置し、SD01西岸肩部に掘削された直径86cmを測る円形土坑である。深さは42cmを測り、断面台形状を呈する。灰黄褐色埴土層で埋まるが、遺物は出土していない。但し、SD01の第3層が堆積した以降に掘削されたようである。

SK02 A00Grに位置し、長軸79cmを測る楕円形土坑である。深さは39cmを測る。断面台形状を呈するが、壁面は内湾して立ち上がっており、丸みを帯びている。灰黄褐色埴土の単層で埋まるが、遺物は須恵器横瓶と土師器ハケ囊の小片が出土しており、横瓶の時期からIV期頃と考えられる。

SK05 A00Grに位置し、長軸78cmを測る楕円形土坑である。深さは36cmを測り、断面台形状を呈する。灰黄褐色埴土の単層で埋まり、SK02に類似している。遺物は土師器ハケ囊小片が出土しているが、時期は判断できない。但し、切り合いからSD02より古いことがいえる。

(3) 溝

SD01 古代の溝は1～4層部分が該当する。当該時期の遺物量が突出して多いが、中でもSD01出土土器が大部分を占める。特に、流れの緩慢な箇所にあたるコーナー部から多く出土している。遺物は破片が多く、B区-F区間等長距離接合も観察されるが、調査区は古代集落域に含まれるため、この地での廃棄行為があった可能性も否定できない。遺物は、土師器等に上層-下層間の接合が認められるため、混在している可能性が高い。時期は出土遺物から判断すれば、上限の時期は6世紀後半頃、下限は10世紀後半頃と判断される。

SD02 A00～01Grに位置する溝で、調査区北東端で西方向へ折れている。最大幅約80cm、深さ30cm程度である。埴土で埋っている。高低差は、北側が高く、南側が低くなっている。断面から、SD01が2層段階まで埋った状態で掘削されており、1層段階が形成される以前に埋まっていることが観察される。SD01と混在する部分も多く、出土遺物からは時期は判断できない。

SD03 A00～C02Grに位置する北北東から南南西方向への溝である。最大幅約70cm、深さ25cm程度である。埴土で埋っており、部分的に重埴土の堆積も観察される。断面から、SD01が2層段階まで埋った状態で掘削されており、切り合いからSD04より後出であると判断される。遺物は、V2～VI1期頃の土師器鍋片が出土している。

SD04～07

A02・03～C00Grの範囲に位置する北西から南東方向への同軸をとる溝の一群である。全て埴土で埋っており、SD01と重なる部分が一番低いという特徴を持つ。SD04は最大幅約88cm、深さ40cm程度、SD05は最大幅約32cm、深さ10cm程度、SD06は最大幅約88cm、深さ60cm程度、SD07は最大幅約70cm、深さ15cm程度である。断面からは、SD01が2層段階まで埋った状態で掘削されたものと判断される。遺物は、SD01と重なるため古代遺物の混入は避けられない状況で、実際これらの溝の出土遺物はSD01出土遺物と接合関係にある。さらに、SD02・SD04・SD06・SD07はSD01下層期の遺物も出土しており、SD01の遺物が混在していることは明白である。よって、時期は特定

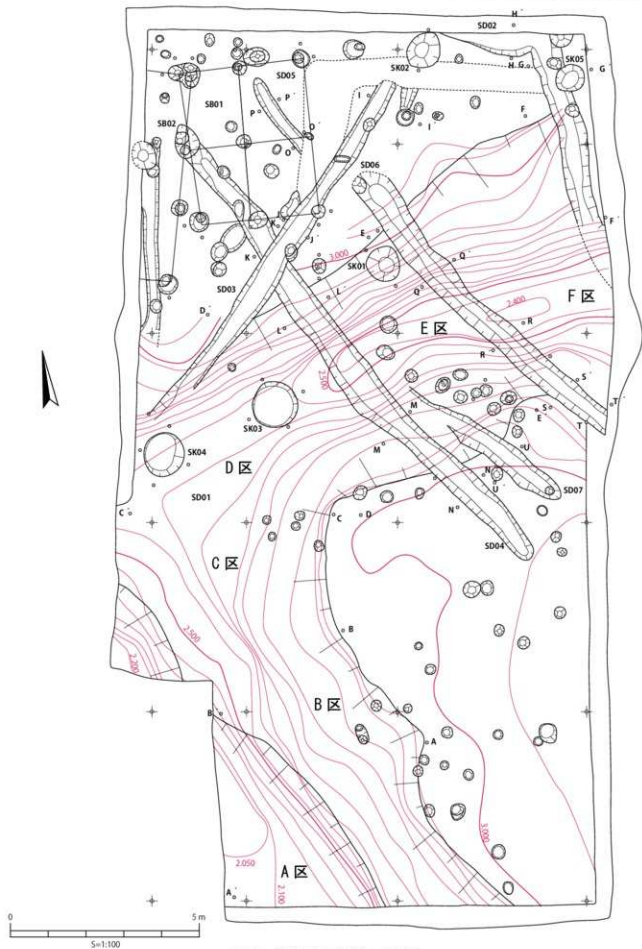
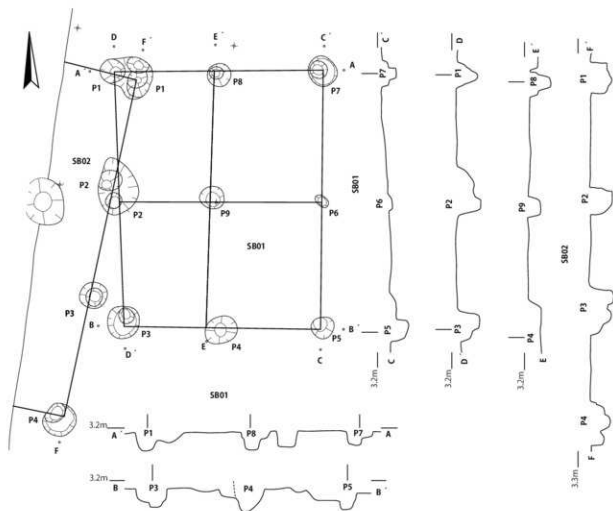
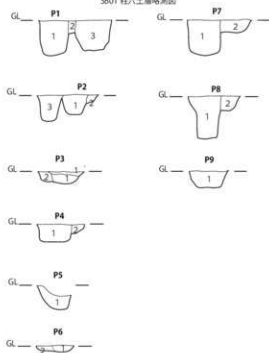


図15 千代オオキダ遺跡 平面図



SB01 柱穴土層略測図



SB01 柱穴土層注

- 1層 10YR5/1 褐灰色壤土 (にふい黄褐色土ブロック (1cm大) 混入)
- 1'層 10YR5/2 灰黄褐色壤土
- 2層 10YR6/2 灰黄褐色壤土 (にふい黄褐色土ブロック混入)
- 3層 10YR5/1 褐灰色壤土 (ややにふい黄褐色土混入)



図 16 千代オオキダ遺跡 掘立柱建物跡実測図

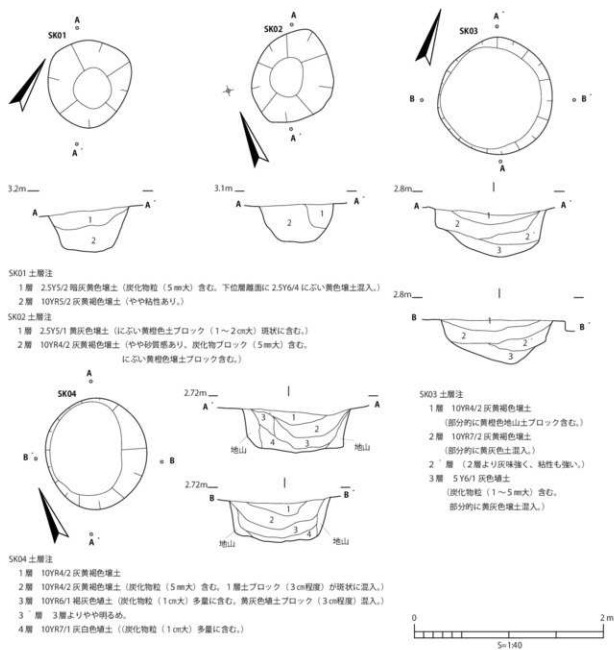


図 17 千代オオキダ遺跡 土坑実測図

し難い状況にある。ただし、SD06においては、最下層(4層)に漆町編年5・6群(白江期)の遺物が伴っている。また、その4層自体はS-S'・T-T'地点にのみ確認されるもので、上位の1~3層と関連していないように見える。加えてその地点は、SD01にあまり影響を受けない位置ともいえ、4層部分が白江期の溝である可能性も残されている。バイパス調査区でも、細長くて浅い溝は検出されているが、その性格は不明である。

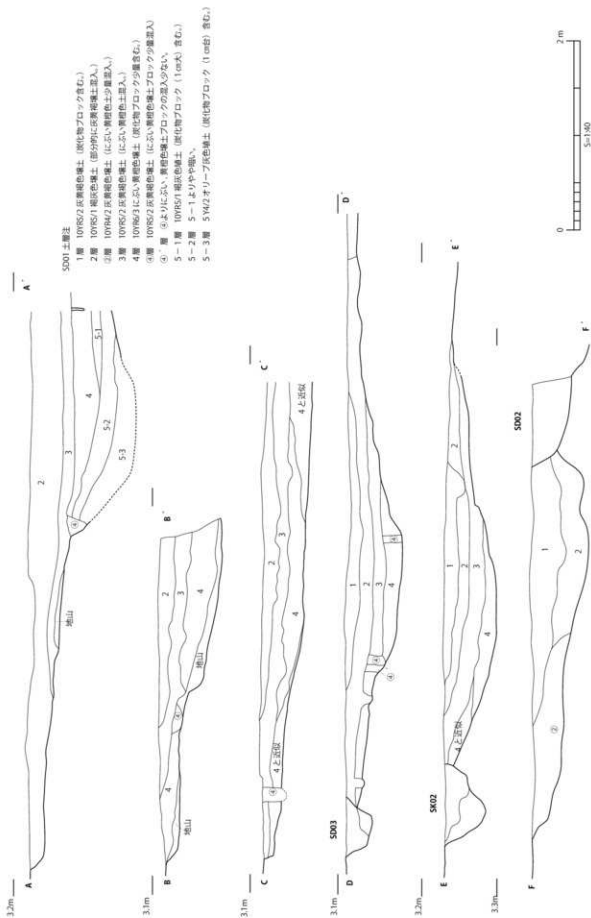


図 18 千代オキヤダ遺跡 SD01 断面図

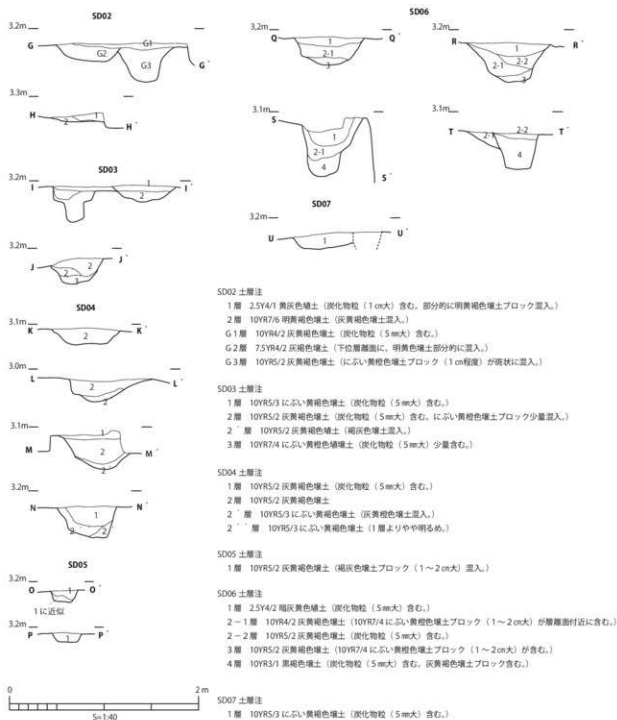


図 19 千代オオキダ遺跡 溝断面図

第5節 出土遺物

はじめに

当該調査区の出土遺物では、古代遺物が2,269点（須恵器432点、土師器1,837点）と大部分を占める。次に、弥生時代中期～古墳時代前期遺物が156点と少量存在し、中世遺物は8点のみである。

1 縄文時代晩期終末の土器

SD01 出土土器（図20-1）

深鉢の同一個体破片が、まとまって出土している。外面に条痕が施され、内面はナデ調整が施されている。図化した破片には、孔が穿たれており、割れを修復した痕跡と考えられる。SD02 上面からも同一個体の破片が出土しており、やや散逸した状況にある。

2 弥生時代中期後半～古墳時代前期の土器

SK03 出土土器（図20-2）

上層より出土している。口縁部外面にスス、内面にコゲの付着が認められる。調整は、口縁部に横方向のナデが施された後、端部にヘラ状工具により斜め方向に刻みが施される。時期は、弥生時代中期後半（磯部～専光寺期）と考えられる。

SD01 出土土器（図20-3～11）

主として5層以下の層からの出土である。ただし、古代段階の流れに攪拌されたり、肩部の土器が流されたりしたためか、上層からも出土している。3・4は、壺形土器である。4は頸部より上位を欠くが、二重口縁を持つ壺と考えられる。時期は、白江期（漆町編年5・6群）以降と推察される。5～10は、甕形土器である。5は、口縁部外面に擬凹線文、内面に横方向のミガキが施されており、精良胎土を使用した精製土器である。頸部の下部外面には、板状工具の痕跡と二枚貝による刻みが観察される。その胎土は梯川流域のものとは異なるようで、搬入品の可能性も考えられる。6は、甕形土器の胴部以下の部分である。外面にタテハケ調整、内面にタテ・ヨコのケズリ調整が施されている。7は、口縁部外面に擬凹線文が施されている。8は、口縁部外面のススの付着が激しい。9は、口縁部外面に二枚貝により擬凹線文が施されている。10は、内外面の磨耗が激しく調整不明である。時期は、5～8が法仏期（漆町編年1・2群）、9が同末期、10が月影～白江期（漆町編年3～6群）頃と考えられる。11は、高環形土器で、内外面ともミガキ調整が施されているとみられるが、器表面の状態が悪くはっきりしない。時期は法仏期と考えられる。

SD02～06 出土土器（図20-12～14）

現段階では、何らかの作用によりSD01から混入したと判断されるものである。12は甕形土器である。口縁部外面に擬凹線文が施されているようだが、摩滅により不明瞭である。時期は、法仏末期～月影期（漆町編年2～4群）と考えられる。13は、高環形土器の脚部である。調整は摩滅により、観察不可能である。時期は、法仏期～月影1期（漆町編年1～3群）と考えられる。14は、小型の甕形土器の頸部である。内外面にコゲが付着している。時期は、古府期～高島期（漆町編年8～10群）と考えられる。

3 古墳時代後期～古代の土器

SB02 出土土器（図21-1）

P-3より土師器ロク口裏口縁部破片が出土している。端部は若干上方に摘み上げた形態をしており、時期はIV2期頃と考えられる。

SD01 出土土器 (図 21・22 - 2 ~ 58)

出土遺物の9割以上は当該遺構出土である。個別時期については観察表を参照して頂きたい。

(1) 須恵器

2は坏Hの身である。小型・扁平化しており、最終段階のものと考えられる。3～10は坏B蓋である。3は、端部がしっかりと折り曲げられており、外側に屈曲している。4は、端部が断面三角形形状を呈している。6は、ほぼ完形に復元できた唯一の個体である。天井部が丁寧に削られており、歪みもなく精緻な作りである。7～9は、体部が端部付近で屈曲する器形であり、折り曲げも貧弱である。特に、7・8はⅡ類の重ね焼痕が顕著である。11～19は坏B身である。浅い箱型というⅢ期の特徴をもつ個体比較的多く出土している。13は、体部外面に沈線状の段が2段認められる。14は、底面にヘラ記号「|」が施されている。17は、高台内側に段が施されている。18は、体部下半から屈曲して立ち上がる器形である。19は、小型のもので体部内面上位に段があり、墨痕が確認される。20～28は坏Aである。23は、小振りな器形であり、ナデ工具の痕跡と考えられる沈線状の線が体部内側に観察される。胎土は辰口産である。26も辰口産の製品である。当該資料では、辰口産の製品はⅣ2期頃から確認され、バイパス調査区と同様にその割合は低く、主体は南加賀産が占めている。28は、深手の塊形化した器形であり、有蓋の可能性も考えられる。29・30は盤Bである。29は、完全に酸化焼成品となっている。31～35は盤Aである。32は、見込み部のナデが強過ぎたためか、底部が押し出され丸味を帯びている。33・34は、浅く体部が外傾し、既に小型化したものである。35は、墨書土器であり、文字の一部と考えられるが、「可」とみられる部分が確認された。壺・瓶類は、他器種に比べ出土量が非常に少ない。36は、瓶AかBの頸部で、二条の沈線が確認できる。37は、瓶Aか壺Bの底部と考えられる。襖は、38の中襖の頸部が、比較的破片がまとまって出土した個体である。その他、甕が出土しており、39は口縁端部、40は頸部にそれぞれ波状文が施されている。頸部の狭い器形と考えられ、6世紀後半頃まで下る可能性がある。また、把手のみ図化したのが、提瓶(41)も出土している。

(2) 土師器

42は内黒土師器碗である。平底で、内面にミガキ調整が施される。同地区で出土している須恵器坏H身(2)と同時期の可能性もある。43～49はロクロ整形の赤彩碗である。底部破片のみであるため、Ⅳ～Ⅴ期としか判断できない。43は、底径10cmを測る大型品で、Ⅳ1期頃の可能性がある。46は、深手碗タイプと判断できる。50は、形態・法量から碗Aと判断される。SD01出土資料では上限を示すもので、Ⅶ2古期(出越編年Ⅱ-2新时期)頃と考えられる。51は内黒高坏の脚部であり、外面にハケ調整の痕跡が残る。前述の坏H身(2)か、甕(39・40)の時期に該当する可能性がある。52は非ロクロ整形甕である。内面にヨコ方向のケズリ調整が施されているが、外面は磨耗が激しく調整は観察できなかった。時期は出土遺物の様相から、7世紀前半頃が推察される。53～56はロクロ整形甕で、56はロクロ整形小甕である。口縁端部の形態から、53・54よりは55が新しくⅤ期の製品と考えられる。57はロクロ整形鍋である。口縁帯は短く、端部は上方につまみ出されている。58はロクロ整形甕である。タタキ調整が施されていたようだが、摩滅により不明である。

SD02 出土土器 (図 22 - 59)

59は坏B身である。体部外面に、ナデ工具の痕跡と考えられる沈線状の線が5条確認された。

SD03 出土土器 (図 22 - 60・61)

60は土師器ロクロ整形鍋である。上方につまみ上げられた口縁端部形態や、薄手なつくりでロクロナデのみの調整などから、Ⅴ2～Ⅵ1期頃の製品と考えられる。61は土師器甕と考えられる。底

部が内側へ舌状に伸びる形態である。タタキ調整が施されている。

SD04 出土土器 (図 22 - 62)

62 は、坏 A であり、中層から出土している。

SD07 出土土器 (図 22 - 63 ~ 67)

63 ~ 65 は須恵器坏 B 蓋である。63 は、口縁端部はしっかり折り曲げられており、断面三角形形状を呈する。65 は小型の特異な器形であり、端部折り曲げは貧弱である。66 は坏 B 身である。箱型器形であり、体部はナデによりやや外反気味に立ち上がる。67 は鉢 E である。

P i t 出土土器 (図 22 - 68 ~ 71)

須恵器大甕 (68)、土師器赤彩碗 (69)、土師器ロクロ整形甕 (70・71) を図化した。68 は、口縁端部が内側に巻き込むタイプのものであり、口縁帯外面に波状文が施されている。69 は、底径が大きいことや、立ち上がりの角度から浅身碗と推察される。

包含層出土土器 (図 22 - 72 ~ 77)

須恵器坏 B 身 (72・73)、須恵器瓶 A (74・75)、須恵器壺 B (76)、土師器内黒高坏 (77) を図化した。72 は、体部がやや外傾するが、浅身の箱型の器形であり、底部にヘラケズリ調整を施す。内面にも降灰しており、焼成時に蓋が重ねられてなかったようである。73 は、坏 B 身大である。口径が 15 cm 台と縮小しており、体部が外傾して立ち上がる器形である。74 は、肩の張るタイプである。75 は、算盤玉型の体部を持つタイプであり、傾斜転換点に一条沈線が施されている。後者の方が新しいと考えられる。76 は、底部付近の図だが、体部破片の同一個体から壺 B であることが確認された。77 は、脚部の破片であり、外面にミガキ調整が施されている。

4 他 の 遺 物

(1) 土 鍾 (図 23 - 1 ~ 7)

土鍾は、大 3 点・中 2 点・小 3 点の計 8 点出土 (作図は 7 点) している。全て管状土鍾であり、側縁部が膨らむ形態である。また、破損品であり、使用を経た状態が観察される。胎土から、細かい白色粒を含む 1・3・6、黒色微細粒を多量に含む 2・7、粒の大きい白色粒を含む 3・4、赤色粒が目立つ 5 の 4 系統に分類される。時期は、胎土から判断すれば、古代の可能性が高い。1 は SK02、2 ~ 5 は SD01 出土である。

(2) 石 器 (図 23・24 - 1 ~ 6)

1 は礫石器である。平坦な面と側面に研磨痕、先端に弱い敲打痕が観察される。2 ~ 4 は砥石であり、全て仕上げ砥である。4 は 4 面とも使用されている。5 はすり石と考えられる。1 ~ 5 は、全て SD01 からの出土である。時期は判断し難いが、1・5 は弥生時代後期、2 ~ 4 は古代と考えている。6 は、管玉製作資料と考えられ、剥片に分類される。管玉製作資料はバイパス調査区からも出土しており、弥生時代後期の資料と考えられる。

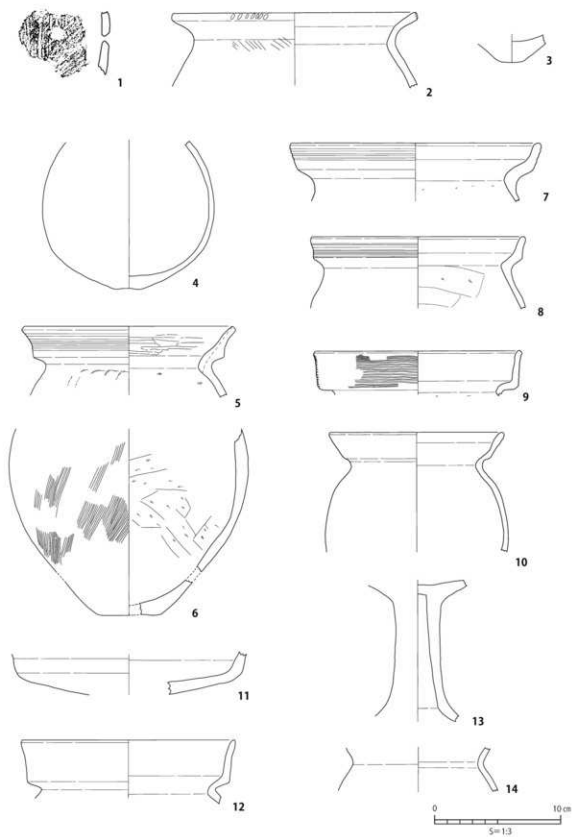


図20 千代オオキタ遺跡 出土遺物実測図1 (縄文時代晩期終末～古墳時代前期)

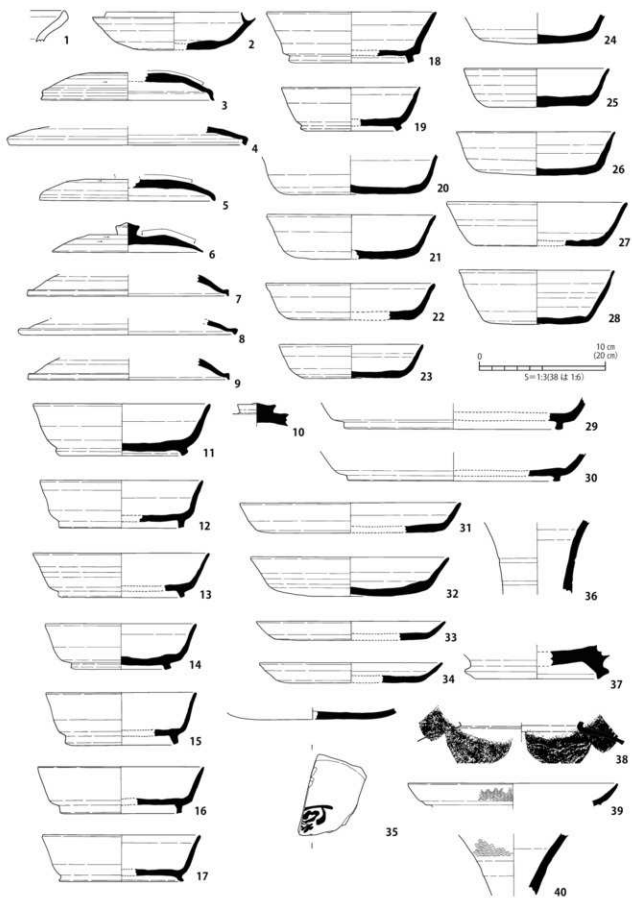


図21 千代オオキダ遺跡 遺物実測図2(古墳時代後期~古代)

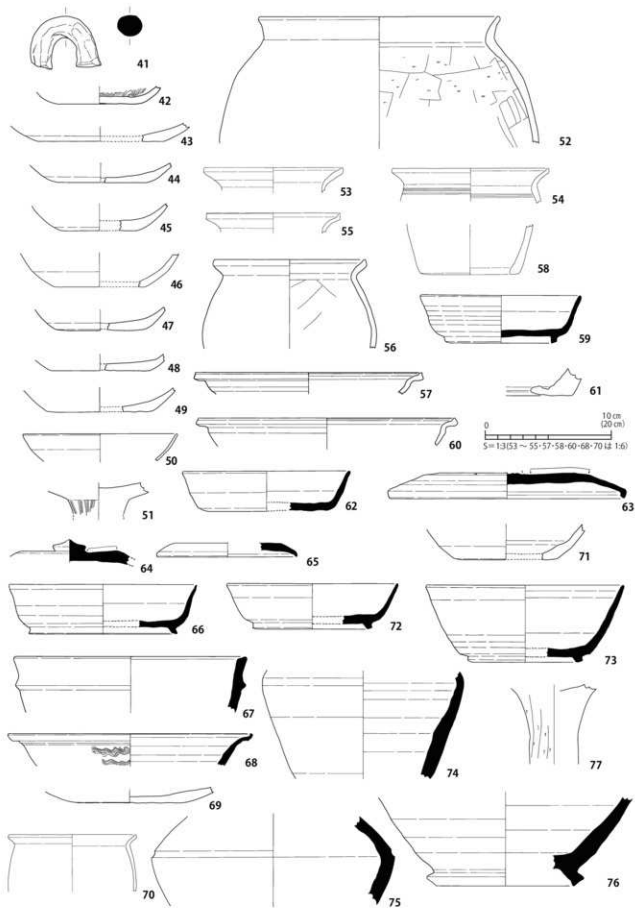


図22 千代オオキダ遺跡 遺物実測図3(古代)

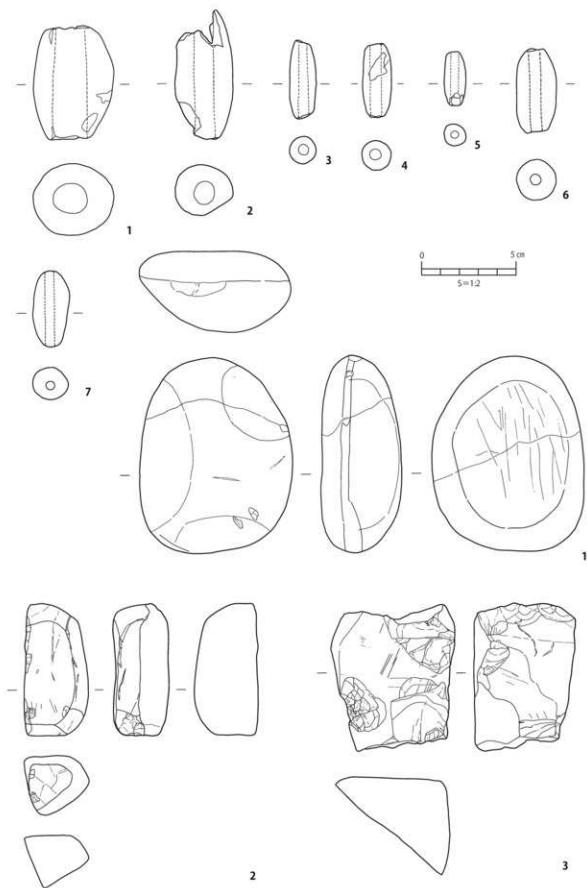


图 23 千代才オキダ遺跡 出土遺物実測図(土錘・石器)

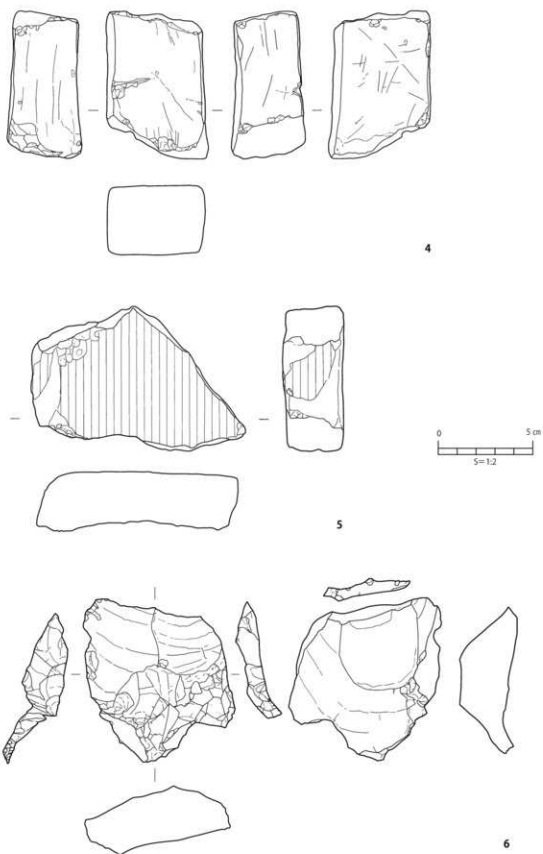


図 24 千代オオキダ遺跡 出土遺物実測図(石器)

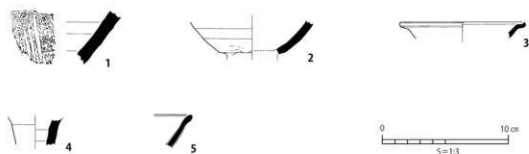


図 25 千代オオキダ遺跡 出土遺物実測図(中世)

5 中世の遺物

図化した遺物の他に、中世土師器皿小片が1点確認されている。

(1) 珠洲焼(図 25-1)

1は挿鉢の体部破片である。やや幅広の櫛目状工具により、卸目が施されている。時期は判断できない。出土地点がSD01となっているが、耕耘等により混入したものと判断される。

(2) 瀬戸・美濃(図 25-2~4)

全て攪乱部分から抽出された遺物である。2は天目茶碗の体部であり、器表面に鉄化粧が施されていることから、後期様式以降の製品と考えられる。3は折縁小皿の口縁部破片である。釉は鉄釉である。4は花瓶1類等の細首型機種の頸部破片と考えられる。釉は鉄釉である。

(3) 青磁(図 25-5)

龍泉窯系青磁碗の破片が1点出土している。口縁端部が外反するD類(上田分類)にあたり、口縁端部が丸いものである。釉は厚手で透明感があるが、細かい貫入が入っている。色調は、オリーブ灰色に発色している。時期は、14世紀後半頃と考えられている。P13出土である。

第6節 小結

隣接するバイパス調査区の成果と比較しながら、本調査区の成果をまとめてみたい。まず、バイパス調査区から続く遺構であるSD01(バイパス調査区では38号溝)が検出されたことが大きな成果といえる。これにより、バイパス調査区から北上して、本調査区で南下するという流路が確定された。また、バイパス調査区では出土遺物中において空白時期であった、縄文時代晩期終末と弥生時代中期後葉の土器が出土したことも特筆される。縄文時代後期後半から弥生時代後期まで断絶していた訳ではなく、継続して流路が存在した可能性が一段と高くなった。ただし、バイパス調査区で確認された古墳時代前期における墓域形成は、本調査区では確認されなかった。西側への広がりはなく、流路沿いに東側へ展開されていたものと推察される。次に、掘立柱建物の時期について検討する。本調査区では、2棟の掘立柱建物が出検されており、切り合いからSB01よりSB02の方が新しいことが判明している。まず、SB01だが主軸方位からみれば、バイパス調査区における古代1期のグループに該当し、時期はⅡ期頃に相当する。しかし、本調査区出土遺物では、この時期の遺物が殆ど認められない状況にあり、SB01の時期に当てはめるには疑問が残る。SB02より前の時期における主軸方位の異なる別のグループの建物という可能性も考えられる。SB02については、主軸方位からみれば古代Ⅲ期のグループに合致し、時期はⅣ2古期頃に相当している。柱穴出土遺物の時期と合致しており、

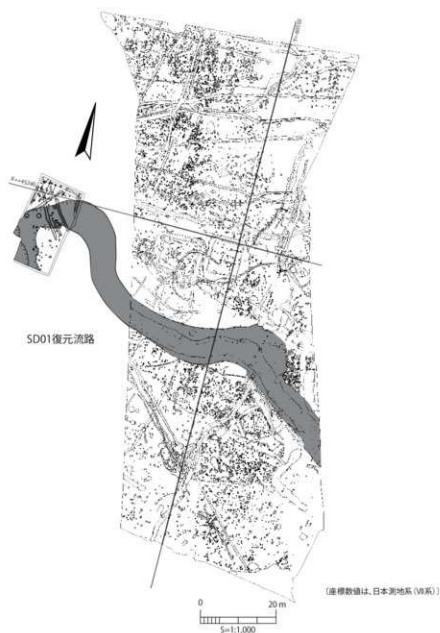


図 26 千代オオキダ遺跡 SD01 推定流路復元図

本調査区出土遺物においても出土量の多い時期で矛盾はしていない。当該期はバイパス調査区において、律令祭祀的な色彩が強いとされる横板組の井戸が使用された時期であり、井戸を包括する区画内では調査区西辺寄りでは建物が検出された状況であった。今回、より西側で建物が確認されたことにより、井戸の西側において祭祀を担う建物群が展開していたようである。また、井戸東側は区画内において無遺構地帯となっており、広場として確保されていた可能性も考えられる。さらに、本調査区出土土師器食器において、当該期の赤彩椀が多く出土していることも祭祀性を考える上で重要である。最後に、出土遺物の様相をみておきたい。ただし、ここに示す数値は、接合後（同一個体も可能な限り判定した）の破片数を基にした統計処理であり参考程度にして頂きたい。弥生時代後期～古墳時代前期の土器群に関しては、バイパス調査区とほぼ同様の様相であった。須恵器については、食器と貯

蔵具の比率が約 84%と約 16%なり、食器の割合が高い。坏 A と坏 B の比率は、坏 A 約 71%、坏 B (数値の大きい蓋数採用) 約 29%となり坏 A に主体がある。数値に差はあるが、両者ともバイパス調査区と同様の傾向が認められる。土師器は、食器が約 6%、煮炊具が約 94%となり煮炊具に主体がある。食器に主体があるバイパス調査区と異なるが、これは本調査区において 10 世紀以降の遺物が殆ど出土しておらず(特に 11・12 世紀は全く存在しない)、逆にバイパス調査区はその時期が遺跡の最盛期となるといふ様相の違いに起因する結果である。須恵器食器が卓越する時期が主体である本調査区においては、当然の結果である。ただし、前述の通り食器内において赤彩椀が約 52%と主体を占め、出土点数でも 43 点とバイパス調査区の 16 点を大きく上回る結果となっている。全体傾向として大きく異なる点は、第一にバイパス調査区では 2 割弱程度存在した、Ⅱ期の遺物が殆ど認められないことである。第二に、前述のとおり古代後半期以降の遺物が殆ど認められない点であり、当該期の遺構が存在しないことから、本調査区は当該期の集落域から外れる可能性が高い。さらに、中世期の遺物も 8 点のみであり、3,764 点出土したバイパス調査区とは全く異なる様相である。明確な中世期の遺構も存在しないことから、当該期においても集落域から外れていたと判断される。

引用・参考文献

- イ 石川県立埋蔵文化財センター(1986)『漆町遺跡 1』
ウ 上田秀夫(1982)「14 世紀～16 世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 2』日本貿易陶磁研究会
カ 金沢市教育委員会(1996)『西念・南新保遺跡Ⅳ』、石川県
キ 北野博司(1988)「重ね焼きの観察」『辰口西部遺跡群 1』石川県立埋蔵文化財センター
セ (財)瀬戸市埋蔵文化財センター(1996)『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集、愛知県
タ 田嶋明人(1988)「古代編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)』北陸古代土器研究会
テ 出越茂和(1997)「古代後半期における椀皿食器(後)」『北陸古代土器研究』第 7 号北陸古代土器研究会
ハ 花塚信雄(1985)「叩き目文の原形特定—生産組織の解明に向けて—」『辰口湯屋古窯跡』辰口町教育委員会、石川県能美市
ホ 北陸中世土器研究会編(1997)『中・近世の北陸—考古学が語る社会史』桂書房
モ 望月精司(1999)「越前・南加賀地域の古代須恵器貯蔵具」『北陸古代土器研究』第 8 号北陸古代土器研究会

なお、Ⅱ・Ⅲ章を記すにあたり、望月精司、宮田明、坂下義規、下濱貴子の各氏にご助力を賜った。

表 3 凡例

胎土：緻密・密・やや粗・粗の 4 段階で判定。焼成：良、やや不良、不良の 3 段階で判定。

() 数字は復元値。

表 4 凡例

須恵器胎土：A = 辰口産、C = 南加賀産、C 良 = 南加賀産精良胎土

土師器胎土：① = 白色微砂粒多量に含む。① B = 微砂粒少なめで精良。① C = ① に赤色粒を多く含む。

② = 3mm 大粒少量含む、器表面は剥離する。

② B = 煮炊具系。混和材多く、石英粒が目立つ。

③ 食器系。精良胎土。③ B = 白色粒、赤色粒少量含む。

③ C = 赤色粒大を含む。長石粒を少量含む。

④ 微砂粒多く含む、赤色粒大が目立つ。

⑤ 微砂粒を多量に含む、石英粒が目立つ。

焼成：焼締まりにより、上、中、下の 3 段階で判定。

() 数字は復元値。

表 2 千代オオキダ遺跡 石器観察表

番号	遺構名	出土地点	種別	石質	重量 (g)	長さ	幅	厚さ	備考
1	SD01	D 上層	礫石器	フロピライト	525.00	10.4	8.05	4.3	
2	SD01	D 上層	砥石	酸化凝灰岩	87.69	6.95	(3.4)	2.8	
3	SD01	C	砥石	酸化凝灰岩	253.31	(7.75)	(6.55)	(5.0)	
4	SD01	D 上層	砥石	酸化凝灰岩	230.15	(7.75)	5.25	3.6	
5	SD01	B・C	すり石?	デイスait	310.50	(7.5)	(10.65)	3.2	
6	包含層	A O Gr	碧玉製作資料	チャート	27.25	4.32	3.67	1.45	刷片

単位: cm () は残存値

表 3 千代オオキダ遺跡 弥生時代中期～古墳時代前期土器観察表

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口径	最大径	高さ	胴径	底高	底厚	脚柱径	脚柱高	備考
2	SK03	上層	甕	7.5YR8/3 浅黄橙	密	直	19.2			16.0					
3	SD01	F 区上層	甕	5YR7/3 に赤み	中	中				1.0			1.65		
4	SD01, SD04	F 区上層, C 区上層	甕	5YR7/4 に赤み	中	中		13.6							二重口縁?
5	SD01	A 区 5 層	甕	10YR8/2 灰白	緻密	中	中	16.4		13.2					
6	SD01	A 区 5 層, B 区 5 層	甕	10YR8/2 灰白	中	中		19.0	5.1						
7	SD01	D 区 側部	甕	10YR8/2 灰白	密	中	中	19.7		16.0					
8	SD01	A 区 5 層	甕	10YR8/4 浅黄橙	中	中		16.9		14.9					
9	SD01	B 区 5 層	甕	10YR8/2 灰白	緻密	直	16.2			(13.2)					
10	SD01	D 区, D 区上層	甕	5YR7/4 に赤み	緻密	中	中	13.7	14.6	10.4					
11	SD01	上面	高坏	10YR7/3 に赤み	中	中									坏部
12	SD02	B 区 5 層	甕	10YR8/2 灰白	中	中				2.8		(2.1)	1.0		
13	SD04	C 区上層	高坏	10YR8/2 灰白	中	中								3.5	胴部
14	SD06	D 区	甕	7.5YR8/3 浅黄橙	中	中				10.3					

単位: cm

表 4 千代オオキダ遺跡 古墳時代後期～古代土器観察表

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口径	高さ	底径	胴径	胴部径	胴部径	底径	底厚	脚柱径	脚柱高	備考
1	SD02	F3	口付口	密	赤	上											N1 ~ 2
2	SD01	B 区上層	坏	赤	赤	上	10.7	3.0	8.6				2.25				内面青灰色, 11/36 1.2
3	SD01	D 区上層	坏	赤	赤	中	13.6						1.51				6/36 皿 3 ~ 皿
4	SD01	F 区上層	坏	赤	赤	上	18.8										内面灰色, 重 1, 3/36 皿
5	SD01+02	F 区	坏	赤	赤	中	13.8						1.11				内面黄灰色, 10/36 N1
6	SD01, SD01+02	B・C・D 区上層/洋区	坏	赤	赤	上	11.9	2.35					0.45	1.95/1.0			内面青緑灰色, 重 1, 23/36 N1
7	SD01	B 区上層	坏	赤	赤	上	17.8										重 B a, 4/36 V1
8	SD01+02, SD07	F 区/D 区上面	坏	赤	赤	上	15.8										5/36 V1
9	SD01+02	F 区	坏	赤	赤	上	17.0										重 B a, 4/36 V1
10	SD01	C 区上層	坏	赤	赤	上							3.0/0.8				内面灰色, 内面部皿, 重?
11	SD01, SD01+02, SD07	D 区上層/洋区/D 区上面	坏	赤	赤	上	14.0	4.15	9.8				3.2				内面青灰色, 10/36 皿
12	SD01	C・D 区上層, B・C 区	坏	赤	赤	上	12.9	3.8	9.2				2.80				内面灰色, 12/36 皿
13	SD01	D 区	坏	赤	赤	上	14.0	3.55	9.4				2.6				2/36 皿
14	SD01, SD04	B 区, D 区上層/ C 区上面	坏	赤	赤	上	11.9	3.65	7.0				2.6				フタ取付? 11, 8/36 皿 ~ N1
15	SD01	B 区上層	坏	赤	赤	上	12.0	4.2	8.2				3.00				内面灰色, 2.5/36 N1
16	SD01, SD07	D 区上層/洋区上層	坏	赤	赤	上	13.2	3.75	8.8				3.25				3/36 N1
17	SD01	D 区上層	坏	赤	赤	上	12.5	3.7	8.5				3.25				3.5/36 N1
18	SD01	C・D 上層	坏	赤	赤	上	13.4	4.05	8.0				3.05?				6/36 N1
19	SD01	D 上層	坏	赤	赤	上	11.0	3.5	7.2				3.25?				内面黒褐色, 11/36 N2
20	SD01, SD04, カタラ	C・D 区上層/ C 区上面	坏	赤	赤	中			11.2								
21	SD01, P-1	D 区上層	坏	赤	赤	上	13.5	3.5	9.0				2.8				3/36 皿 ~ N1
22	SD01	C 区上層	坏	赤	赤	上	13.4	2.9	10.2				3.23				6/36 N2 古
23	SD01+02, SD04	F 区/ C 区上面	坏	赤	赤	上	11.4	2.7	8.0				2.25				14/36 N2 古
24	SD01	A 区上面, F 区上層	坏	赤	赤	中			8.9								N2
25	SD01, SD07, カタラ	C・D 区上層/ C 区上面	坏	赤	赤	中	11.5	3.0	8.2				2.2				14/36 N2
26	SD01, SD04, SD07	C・D・E 区上層/A・B 区上面/洋区上層	坏	赤	赤	上	12.6	3.5	9.9				2.8				3/36 N2 新
27	SD01, SD01+02	F 区上層/洋区	坏	赤	赤	中	14.3	3.5	10.3				3.00				5/36 V1

房号/名称	施工地点	部種	色調	施工	高さ	幅高	幅長	面積	面積率	面積率 (高付住)	面積率 (最大値)	面積率	中心/幅付/高付/面積率 (1/幅付/高付)	備考(1/幅付/高付)
28S001、S007	D区上層/D区上面	軒A	灰	C	上	12.3	4.3	8.3				3.75		5/36 V2~V1
29S001	B+C区	壁B	灰	C	上			17.0						IV2
30S001	F区上層	壁B	浅青灰	C	F			17.4						側面焼成、V1
31S001	F区上層	壁A	灰	C	中	17.6	2.4	15.0				1.93		1/36 IV2
32S001、SD07、S001+02	E・F区上層/D区上面	壁A	灰	C	上	15.8	3.1	12.6				2.35		4/36 V1
33S001、S001+02	F区上層/浮区	壁A	灰	C	上	14.5	1.6	11.7				11.0		8/36 VI2~3
34S001	B+C区	壁A	浅青灰	C	中	15.0	1.5	12.1				10.99		4/36 VI2~3
35S001	E区上層	壁A	浅青灰	C	中			12.7						側面焼成
36S001、カタラン	B区上層	壁Aか壁B	青灰	C	上							5.5		壁~V
37S001、S007	F区上層/C区上面	壁Aか壁B	青灰	C	上			9.7						内面灰色
38S001	C・D・E区上層	柱梁	灰	C	上							19.4		内面青灰色、H?~Da
39S001	A区上層	壁	青灰	C	上							33.9		内面降灰、6c 降平?
40S001	B区上層	壁	青灰	C	上	15.5								6C 降平?
41S001	E上面	縦横	青灰	C	上									
42S001	B区上層	内窓廻	赤銅	II	中			7.0						
43S001	C区上層	赤銅廻	紺	II	上			10.0						壁~IV 1
44S001	A区上層	赤銅廻	浅黒紺	III	上			7.0						IV2?
45S001	C区上層	赤銅廻	浅黒紺	III	上			6.0						IV
46S001	C区上層	赤銅廻	紺	II	上			7.2						IV
47S001	C区上層	赤銅廻	浅黒紺	III	上			7.0						IV
48S001	D区上層	赤銅廻	紺	II	上			8.0						IV
49S001	D区上層	赤銅廻	浅黒紺	III	上			8.0						IV
50S001	F区上層	壁A	浅黒紺	III	上	12.2								4/36 壁2古
51S001	C区下層	窓枠	灰白	II	上								4.8(柱付)	内窓廻り
52S001	E区下層、上層、西側部	戸分裏	灰白	IC	中	19.0			23.4	18.3				4/36 1 1?
53S001	D区上層	窓枠	灰白	II	上	21.8				16.4				1.5/36 IV
54S001	D区上層	窓枠	浅黒	III	上	24.8				21.2				4/36 IV
55S001	F区上層	窓枠	浅黒紺	III	中	21.2				17.0				4/36 V1~2
56S001	B区上層	窓枠	灰白	II	F	12.0			14.0	10.6				7/36 IV1~IV2古
57S001	F区上層	窓枠	浅黒紺	III	中	35.9				32.8				1.5/36 IV~V?
58S001、S007	E区、E・F区上層/D区中層、上層	窓枠	紺	II	C	上		15.6						IV?
59S002	E上面	軒B身	灰	C	上	12.7	3.8	8.0				2.8		3.5/36 IV2古
60S003	E区上層	窓枠	紺	II	上	40.8				37.9				2/36 V2~V1
61S003	E上面	窓枠	浅青灰	III	上			18.6						
62S004	B区中層	軒A	浅黒紺	C	中下			8.6						側面焼成、IV1
63S007	C区上層、上面	軒B身	青灰	C	上	18.6						1.2		内面浅青灰色、3/36 壁
64S007	B-E区上層、上面	軒B身	浅青灰	A	上								2.6(1.0)	IV
65S007	D区上面	軒B身	浅黒紺	C	F	11.0								側面焼成、4/36 V?
66S007	D区上面	軒B身	青灰	C	上	14.9	3.95	11.6				9.29		1.5/36 III~III
67S007	D区上面	壁E	灰	C	中	18.2								1.5/36 M3
68F~11		大壁	部灰	C	上	37.8								1/36 1 1
69F~5		赤銅廻	浅黒紺	III	上			8.4						6/36 IV1~2古
70F~1		窓枠	浅黒紺	III	上	20.0				20.4	18.4			5/36
71F~1		窓枠	浅黒紺	III	中			8.0						
72活活層	A~3Gr	軒B身	部灰	C	上	13.6	3.6	8.8				2.61		内面降灰、0.5/36 壁~IV1
73活活層	A~1・2Gr	軒B身	青灰	C	上	15.7	8.1	8.0				3.0		内面灰色、5/36 V1~2
74活活層	A~3Gr	壁A	部灰	C	中					10.0				内面灰色、壁~IV
75活活層	A~2Gr	壁A	浅青灰	C	上									内面灰色色、内面降灰、IV2壁~V1
76活活層	A~1・2Gr、B~0gr	壁B	部灰	C	中			11.0						内面灰色
77活活層	A~1・2Gr	窓枠	灰白	II	上							3.8(欄杆)		内窓廻り

単位：cm

第IV章 矢田野遺跡発掘調査

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

今回報告を行う矢田野遺跡の調査は、調査年度・原因の異なる「詳細分布調査」及び「発掘調査」の二つの内容を合わせたものとなっている。以下にそれぞれの経緯を略述する。

(1) 詳細分布調査

平成12年度に、小松市矢田野町地内の周知の埋蔵文化財包蔵地（矢田野遺跡・矢田借屋古墳群）内において、宅地造成工事（工事区域：32,743.39㎡）が行われることとなり、その工事区域内の地下にある遺構の状況等を確認するため、当該年度の国庫補助事業として詳細分布調査を実施したものである。

(2) 発掘調査

平成13年度に、小松市月津町地内の周知の埋蔵文化財包蔵地内において、個人住宅の建設（事業区域：1,500㎡—個人住宅4件分）が行われることとなり、事業者と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、当該年度の国庫補助事業として事業区域内の発掘調査を実施したものである。

2 調査の方法

(1) 詳細分布調査

工事区域内に任意のトレンチ（試掘坑）を設定し、調査を行った。

(2) 発掘調査

調査区西側に接する道路を軸とし、任意に5m×5mのグリッドを設定し、調査を行った。

3 調査の概要

平成12年度実施の詳細分布調査の結果は、過去の土取り等の開発行為によって、工事区域内のほとんどの埋蔵文化財が削平・破壊されており、一部古墳の周溝と見られるものや土坑・柱穴を確認したが、それらについてもかなりの破壊を受けている状況であった。

また平成13年度実施の発掘調査では、詳細分布調査時と同様に埋蔵文化財の破壊が免れていない状況であったが、矢田借屋古墳群を構成すると考えられる、大量の埴輪片を出土した矢田借屋12号墳・南加賀地域特有の粘土を用いた埋葬施設をもつ矢田借屋16号墳等、新規の古墳を相次いで検出している。また、矢田野遺跡に関連する遺構の検出は見られなかったが、包含層出土遺物の観察により、当該遺跡に属すると考えられる遺物が定量確認できた。

4 出土品整理^{※1}

矢田野遺跡の出土品整理作業は、国庫補助事業として以下のような経過で実施している。

平成13年度：平成13年度出土遺物の洗浄作業

平成16年度：平成12・13年度出土遺物の洗浄・注記作業

平成17年度：平成12・13年度出土遺物の注記・分類・接合・実測作業

平成18年度：平成12・13年度出土遺物の実測・トレース・図版作成・原稿執筆・報告書刊行作業

※1 平成17年度に「矢田借屋古墳群」に関する遺構・遺物を中心とした報告書（小松市教育委員会2006『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』）を刊行しており、本章では「矢田野遺跡」出土品として取り扱った遺物を報告している。



図 27 矢田野遺跡 調査地位位置図

第2節 出土遺物

1 須恵器 (図28～31)

1～3は**坏H蓋**で、端部径12.0～12.3cm・器高4.0～4.3cmに取まるものである。3は天井部から口縁端部にかけての傾斜が急で、天井部の器内も厚く、他とは様相を異にする。4～6は**坏H身**で、4は底部にヘラ削り調整痕が認められ、古手の様相を残す。時期的な相違のためか、5は口径9.7cm、6は口径12.8cmを測るなど、器形の統一は見られない。総じては古代Ⅰ₁期に位置づけられるものと考えられる。7・8は**坏G蓋**で、7は天井部を欠くが、口縁部より下に突出する、長めの返りをもつ。8は返りが小さく、口縁部内に取まる。いずれも古代Ⅰ₁期に相当するものであろうが、前述の特徴から、7は古手、8は新手の様相を示す。9・10は**坏G身**で、9は深身・大きめ、10は小型のものである。11～14は**坏A**で埴形の11・12、扁平形の13、丸底形の14と大別できよう。概ね古代Ⅱ₃～Ⅳ₂期の時期幅を推定できる。15～19は**坏B蓋**で、器形の大小や端部形状の差異があり断定はできないが、返りをもたなくなる古代Ⅱ₃期以後のものであろう。また18の内面には墨溜に使用したと思われる痕跡が認められる。20～25は**坏B身**で、法量や高台の属性により20～23は古代Ⅱ₃期に、小型の24や大型で深身の25などは、古代Ⅲ～Ⅳ期に位置付けられよう。26・27は**盤A**で、ともに器肉が薄く、外傾が強い。古代Ⅴ期頃に取まるものと思われる。28～31は**壺**で、28・29は外面肩部～胴部にかけてカキメ調整を施し、くびれも強い。古代Ⅱ₃期のものである。30は「くびれ鉢」で、古代Ⅵ₁期以降のものである。31の外面はタタキ～カキメ調整、内面はタタキ調整を施し、一見して甕とも思える曖昧な器形であるが、甕に通用の底部の叩き出しが見られないことや、直立ぎみで短い口縁端部の形状から、壺と認定している。32～34は**小型壺**で、32の口縁端部は直立ぎみに長く伸び、肩部は緩やかに張る。33の底部には糸切り痕が確認できる。34は最も小型で、肩部の張りは強い。これらは概ね古代Ⅳ期頃のものか。35・36は**長頸瓶**で、胴部の形態によりソロバン形の35、球形の36がある。概ね古代Ⅲ～Ⅴ期頃の時期幅を示すものである。37は**双耳瓶**で、口頸部及び耳の上端を欠くが、残存状態から3穴穿孔の耳をもつものと推察される。古代Ⅵ期頃のものと考えられる。38は**横瓶**で、欠損部が多かったが、破片接合により全体形を復元できたものである。古代Ⅱ₃～Ⅲ期に位置づけられよう。39～42は**甕**で、口縁端部～肩部にかけての破片を反転復元し、図化したものである。いずれも短頸の中甕で、古代Ⅱ～Ⅳ期の範疇に取まるものと考えられる。43～45は**甗**で、43の口縁は端部を面取りし、突出させる。内外面の胴部に約2cm幅で縦方向のハケ調整を施す。44は底部片で、内外面ともタタキ調整後、ナデ消している。45には三角形で板状を呈す把手が付されている。

2 土師器 (図32・33)

46～48は**埴**で、46・48は内外面に赤彩を施し、48はカキメ調整も著しい。47の底部には高台が付く。概ね古代Ⅲ期のものである。49は高坏で、低脚で埴形の坏部が付く。坏部内面は黒色処理が施されている。古代Ⅰ～Ⅱ期に位置づけられる。50～56は**甕**で、54を除き、口径が15cm以上を測るものである。54は口径12.45cmと狭いが、長胴を呈す。55は口縁部の外傾、肩張りが強い。56は口縁部～胴部と底部で接合できなかったが、同一個体である。口径は19.15cmと最も広く、胴部も長胴である。これらは概ね古代Ⅰ～Ⅱ期に属するものである。57～59は**小甕**で、口径は57が14.0cm、58が11.7cm、59が15.0cmと、それぞれ差異がある。古代Ⅳ₂期に位置するものである。60・61は**鍋**で、ともに口縁部が大きく開き、口縁端部の上端は突出している。外面はナデ、内面はカキメ調整を施す。古代Ⅴ～Ⅵ期のものである。62～68は**把手**であるが、甕・甗いずれにつくものかは判断しがたい。

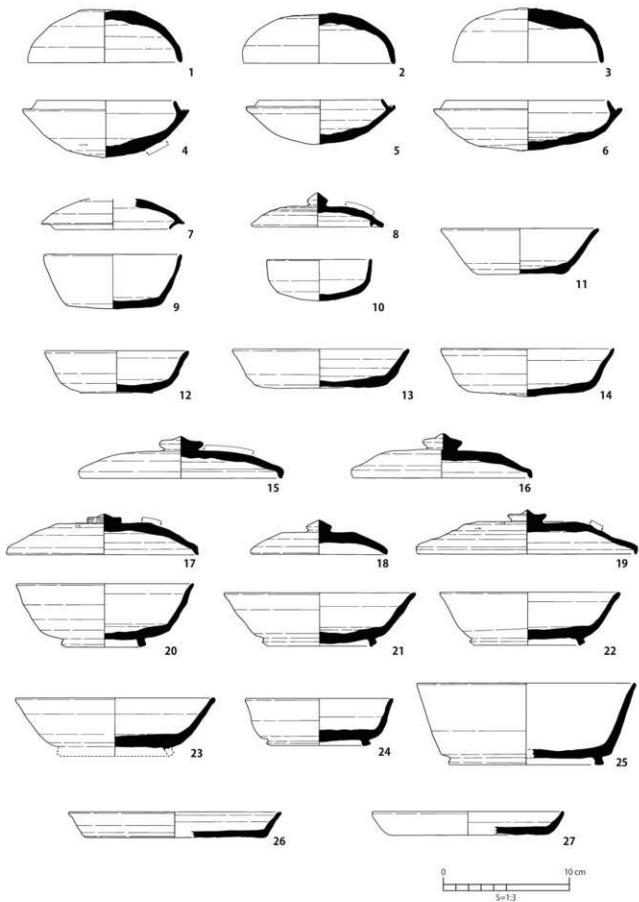


图 28 矢田野遺跡 出土遺物実測図 1

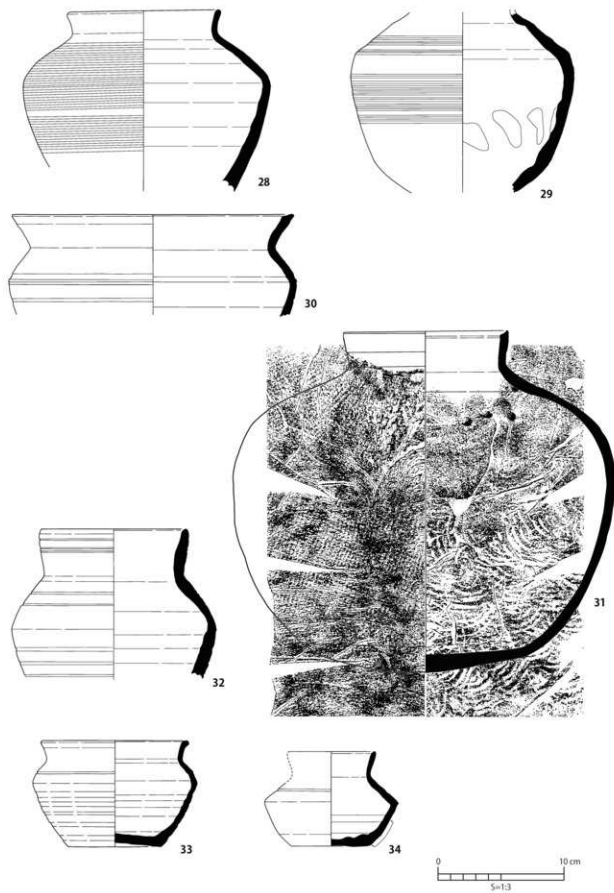


図29 矢田野遺跡 出土遺物実測図2

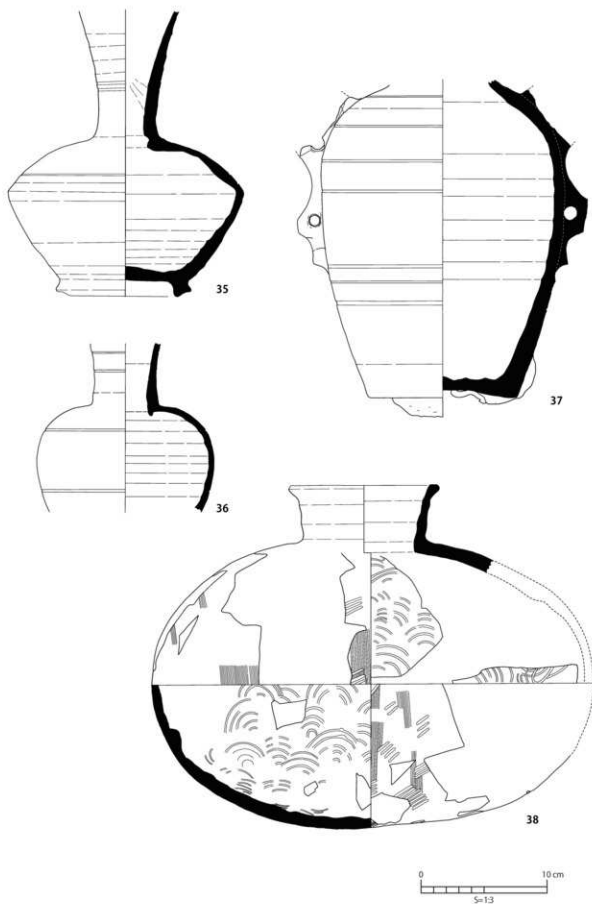


图 30 矢田野遺跡 出土遺物実測図 3

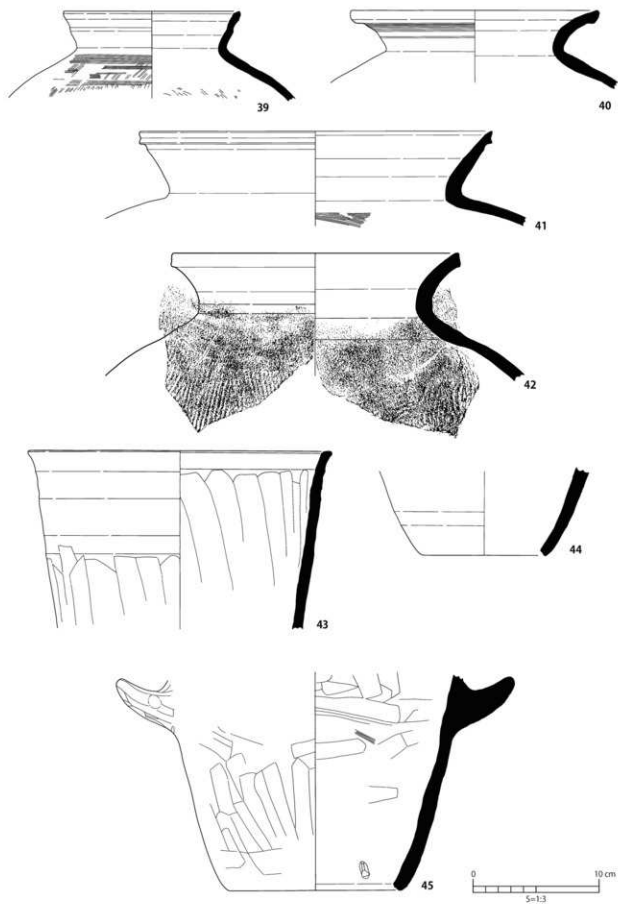


図 31 矢田野遺跡 出土遺物実測図 4

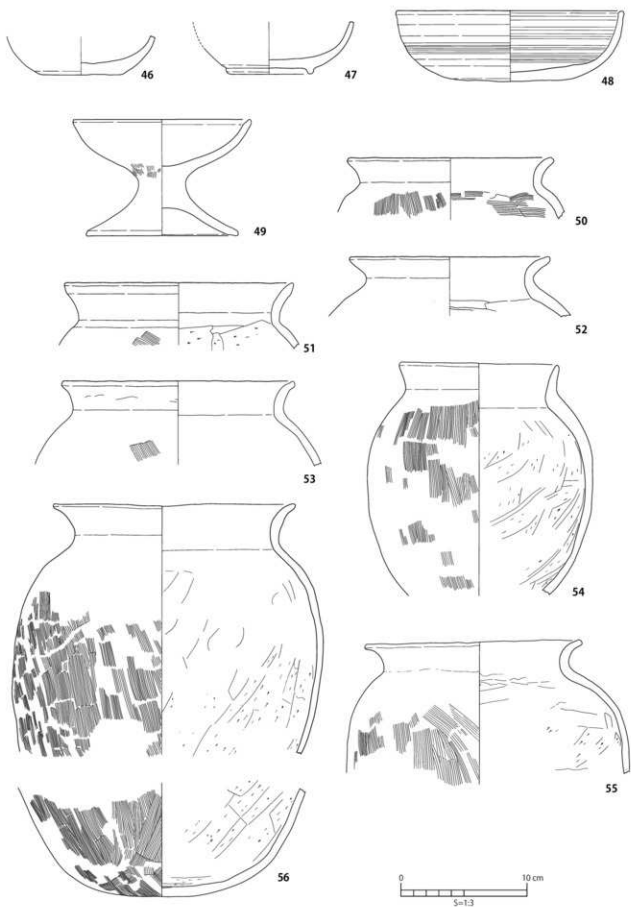


图 32 矢田野遺跡 出土遺物実測図 5

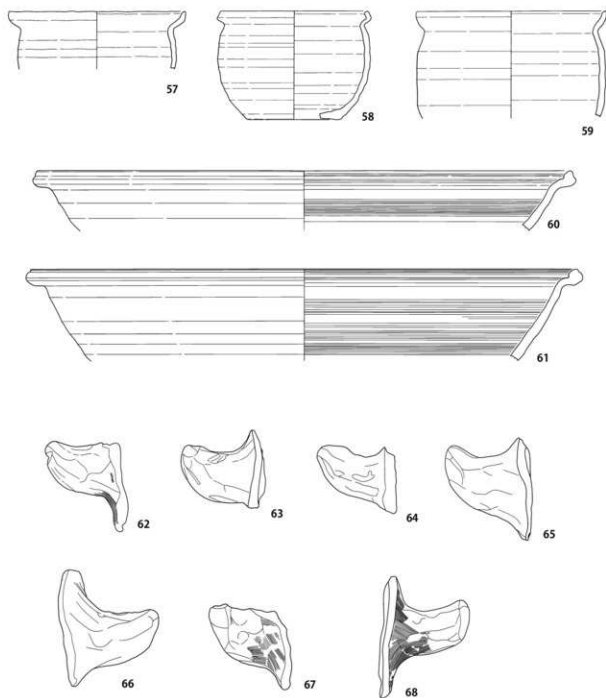


図33 矢田野遺跡 出土遺物実測図6

第3節 小結

今回の調査により出土した遺物は、7世紀～9世紀中頃までの様相を示すものであった。また遺物の占める割合は、7世紀～8世紀に位置づけられるものが多く、9世紀代のは少数である。一方で遺構の検出が見られないのは、(財)石川県埋蔵文化財センターが実施した調査成果により「古墳群を囲むようにして集落が展開する様子が窺える」(2006『小松市 矢田野遺跡群』)ことが指摘されており、本調査区が矢田借屋古墳群の墓域と重複していることにその一因が求められよう。

最後に、本報告に際して多くの文献を参照させて頂いたが、特に遺物の年代観など事実認識の免れない点、御指摘・御指導を願いたい。矢田野遺跡の消長を論じる上で、今回の調査成果が幾らかの補完的役割を担えることを期待するものである。

引用・参考文献

- イ 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター、2006：『小松市 矢田野遺跡群』
- コ 小松市教育委員会、1991：『戸津古窯跡群Ⅰ』 石川県
小松市教育委員会、1992：『戸津古窯跡群Ⅱ』 石川県
小松市教育委員会、1995：『念仏林南遺跡Ⅱ』 石川県
小松市教育委員会、2002：『二ツ梨一貫山窯跡』 石川県
小松市教育委員会、2006：『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ 矢田借屋古墳群』 石川県
- タ 田嶋明人、1988：『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』 石川考古学会・北陸古代土器研究会
- モ 望月精司、1994：『南加賀古窯跡群における8世紀中頃の画期』『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
望月精司、1999：『越前・南加賀地域の古代須恵器貯蔵具』『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会

遺物観察表 凡例

1. 「年度」は調査年度を示している。

「H12」=平成12年度調査

「H13」=平成13年度調査

2. 「実測」は実測番号を示し、出土品整理の遺物分類時に使用したもので、右表のように付している。

なお実測した遺物の内には、本報告書未掲載のものも含まれている。

3. 「胎土」の鑑定で「南加賀」とするのは、小松市南部丘陵地に所在する「南加賀古窯跡群」産であることを表している。

4. 「焼成」で示す用語はそれぞれ以下のものを表している。

「堅」=堅緻：焼きしまりが強いもの

「普」=普通：焼成の還元状態が適正のもの

「生」=生焼け：焼成の還元状態が不良で軟質なもの

5. 「色調」で示すものは、外面色調を基準としている。

分類1	分類2	名称	実測番号
A 須恵器	A 食器	01 环H身	001～005
		02 环H蓋	001～006
		03 环G身	001～002
		04 环G蓋	001～003
		05 环A	001～016
		06 环B身	001～013
		07 环B蓋	001～017
		08 盤A	001～004
	B 貯蔵具	01 壺	001～004
		02 小型壺	001～003
		03 長頸瓶	001～002
		04 双耳瓶	001
		05 横瓶	001
		06 甕	001～008
C 煮炊具	01 甕	001～003	
	B 土師器	A 食器	01 埴
02 高环			001～002
B 煮炊具		01 甕	001～019
		02 小甕	001～005
		03 鍋	001～004
		04 把手	001～007

図版	番号	年度	実測	分類1	分類2	名称	法量 (cm)	敷土	築成	色調	調整	残存率	備考
28	1	H12	AA02001	築造器	食器	坪H蓋	端部径 12.3 器高 4.2	南加賀	型	青灰	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	完形	
	2	H13	AA02002	築造器	食器	坪H蓋	端部径 12.2 器高 4.0	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ切り	略完形	
	3	H12	AA02005	築造器	食器	坪H蓋	端部径 12.0 器高 4.3	南加賀	型	黄灰	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ切り	1/3	
	4	H12	AA01001	築造器	食器	坪H	口径 10.8 受部径 13.2 器高 4.5 口高 0.8	南加賀	型	黄灰	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ削り	略完形	
	5	H12	AA01002	築造器	食器	坪H	口径 9.7 受部径 11.9 器高 3.5 口高 0.7	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	略完形	
	6	H12	AA01003	築造器	食器	坪H	口径 12.8 受部径 15.0 器高 4.1 口高 0.8	南加賀	型	晴灰	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	3/4	焼け赤み
	7	H12	AA04001	築造器	食器	坪C蓋	残存高 2.4 端部径 11.4 返し径 9.1	南加賀	型	晴灰	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	1/3	
	8	H12	AA04002	築造器	食器	坪C蓋	器高 2.8 つまみ径 1.6 つまみ高 1.0 端部径 10.6 返し径 8.6 口径 11.0 器高 4.3 底径 7.6	南加賀	普	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ削り	2/5	
	9	H12	AA03001	築造器	食器	坪C	口径 8.4 器高 3.3 底径 6.5	南加賀	型	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	2/5	
	10	H12	AA03002	築造器	食器	坪C	口径 12.3 器高 3.6 底径 6.6	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	1/2	
	11	H12	AA05001	築造器	食器	坪A	口径 11.1 器高 3.6 底径 5.6	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	2/5	
	12	H12	AA05010	築造器	食器	坪A	口径 13.8 器高 3.3 底径 10.4	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	1/2	
	13	H12	AA05011	築造器	食器	坪A	口径 13.6 器高 3.8 底径 9.2	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	1/3	
	14	H12	AA05009	築造器	食器	坪A	口径 17.9 器高 4.25 つまみ径 3.5 つまみ高 1.2	南加賀	普	灰黄	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ削り	1/3	
	15	H12	AA07010	築造器	食器	坪B蓋	口径 14.0 器高 3.5 つまみ径 3.1 つまみ高 1.3	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	略完形	
	16	H12	AA07015	築造器	食器	坪B蓋	口径 15.4 器高 3.2 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ削り	3/4	
	17	H12	AA07010	築造器	食器	坪B蓋	口径 10.6 器高 2.8	南加賀	良	青灰	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ削り	3/4	内面黒部06組?
	18	H12	AA07002	築造器	食器	坪B蓋	口径 17.4 器高 3.5	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ削り	1/5	
	19	H12	AA06007	築造器	食器	坪B	口径 13.9 器高 5.1 高台径 6.7 高台高 0.6	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	1/3	高台焼け赤み
	20	H12	AA06005	築造器	食器	坪B	口径 15.0 器高 4.2 高台径 9.1 高台高 0.65	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	2/3	
	21	H12	AA06008	築造器	食器	坪B	口径 13.8 残存高 4.2 高台径 9.2 高台高 0.5	南加賀	普	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	略完形	ヘラ記号あり
	22	H12	AA06006	築造器	食器	坪B	口径 15.9 残存高 4.0	南加賀	普	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	3/4	高台穴蓋・ヘラ記号あり
	23	H12	AA06010	築造器	食器	坪B	口径 11.5 器高 3.8 高台径 8.2 高台高 0.6	南加賀	普	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	1/2	
	24	H13	AA06013	築造器	食器	坪B	口径 17.2 残存高 6.9 高台径 12.3 高台高 0.6	南加賀	生	灰黄	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	1/2	
	25	H13	AA08001	築造器	食器	型A	口径 16.7 器高 2.0 底径 14.6	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ切り	1/2	
	26	H12	AA08004	築造器	食器	型A	口径 15.0 器高 1.9 底径 12.2	南加賀	普	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	1/4	
	27	H12	AA08004	築造器	食器	型A	口径 11.9 頸径 11.5 胴径 19.6 残存高 14.45	南加賀	普	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	16/36	
28	H12	AB01002	築造器	貯蔵具	甕	頸部径 8.4 胴径 17.6 残存高 14.3	南加賀	普	灰白	内:ロクロナデ・筋ナデ 外:ロクロナデ・カキメ	12/36		
29	H12	AB01001	築造器	貯蔵具	甕	口径 22.1 胴径 22.7 残存高 8.0	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	6/36		
30	H12	AB01004	築造器	貯蔵具	甕	口径 13.0 頸径 12.6 胴径 30.4 底径 18.7 器高 27.0	南加賀	普	灰白	内:タタキ 外:タタキ→カキメ	略完形		
31	H12	AB02003	築造器	貯蔵具	小型甕	口径 11.4 頸径 11.0 胴径 16.1 残存高 11.9	南加賀	普	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	9/36		
32	H12	AB02001	築造器	貯蔵具	小型甕	口径 11.5 頸径 10.8 胴径 13.0 底径 7.3 器高 8.35	南加賀	生	灰白	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	1/2	底部黒切り	
33	H12	AB02002	築造器	貯蔵具	小型甕	口径 6.8 胴径 10.6 底径 6.45 器高 7.45	南加賀	普	灰黄	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	3/4	底部ヘラ切り	

種別	番号	年取	実測	分類1	分類2	名称	法量 (cm)	動土	境色	調物	残存率	備考	
30	35	H13	AB03002	築造部	若道具	長須籠	胴径 5.3 胴径 18.8 有台径 10.7 有台高 1.3 残存高 22.6	高加賀	青	灰	内:ロウロナデ 外:ロウロナデ	略定形	
	36	H12	AB03001	築造部	若道具	長須籠	胴径 5.4 胴径 14.0 残存高 13.35	高加賀	青	灰	内:ロウロナデ 外:ロウロナデ	胴部～ 胴部破片	
	37	H13	AB04001	築造部	若道具	双口籠	胴径 8.6 胴径 19.1 底径 11.6 残存高 25.4	高加賀	生	灰白	内:ロウロナデ 外:ロウロナデ	胴部破片	境台付着
	38	H12	AB05001	築造部	若道具	横籠	口径 11.6 胴径 9.8 胴高 27.3	高加賀	青	灰	内:ヨコナデ・タタキ 外:ヨコナデ・タタキ・カキメ	口縁部～ 胴部破片	
31	39	H12	AB06004	築造部	若道具	甕	口径 13.8 胴径 11.8 残存高 6.9	高加賀	青	暗灰	内:ヨコナデ・タタキ 外:ヨコナデ・タタキ・カキメ	口縁部～ 胴部破片	
	40	H13	AB06005	築造部	若道具	甕	口径 19.5 胴部径 14.1 残存高 5.75	高加賀	青	暗灰	内:ヨコナデ・タタキ 外:ロウロナデ・カキメ	口縁部～ 胴部破片	
	41	H12	AB06001	築造部	若道具	甕	口径 27.9 胴径 23.2 残存高 6.9	高加賀	青	灰白	内:ヨコナデ・カキメ 外:タタキ	胴部破片	
	42	H12	AB06003	築造部	若道具	甕	口径 22.6 胴部径 18.7 残存高 9.7	高加賀	生	灰	内:ヨコナデ・タタキ 外:ヨコナデ・タタキ・カキメ	口縁部～ 胴部破片	
	43	H13	AC01002	築造部	煮炊具	甕	口径 23.8 残存高 14.05	高加賀	生	灰	内:ヨコナデ・ハケ 外:ヨコナデ・ハケ	胴部破片	
	44	H12	AC01001	築造部	煮炊具	甕	底径 9.8 残存高 6.65	高加賀	青	灰	内:タタキ・ナデ 外:タタキ・ナデ	底部破片	
	45	H13	AC01003	築造部	煮炊具	甕	底径 13.6 残存高 16.65	高加賀	生	灰	内:ヨコナデ・ハケ 外:ヨコナデ・ケズリ	胴部～ 底部破片	
	46	H12	BA01001	土師器	食器	碗	底径 6.3 残存高 3.1			暗赤 褐色	赤瓦陶器	19/36	内外面赤彩
	47	H12	BA01002	土師器	食器	碗	有台径 7.9 有台高 0.5 残存高 4.2			浅黄 褐色	赤瓦陶器	19/36	
32	48	H12	BA01003	土師器	食器	碗	口径 17.8 底径 9.7 胴高 5.65			明赤 褐色	内:ヨコナデ・カキメ 外:ヨコナデ・カキメ	10/36	内外面赤彩
	49	H12	BA02002	土師器	食器	高杯	口径 13.9 胴部高径 3.7 胴部底径 12.0 胴高 9.2			青 褐色	内:ミガキ 外:ハケ	14/36	内面黒色処理
	50	H12	BB01010	土師器	煮炊具	甕	口径 15.8 胴径 14.2 残存高 4.4			生 浅黄 褐色	内:ハケ 外:ヨコナデ・ハケ	口縁部～ 胴部破片	
	51	H12	BB01006	土師器	煮炊具	甕	口径 17.8 胴径 15.8 残存高 5.0			生 浅黄 褐色	内:ヨコナデ・ケズリ 外:ヨコナデ・ハケ	胴部破片	
	52	H12	BB01007	土師器	煮炊具	甕	口径 15.6 胴径 13.1 残存高 4.7			生 浅黄 褐色	内:ケズリ 外:赤瓦陶器	胴部破片	
	53	H12	BB01005	土師器	煮炊具	甕	口径 18.2 胴径 16.6 残存高 6.6			生 浅黄 褐色	内:赤瓦陶器 外:ヨコナデ・ハケ	口縁部～ 胴部破片	
	54	H12	BB01015	土師器	煮炊具	甕	口径 12.45 胴径 12.0 胴径 16.8 残存高 18.45			生 浅黄 褐色	内:ケズリ 外:ハケ	口縁部～ 胴部破片	
	55	H13	BB01017	土師器	煮炊具	甕	口径 17.0 胴径 14.7 胴径 22.5 残存高 10.45			青 褐色	内:ヨコナデ・筒ナデ・ケズリ 外:ヨコナデ・ハケ	胴部破片	
	56	H12	BB01018	土師器	煮炊具	甕	口径 19.13 口縁残存高 19.8 胴径 16.25 胴径 25.6 底径 15.6 底部残存高 8.6			青 褐色	内:筒ナデ・ケズリ 外:ヨコナデ・ハケ	口縁部～ 底部破片	
	33	57	H12	BB02001	土師器	煮炊具	小甕	口径 14.0 胴径 12.1 残存高 4.6			青 褐色	内:ロウロナデ 外:赤瓦陶器	4/36
58		H12	BB02002	土師器	煮炊具	小甕	口径 11.7 胴径 11.1 胴径 12.2 胴高 8.6			生 浅黄 褐色	内:ロウロナデ 外:ロウロナデ	4/36	底部糸切り
59		H12	BB02003	土師器	煮炊具	小甕	口径 15.0 胴径 13.8 胴径 15.0 残存高 8.5			生 浅黄 褐色	赤瓦陶器	4/36	
60		H13	BB03003	土師器	煮炊具	甕	口径 42.1 胴径 39.9 残存高 4.8			生 浅黄 褐色	内:カキメ 外:ヨコナデ	2/36	
61		H13	BB03002	土師器	煮炊具	甕	口径 43.2 胴径 41.1 残存高 7.25			青 褐色	内:カキメ 外:ヨコナデ	4/36	
62		H12	BB04001	土師器	煮炊具	把手	最大径 6.95 最大幅 6.0			青 灰褐色	外:ケズリ・ハケ		
63		H12	BB04002	土師器	煮炊具	把手	最大径 6.25 最大幅 6.55			青 褐色	内:ケズリ 外:ケズリ		
64		H12	BB04003	土師器	煮炊具	把手	最大径 5.0 最大幅 6.05			青 褐色	内:ハケ 外:ケズリ		
65		H12	BB04004	土師器	煮炊具	把手	最大径 7.8 最大幅 6.75			生 浅黄 褐色	内:ハケ・ケズリ 外:ケズリ		
66		H12	BB04005	土師器	煮炊具	把手	最大径 9.2 最大幅 7.95			青 褐色	内:ハケ・ケズリ 外:筒ナデ・ケズリ		
67	H12	BB04006	土師器	煮炊具	把手	最大径 5.1 最大幅 5.85			生 浅黄 褐色	内:赤瓦陶器 外:筒ナデ・ハケ			
68	H12	BB04007	土師器	煮炊具	把手	最大径 9.3 最大幅 6.8			青 褐色	内:ケズリ 外:筒ナデ・ハケ			

第V章 符津C遺跡発掘調査

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

小松市符津町地内で計画された共同住宅建設について、平成16年4月7日付で、翼龍之助より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。埋蔵文化財調査室は同日、計画地が台地上で符津A遺跡の区域に隣接するため、試掘調査を実施する旨を回答した。

試掘調査は5月20日付で依頼を受けて翌日実施し、ピット数基と須恵器・土師器の出土を確認した。符津A遺跡は縄文時代の遺跡とされ、調査の所見では計画地との間に谷を挟むこともあり、新規発見の埋蔵文化財包蔵地として「符津C遺跡」と命名した。

試掘調査により確認された遺物包含層は、現況面から約70～100cmの深度であったため、当初はこの既往の盛土層が保護層に十分として、計画地の整地に伴う擁壁工事に伴う幅1.5mの掘削範囲は立会により対応した上で（5月24日実施）、現状保存を講じる方向で調整を進めていたが、計画地で行われた地質調査の結果では、軟弱な粘土層のために地盤改良が必要とされた。

これを受けて保護層の確保は不可能となり、地盤改良が行われる建物範囲271.40m²を発掘調査の対象として発掘調査が必要である旨を口頭で伝え、事業主もこれに同意した。

共同住宅建設ということだが、事業主は個人であり、石川県教育委員会文化財課の指導に基づいて、調査費用の一部を事業者負担の上で国庫補助事業対象とし、6月8日付で、これまでの協議に基づいて発掘調査に関する協定書を交換し、併せて同日、文書により正式に依頼を受け、発掘調査に着手する運びとなった。

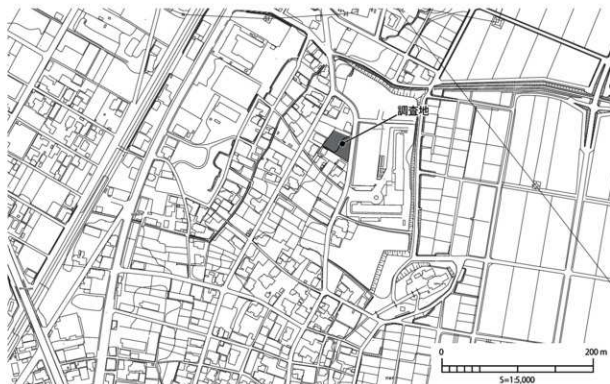


図34 符津C遺跡 調査地位置図

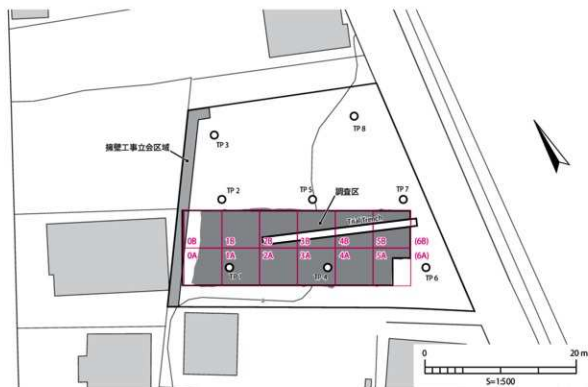


図 35 符津 C 遺跡 グリッド配点図

2 調査の方法

発掘調査に先立ち、4 級基準点測量業務委託により調査地前面道路を通るトラバースを設定した。調査区は、発掘調査対象となる建物基礎工事範囲を 12 分割するグリッド (図 35) ととし、トラバースを与点として座標を把握する方法を採った。

3 調査の概要

発掘調査は、7 月 15 日に重機により表土を除去し、20 日に作業を開始した。この日は小松商業高校の生徒 2 名の企業実習にも重なり、実習を兼ねて、生徒らとともにグリッドの打設を行った。

調査地は、凸型緩斜面を盛土により平坦地化したもので、大きな削平は伴わず、試掘調査の所見では盛土下の旧表層土中での遺構検出が可能とされた。昭和期には茶畑となっていた土地であり、盛土下の造成土と思われる土層を掘削した上で、茶の木の根が認められるあたりでの遺構検出を試みたが、黒土の斑紋のみで、遺構と認定しうるものは見えなかった。この段階で、試掘調査における「ピット」はこれら斑紋を遺構と誤認したものであったことが判明し、少なくとも緩斜面上の旧表層土は人為的な攪拌あるいは造成があったと思われる、これが遺物包含層となっていた。

7 月 26 日、調査区西隅の斜面上に周溝らしい遺構が 2 箇所検出された。倒木跡や昭和期の攪乱坑で遺存状態は悪かったが、周辺で出土した土師器の高環脚部片が 5 世紀代の所産であり、須恵器を伴わない出土状況と、斜面上で周溝内側に平坦に造成した痕跡も認められないことから、填丘が削平された古墳であろうと思われる。これにより、旧表層土中での遺構検出は不可能であることが判明したため、以後の包含層掘削作業は、下層土 (いわゆる地山) 上面で検出する方針が決まった。また、上述の擁壁工事立会の際、「ピット」の誤認により、結果的に想定外の範囲になかった古墳 1 基を見落とすこととなり、記録のないまま削平されてしまっていたことも明かとなった。

包含層掘削作業は 8 月 3 日までに完了したが、最終的に検出された遺構は調査区中央から東部にかけての傾斜の殆どない区域で掘立柱建物跡 1 棟と土坑 3 基のみであった。盛土造成時かそれ以前

の重機による鋤取り痕や大きな廃棄坑（中から出土した空き缶に97年12月某日の賞味期限表示有り）があったが、幸いに検出された遺構に著しい損壊はなかった。しかしながら、柱穴2基は、表土除去作業中に、埋棄されていた根株を取り除く際に削平してしまっていた。

8月6日には掘削作業はひとまず完了し、以後は、調査員2名でプラン、セクション、エレベーション、コンターの各種実測作業を行った。この間、8月23日には空中撮影を実施し、8月25日には全ての作業を完了、8月30日に埋め戻して現状復旧し、事業者に引き渡した。

4 出土品整理

出土遺物は少なく、洗浄・注記から分類・接合までの作業は、平成16年度中に調査員が行い、平成18年度に出土品整理作業員による補足的な接合と実測作業を実施した。トレースはデジタルトレースにより調査員が行い、拓影は、調査員が採拓ののち600dpiモノクロモードでスキャニングした画像（TIFF形式ZIP圧縮保存）を使用した。

第2節 層位の所見と検出された遺構

1 層位の所見（図36）

前節にも触れたが、調査地はかつて西面する凸型斜面上に茶を栽培していた。昭和30年代以降、調査地周辺は宅地化が進み、地形も大幅に改変された。その間、茶の栽培を止めてから長らく空地のまま利用されない状態にあり、周辺の土木工事で生じた残土を受け入れたこともあったという。この残土で平坦地化されたため、調査の時点では昔時の傾斜地の面影は既になかった。

図36は調査区の南壁セクションの土壌層位を柱状図にしたものだが、茶畑の整備に係ると思われるのがAp層である。A層はべつだん攪拌の痕跡が認められない黒ボク質の旧表層土壌だが、過半の区域でAp層の直下にB層が見れる状況であった。前節で述べた遺物包含層はAp(2)層であり、月津台地上の土壌は、手掘りならば、経験的にAp層とA層は粘着性である程度まで識別できる（Ap層は粘着性が相対的に弱い）が、掘り分けるのは難しい。

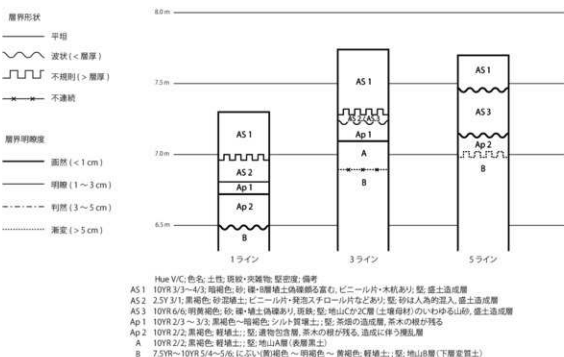


図36 符津C遺跡 南壁セクション土層柱状図

2 古墳(図38)

検出された古墳は2基だが、周溝を確認したのみで、墳丘はすでに削平されていた。削平の状況は、SX 01 で南壁セクションにより確認した。周溝出土遺物は土師器の細片が少量認められたのみで、古墳と断定する根拠としては脆弱なものだが、傾斜地に位置すること、周溝の掘方が内側をレリーフ状に強調するものであることが、主な判断の根拠となっている。

(1) SX 01

円墳、墳丘規模は径4m程度と推定される。周溝内の倒木跡は、墳丘築造より前のもので、セクションの観察による限りでは、倒木跡の凹みを埋め立てて周溝の掘削と墳丘の盛土を施したと考えられた。倒木跡からの出土遺物はなかった。

(2) SX 02

方墳、墳丘規模不明。周溝のプランは必ずしも明瞭ではないが、隅部の掘方は浅く、辺を強調したものと見られる。殆どの領域は調査区外に出てしまうが、擁壁工事立会の際に確認されている溝は、グリッドポイント0の地点から北に5～6mで東西に延び、この周溝の一部の可能性がある。周溝から出土した土師器片の中に大型壺の破片と思われるものがあり、部位を特定するに至らず実測はしなかったが、有段口縁の破片かもしれない。写真図版10に写真は掲載したので参照されたい。

3 掘立柱建物跡(図39)

凸型斜面の傾斜が緩くなる地点で1棟検出された。柱穴のプランは明瞭で、平面精査をかける前にすでに2基は確認できた。A層の残存する範囲ではあったが、局所的な攪乱により、平面的な精査が行えないことからA層上での検出は試みなかった。したがって、図化したプランとセクションは、南壁セクションの観察による限り、最大で20cm程度は調査中に削平した部分がある。

(1) SB 01

梁行3間×桁行4間、柱間寸法は、梁行で約133cm(平均)、桁行で約120cm(平均)、建物規模は、梁行で約488cm、桁行で約401cm、建物軸方位は約50°(右回り)。柱穴自体はセクションの観察でも柱痕のような有意な特徴は見いだされなかったが、下底に小さな凹みを持つものが多く、図上で整然と並んでいることが確認できる。出土遺物は、土師器の細片が少量あるが、有意な属性が見いだされるものはない。

4 土坑(図40・41)

SB 01の北に隣接して3基が並列して検出された。出土遺物の主要なものは、プランに図化されているSK 01の須恵器甕と土師器釜のほか、SK 03で固まって出土した土師器片も釜胴部下半部に接合された。攪乱坑でも環Bと環Gの蓋が出土し、後者はSK 01から出土した破片と接合した。近現代の雑物が混入していたわけでもないが、覆土には含水酸化鉄のキュータン(空隙面の皮膜)が見られるなど、土壌構造の発達とは別の要因で生じたと思われる局所的な擬似的土壌構造が遺構としては認定しにくい状況があったことから、最終的には攪乱坑と判断したものである。SK 03はこれを完掘した段階でプランを画定した土坑であり、SK 01とSK 03はプランが明瞭な土坑であった。

これら3基の土坑はいずれも廃棄坑と考えられる。セクションの観察で言えば、SK 01とSK 02は覆土にB層偽礫が認められ、特に下層で顕著なことから掘削の状況が似ていると推定される。SK 03の場合は、覆土の全てがA層の黒ボク質土で、残土を取り除いた状態であったようだ。SK 02のみ、プランが不明瞭で出土遺物が疎らであったが、覆土の状況がSK 01とよく似ていることから、穴としては他の2基と同様の目的で掘削されたものだろう。

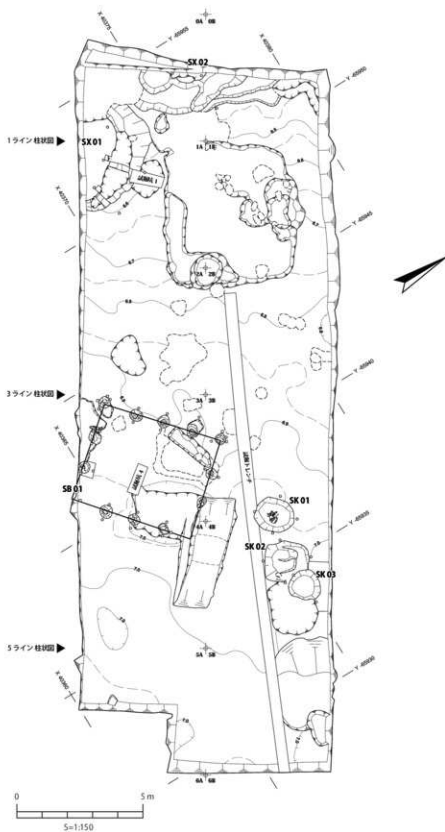


図 37 符津C遺跡 平面図

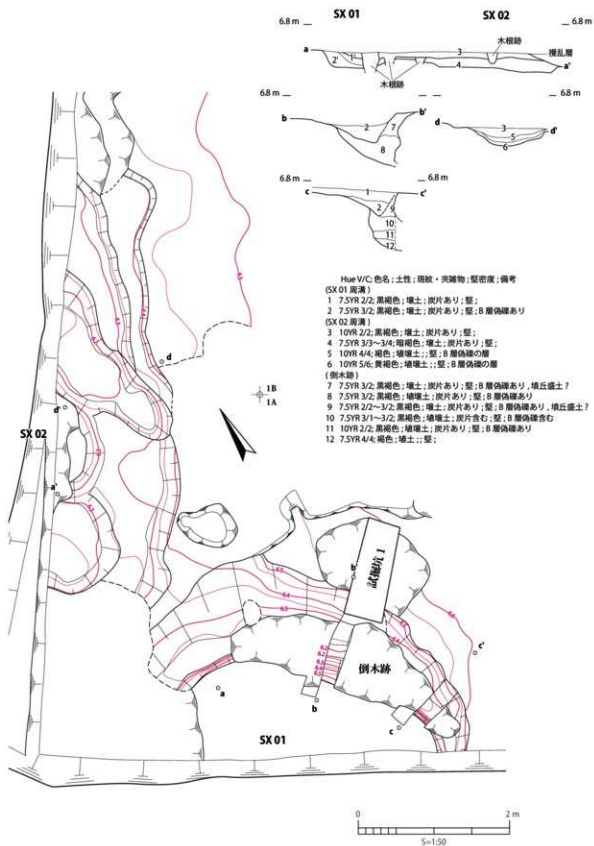


図 38 符津 C 遺跡 古墳実測図

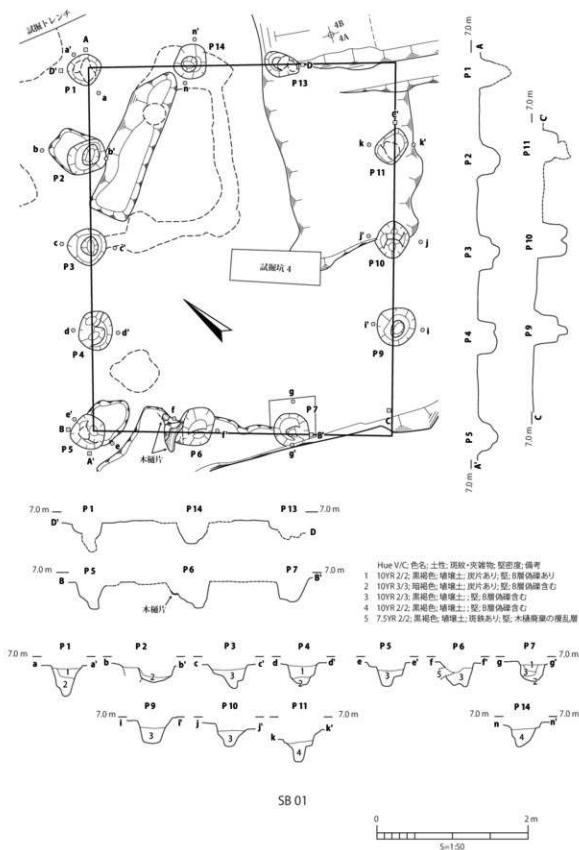


図 39 符津 C 遺跡 掘立柱建物跡実測図

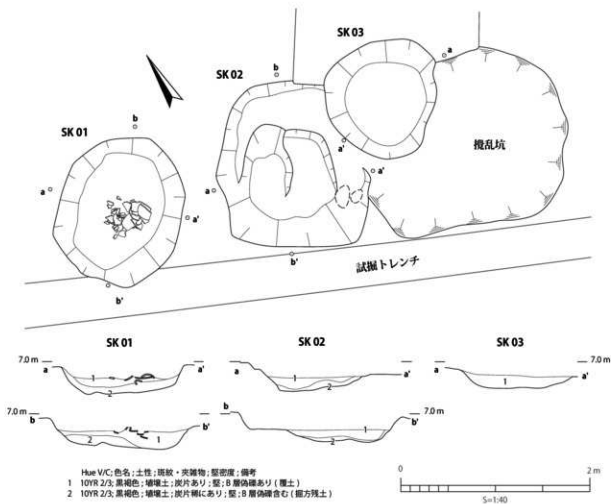


図40 符津C遺跡 土坑実測図

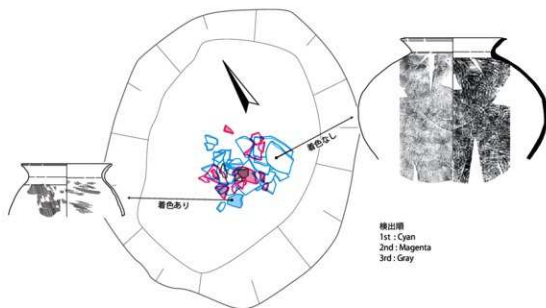


図41 符津C遺跡 SK 01出土遺物(遺構実測図S=1:20, 遺物実測図S=1:8)

第3節 出土遺物

はじめに

ここで報告する出土遺物の大部分を占める土師器と須恵器の主要なところは、大雑把には5世紀後半（～6世紀前半）に比定されるものと7世紀後半（～8世紀前半）に比定されるものがある。5～7世紀は行政的に古墳時代として扱われるが、学術的に概ね7世紀は飛鳥時代として、土器編年上も古代とされる。この跛行性はすべからず解消されるべきだろう。

敢えて明言するまでもなく本報告はあくまで学術的な実態に即した報告だが、第1章の表1と報告書抄録で、本遺跡は行政的に記載しているために内容の齟齬と誤解されるふしもあるかもしれないが、これは既刊の遺跡地図との整合性を考慮した措置である点を理解のうえでご寛恕を請う。

1 古墳時代の遺物

(1) 土師器 (図42-1～7)

図示したのは全て高坏である。ほかにSX 02の周溝からは大型壺と思われる破片があったが、同定すべき類例が管見に入らず、正位（口縁部と見た場合）と逆位（肩部と見た場合）の判別にも苦慮したこともあり、図化によって主観に基づく邪推が入ることを避ける意味で、写真掲載のみとした（写真図版10）。

1～3は高坏の坏部である。1は屈曲部に突帯を貼付したもので、接合が甘い。2・3は底で、脚部は接合面で破損している。

4～7は脚部の破片であり、裾部と同定できる破片は確認できなかった。4・5は裾部との境界が屈曲することが確認できる破片で、4・6は坏部との接合部で破損した破片である。いずれも中空の脚部であり、4・6は脚部の上部からのみ粘土を押し込んで坏部を継ぎ足すタイプ、7は脚部の下方からも粘土を押し込んでいる。一概にいえないかもしれないが、いずれも漆・13群のあたりに比定できる資料と考えられる。

(2) 須恵器 (図43-18・19・36・37)

18・19は坏Hの蓋である。細片だが有意な属性が認められるので図化した。18は屈曲と稜が明瞭であり、19は前節で触れたSK 02出土の細片で、どちらの属性も不明瞭である。図上では、18はTK 47、19はMT 15～TK 10を想定して破線による復元線を施しているが、19に関しては稜の上下の形態復元には逡巡を覚える資料ではある。18は南加賀産の胎土の範疇で理解してよいと思われるが、19は、望月の指摘によれば、陶邑産の胎土と考えられる。

36は無蓋高坏の坏部である。口縁部は内部の処理がいくぶん外反気味で、波状文が施される施文帯は沈線によりレリーフ状に設けられるが内部は凹む。口縁部から内面にかけて自然軸がかり、胎土に僅かだが海綿骨針がある。形態的な特徴からTK 47に比定され、胎土の特徴は北加賀から能登地域に認められるとされる外来要素であるが、該期の産地の状況は不明で搬入元は特定できない。

37は^{37A}蓋の体部である。波状文が施される施文帯の成形は37と同様に行われている。外面に自然軸が著しく、胎土には、熔けた角閃石か輝石のように見えるホクロのような黒い斑紋が特徴的であり、望月の指揮する該期の南加賀産の特徴（望月1990）と符合するものである。

2 飛鳥時代の遺物

(1) 土師器 (図42-8～13)

8は、外反気味に立ち上がる体部の外観上の特徴から、坏(A)身と通有の形態であろう。内外面に赤彩を施し、胎土は砂などの混入も少なく精良な印象を受けるものである。

9～11は釜である。ゆるく「く」の字に括れた頸部から外反する口縁が延び、体部は丸底の長胴型となるようだ。上半部の10の体部は内外面がハケ調整で、下半部の11は内面はケズリ調整となっている。SK 01 出土の10は、39の須恵器裏面に混じって出土した(図41)。

12～13は瓶の耳である。分厚く作りつけ、先端がゆるく反り上がっている。実測図は、反転復元ができなかったので、断面上に表面観を重ねて描画した。

これらの資料は、10の釜を目安として、古代Ⅱ期後半～Ⅲ期のあたりに比定されるだろう。

(2) 須恵器(図43-14～16・19～35・38、図44-39～図45-50)

14～21は坏蓋、22～35は坏身である。14～16・19・22～24は坏G、20・21・26～29は坏Bに分類されるもので、他は属性の有意な部分が欠損しているが、類推的に25・35は坏A身、30～34は坏B身となるだろう。また、14と20は外面に自然釉が顕著で、20はツマミを境に片側半分だけ自然釉がかからず、重ね焼きⅠ類(北野1988)される特徴がよく分かる。

38は高環の坏部と思われる。なめらかに内湾して広がる器形と広く面取りする端部処理は、坏蓋身や盤と通有でない特有の形態である。

39～46は甕である。接合の結果底部を除く形態が分かるSK 01 出土の39以外は、破片資料の抜粋で寸法は分からない。39は中甕である。体部は張り出しが強く頸部は短く外反し口縁端面は桶状に面取りされる。叩目文について、外面の平行叩目文の殆どが柁目面を使うが、45の場合は木目の角度が小さいことから板目面と見られる。内面の同心円叩目文の場合は殆どが木口面を使うが、やはり同様に44のような柁目面を使うものが稀に認められる。定量的なデータはないが、取り立てて指摘するような特徴は見あたらない。

47は瓶の口縁部である。緩く外反し、端部付近に突帯が貼付されている。

48は横瓶の体部閉塞側の破片である。外面には自然釉が分厚くかかっている。

49は長胴瓶の下半部である。この資料も外面の自然釉が分厚く、底までべったり垂れている。

50は壺の下半部である。外面にはケズリ調整が入念に施されている。

以上の資料は、胎土の特徴で言えば南加賀産とされる通有のもので、砂っぽいざらついた質感である。石英や長石類の細粒～中粒砂に富み、稀に粗粒～極粗粒砂がある。量の多寡こそあれ、やはり黒い斑紋もあり、角閃石類や輝石類と言った鉱物も胎土には含まれているが、焼き締まりのよいものでは溶けた感じで、よほど探さないで鉱物の特徴が見えるものが認められない。

また、坏類と39の中甕の型式的な特徴の組成からは、概ね古代Ⅱ期後半～Ⅲ期の範疇で理解される資料と考えられる。ただし、少なくとも49・50は律令期以降の古代に比定されるだろう。

(3) 鍛冶滓(図45-54)

SK 03から出土した。ピックアップ磁石にわずかに吸い付くが、鉄塊は含まないようだ。

3 中世以降の遺物(図45-51～53)

図化したのは原則として中世の遺物である。他は撈乱坑に伴う近現代の遺物があった。

51は加賀大甕である。N字状口縁の特徴から14世紀前半の所産と考えられる。

52は白磁碗である。焼成が甘いのか釉は溶着が弱い印象で、所々剥落が認められ、微細な貫入が全面に認められる。中世の所産だろうとは考えたが、比定すべき類例が管見に入らない。

53は青磁碗である。外面に有鍋の蓮弁文が施される龍泉窯系の青磁で、文様の特徴から14世紀前半に比定されるものだろう。

中世の遺物として抽出したのは以上の3点だが、うち2例で14世紀前半の年代が考えられることから、中世の遺跡としては短期に収束するものだろう。

引用・参考文献

- ウ 上田 秀夫 (1982) 14～16世紀の青磁碗の分類, 貿易陶磁研究2, 日本貿易陶磁研究会, p55-70.
- キ 北野 博司 (1988) 重ね焼きの観察, 辰口西部遺跡群I, 石川県立埋蔵文化財センター, p112-115.
北野 博司 (1999) 須恵器貯蔵具の器種分類案, つばとめ 須恵器貯蔵具を考えるI, 北陸古代土器研究 8, p129-140.
- コ 小松市教育委員会 (1990) 湯上谷古窯跡, 石川県
- タ 田嶋 明人 (1986) 考察一漆町遺跡出土土器の編年の考察一, 漆町遺跡I, 石川県立埋蔵文化財センター, p101-186.
- ハ 花塚 信雄 (1985) 甲き目文の原体同定—生産組織の解明に向けて—, 辰口町湯屋古窯跡, 辰口町教育委員会, p107-115.
石川県能美市
- モ 望月 精司 (1990) 考察—南加賀古窯跡群成立期の様相—, ニツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡, 小松市教育委員会, p126-148, 石川県

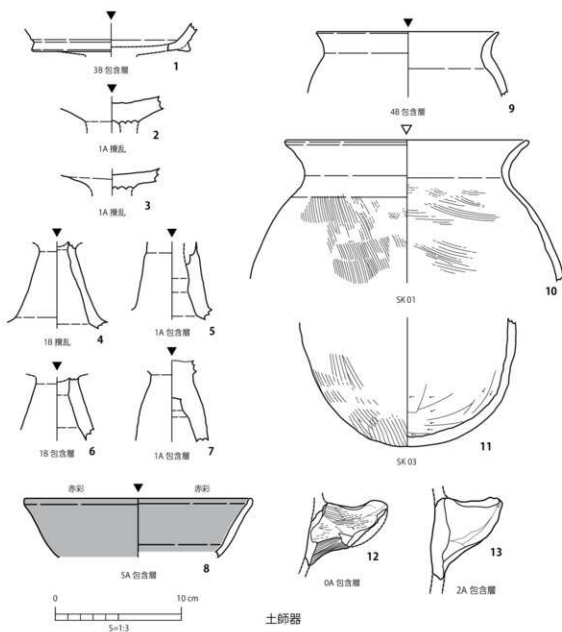
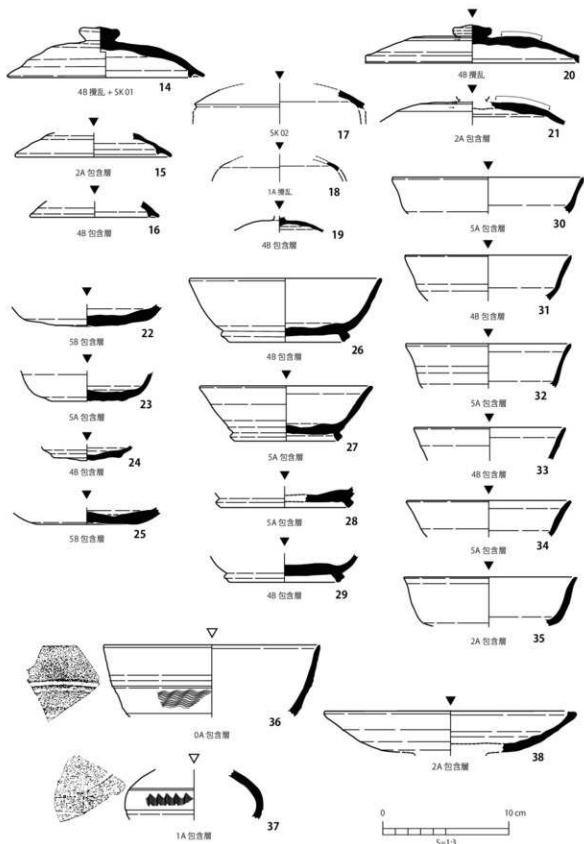


図42 符津C遺跡 出土遺物実測図1



須惠器 (1)

图 43 符津 C 遺跡 出土遺物実測图 2

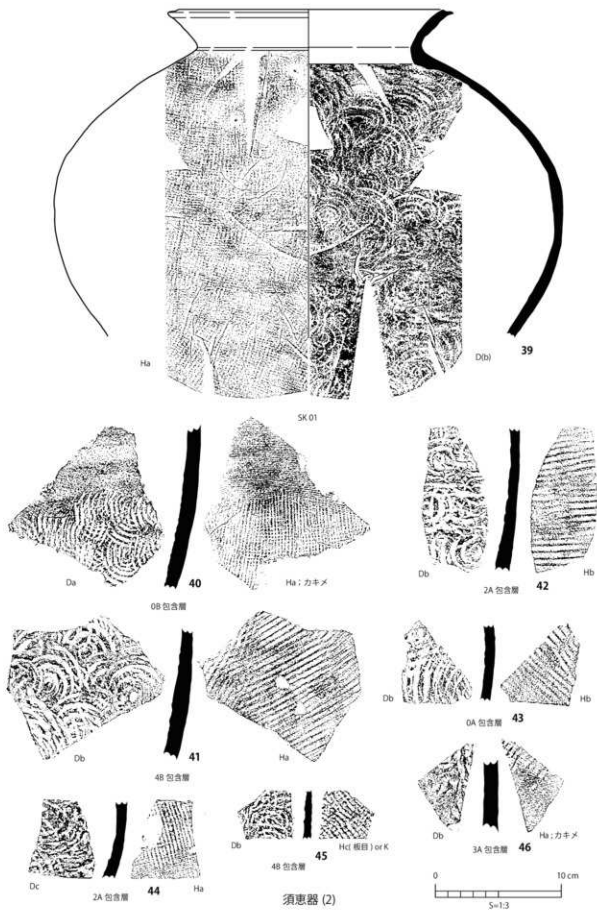


図44 符津C遺跡 出土遺物実測図3

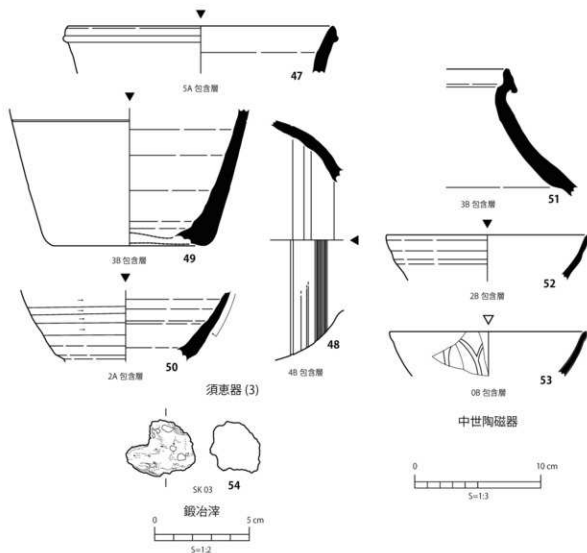


図 45 符津 C 遺跡 出土遺物実測図 4

第 4 節 小 結

本遺跡の発掘調査は、古墳時代から古代にかけての月津台地における遺跡の趨勢に係る既往の所見を、狭隘な調査区に凝縮したような結果となった。古代集落としての遺跡の発見自体は蓋然的なものであったが、古墳の周溝の検出という予期せぬ発見もあった。ただし、古墳の周溝と最終的に判断することについて逡巡逡巡があったことも事実であり、判断の根拠にしてみきわめて脆弱かつ傍証的なものに過ぎない。

本章で古墳として報告した SX 01・02 からは有意な遺物が出土しなかったが、周辺の掘削で続々と出土した土師器高坏の破片には須恵器が伴わず、調査中には、組成としての特異性を直感した。本報告では、これらを漆・13 群に比定したわけだが、出土品整理の結果、これと矛盾しない TK 47 に比定できる須恵器も確認できた。これらが古墳にかかる遺物とすれば、古墳の築造時期もここに比定することになるが、この場合、三湖台古墳群としては御幸塚古墳と並ぶ最も初期の古墳ということになる。ただし、須恵器の破片はわずかながらも、6 世紀前半代までを範疇に入れて評価することが必要で、古墳自体も調査区外にまだ存在する可能性も勘案しなければならない。

表6 符津C遺跡 出土遺物属性表

図	区	発掘	出土位置	種別	品名	寸法 [cm]	質量	色相色調	胎土色調	胎土	胎土記入 (図和)	胎	底	備考
42	1	H03	3B包埋物	土師器	高杯			10YR 7/3	N 4/0		中胎含む	胎化良		注・13
	2	H06	1A包埋物	土師器	高杯			5YR 7/6	10YR 8/3		中胎含む	胎化良		
	3	H05	1A包埋物	土師器	高杯			10YR 8/3	10YR 8/3		粗胎含む	胎化良		
	4	H01	1B包埋物	土師器	高杯			10YR 8/6	10YR 8/6		胎、粗胎砂含む	胎化良		
	5	H04	1A包埋物	土師器	高杯			10YR 8/3	N 4/0		中胎含む	胎化良		
	6	H02	1B包埋物	土師器	高杯			10YR 8/3	10YR 5/1		胎、粗胎砂含む	胎化良		
	7	H03	1A包埋物	土師器	高杯			10YR 8/3	10YR 5/1		胎、粗胎砂含む	胎化良		
	8	H06	5A包埋物	土師器	杯 (A)	口:18、底:11		2.5Y 5/6	10YR 8/3	赤胎	中胎含む	胎化良		
	9	H09	4B包埋物	土師器	高杯	口:15.0、底:幅:13		5YR 7/6	5YR 7/6		中胎粗る含む	胎化良		
	10	H10	5K 01	土師器	釜	口:19.0、底:幅:16		7.5YR 8/4	10YR 6/6		中胎粗る含む	胎化良		
	11	H11	5K 03	土師器	釜	幅:17		5YR 6/8	7.5YR 8/4		中胎粗る含む	胎化良		
	12	H4	12 9A包埋物	土師器	甌 (1耳)			7.5YR 7/4	10YR 8/1		中胎粗る含む	胎化良		
	13	H4	13 2A包埋物	土師器	甌 (1耳)			10YR 7/2	10YR 7/4		中胎粗る含む	胎化良		
14	S01	4B覆瓦・SK 01	須恵器	坪G蓋	口:16.0、底:高:4.0、底高:1.1		2.5Y 6/1	2.5Y 6/1		細、粗胎粗る含む、鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	古代 II、南加賀	
15	S05	2A包埋物	須恵器	坪G蓋	口:12.0、底		2.5Y 7/1	2.5Y 7/1		中胎含む、鉄灰土胎物あり	還元良	胎化良	古代 II、南加賀	
16	S06	4B包埋物	須恵器	坪G蓋	口:10.0、11		2.5Y 7/1	2.5Y 7/1		中、粗胎あり	還元不良	胎化良	古代 II、南加賀	
17	S37	SK 02	須恵器	坪H蓋			5Y 6/1	5Y 7/1		中、粗胎含む、鉄灰土胎物あり	還元不良	胎化良	Tk47、南加賀	
18	S38	1A包埋物	須恵器	坪H蓋			N 6/0	N 6/0		細胎、粗胎粗る含む	還元良	胎化良	MT15、TK10、梅田	
19	S04	4B包埋物	須恵器	坪G蓋			N 6/0	N 6/0		細、中胎含む、粗胎あり	還元良	胎化良	古代 II、南加賀?	
20	S02	4B覆瓦	須恵器	坪B蓋	口:17.0、底:高:3.0、底高:0.9		2.5Y 6/1	2.5Y 6/1	黄緑	中胎粗る含む、胎、粗胎砂、鉄灰土胎物あり	還元良	胎化良	古代 II、中、南加賀	
21	S03	2A包埋物	須恵器	坪B蓋			2.5Y 6/1	2.5Y 7/1		中胎粗る含む、鉄灰土胎物あり	還元良	胎化良	古代 II、中、南加賀	
22	S46	5B包埋物	須恵器	坪G蓋	底:10.0、高		2.5Y 7/1	10Y 7/1		中胎含む、鉄灰土胎物あり	還元不良	胎化良	古代 II、南加賀	
23	S17	3A包埋物	須恵器	坪G蓋	底:6.0、高		N 7/0	2.5Y 7/1		中、粗胎、鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀	
24	S18	4B包埋物	須恵器	坪G蓋	底:6.0、高		N 7/0	7.5YR 7/1		中胎含む	還元良	胎化良	南加賀	
25	S19	5B包埋物	須恵器	坪 (A)蓋	底:8.0、14		2.5Y 7/1	N 7/0		中胎含む、鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀	
43	26	S09	4B包埋物	須恵器	坪B身	口:15.0、底:幅:10.0、底:高:3.1、台高:0.6		2.5Y 6/1	10Y 8/1		中、粗胎あり	還元不良	胎化良	南加賀
	27	S08	5A包埋物	須恵器	坪B身	口:14.0、底:幅:9.0、底:高:4.4、台高:0.6		2.5Y 7/1	2.5Y 7/1		中、粗胎含む、鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀
	28	S07	5A包埋物	須恵器	坪B身	台:11.0、14.0、高:0.5		2.5Y 7/1	2.5Y 7/1		中胎含む	還元良	胎化良	南加賀
	29	S10	4B包埋物	須恵器	坪B身	台:10.0、9.4、台高:0.6		N 7/0	2.5Y 6/1		中、粗胎含む、鉄灰土胎物あり	還元良	胎化良	南加賀
	30	S15	5A包埋物	須恵器	坪B身	口:15.0、03		2.5Y 7/1	N 7/0		中胎含む、粗、粗胎砂あり	還元良	胎化良	南加賀
	31	S12	4B包埋物	須恵器	坪B身	口:13.0、11		2.5Y 6/1	N 7/0		中胎 / 鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀
	32	S14	5A包埋物	須恵器	坪B身	口:13.0、11		2.5Y 6/1	2.5Y 6/1		中胎含む、鉄灰土胎物あり	還元良	胎化良	南加賀
	33	S13	4B包埋物	須恵器	坪B身	口:12.0、08		2.5Y 7/1	2.5Y 7/1		中胎粗る含む	還元良	胎化良	南加賀
	34	S14	5A包埋物	須恵器	坪B身	口:13.0、06		N 6/0	2.5Y 7/1		中胎含む、粗、粗胎砂あり	還元良	胎化良	南加賀
	35	S20	2A包埋物	須恵器	坪 (A)身	口:14.0、底:幅:11.0、底:高:4.0		2.5Y 7/1	2.5Y 7/1		中胎含む、鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀
	36	S22	0A包埋物	須恵器	無蓋高杯	幅:11.0、06		N 6/0	N 6/0		細、粗胎粗る含む、黄赤胎に類似	還元良	胎化良	Tk47、外米、(不)
	37	S23	1A包埋物	須恵器	無蓋	幅:11		2.5Y 7/1	N 5/0		中胎含む、鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀
	38	S21	2A包埋物	須恵器	高杯	幅:120.0、底:幅:3.3		2.5Y 5/1	N 6/0		中、粗胎含む	還元良	胎化良	南加賀
39	S36	SK 01	須恵器	甕	口:22.0、底:幅:18.幅:40		2.5Y 6/1	2.5Y 7/2		中、粗胎粗る含む、鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	古代 III、南加賀	
40	S28	0B包埋物	須恵器	甕			2.5Y 7/1	2.5Y 7/1		中、粗胎粗る含む、粗胎粗るにあり、鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀	
44	41	S33	4B包埋物	須恵器	甕		7.5Y 6/1	2.5Y 7/1		中、粗胎含む	還元不良	胎化良	南加賀	
	42	S31	2A包埋物	須恵器	甕		2.5Y 7/1	N 6/0		中、粗胎含む	還元良	胎化良	南加賀	
	43	S29	0A包埋物	須恵器	甕		2.5Y 7/1	10YR 7/2		中胎 / 鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀	
	44	S32	2A包埋物	須恵器	甕		N 7/0	10YR 7/2		中胎 / 鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀	
	45	S30	4B包埋物	須恵器	甕		N 6/0	10YR 7/1		中胎含む、鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀	
	46	S34	3A包埋物	須恵器	甕		N 7/0	10YR 7/2		中胎粗る含む	還元良	胎化良	南加賀	
	47	S26	5A包埋物	須恵器	甕	口:21.0、08		2.5Y 7/1	10YR 8/2		中、粗胎含む、鉄灰土胎物含む	還元不良	胎化良	南加賀
45	48	S27	4B包埋物	須恵器	甕		2.5Y 7/1	2.5Y 8/1		中、粗胎粗る含む、鉄灰土胎物あり	還元良	胎化良	南加賀	
	49	S24	3B包埋物	須恵器	土師器	底:12.0、11		2.5Y 7/1	7.5YR 8/2		中、粗胎粗る含む、鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀
	50	S25	2A包埋物	須恵器	甕		N 7/0	10YR 7/1		中、粗胎砂、鉄灰土胎物含む	還元良	胎化良	南加賀	
	51	S35	3B包埋物	須恵器	甕		N 6/0	2.5Y 7/1		中、粗胎砂、粗胎にあり	還元不良	胎化良	南加賀 V	
	52	C01	2B包埋物	青磁	甌	口:16.0、06		≧N 8/0	≧N 8/0	透明胎	中胎含む、粗胎粗るにあり	還元不良	胎化良	
	53	C02	0B包埋物	青磁	甌	口:16.0、02		7.5Y 7/1	N 8/0	青磁胎		還元良	胎化良	最近泉系
	図	区	発掘	出土位置	種別	寸法 [cm]	質量 [g]	色相色調	胎土色調	胎土	胎土記入 (図和)	胎	底	備考
45	S4	D-01	SK 03	須恵器	鉢	口:3.6、幅:3.0、厚:2.6	18.4	10YR 5/4			なし	なし		

注 1 胎土記入 (図和) 物としての「胎」はその主成分としての石英・長石類を指す。
 2 胎土記入 (図和) 物としての「胎物」は、肉眼でもある程度粗品が看取されるものを指す。「鉄灰土胎物」は、ここでは内関石・輝石を指す。
 3 胎土記入 (図和) 物の含炭量は、土壌調査における炭酸の測定法を採用し、0%・極少量あり・2%・あり・5%・含む・15%・含む・40%・粗る含む・とした。
 4 砂の粒径は Wentworth 法に準拠して分類し、1/16mm・極細砂<1/8mm・細砂<1/4mm<中砂<1/2mm・粗砂<1mm・極粗砂>2mm とし、実際の観察には、これに準拠して作成した子製の粒度標本を使用した。
 5 構成について、次の原則を定義した。
 (1) 土師胎は、内部の色(中心)の(明度が5以下)を「未胎化」、表面の色が異なる(明度が1以下)を「不良」とした。ただし、表中に「不良」はない。
 (2) 須磨・陶磁器は、内部に発色があるもの(褐色系の色相か明度が2以上)で「未還元」、生焼けを「不良」とした。ただし、「生焼け」の判定は任意。

第VI章 漆町遺跡発掘調査（白江・ツカマツ地区）

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

小松市白江町地内で計画された共同住宅建設について、平成16年8月4日付で、宮本哲寛より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。埋蔵文化財調査室（以下、市埋文）は同日、計画地が既知の漆町遺跡の域内にかかるため、試掘調査を実施する旨を回答した。

試掘調査は9月7日付で依頼を受けて同13日に実施し、試掘坑10箇所中8箇所で須恵器・土師器の出土を確認した。計画地は、尾小屋銅山の鉱毒問題に端を発する県営公害防除特別土地改良事業（以下、公特）によって客土工事が施された区域に含まれ、層厚約30cmの客土直下にわずかな旧耕土の跡床層を挟んで遺物包含層が広がっていた。

計画建物の基礎の設計は柱状改良によるものだったが、仕様上保護層の確保が不可能と判断されたため、建物範囲と浄化槽埋設範囲の約300m²について発掘調査を必要とする由を仲介する施工業者に説明した上で、事業主の了承を得た。

共同住宅建設ということだが、事業主は個人であり、石川県教育委員会文化財課の指導に基づいて、調査費用の一部を事業者負担の上で国庫補助事業対象とし、10月4日付で文書により正式な依頼を受け、10月12日付で、これまでの協議に基づいて協定書を交換し、発掘調査に着手する運びとなった。

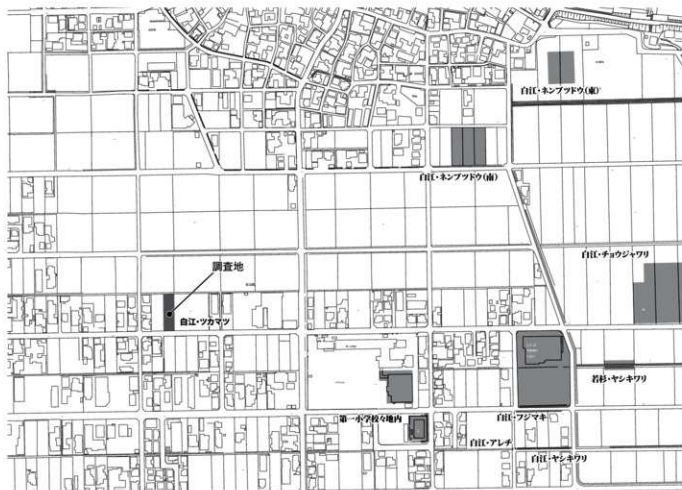


図46 漆町遺跡 既往の調査地と今回調査地

2 調査の方法

発掘調査に先立ち、4級基準点測量業務委託により調査地前面道路を通るトラバースを設定した。調査区は、調査地の敷地境界を示すプレートと杭に基づいて正中線を定め、これに基づいて5mスパンのグリッドを設定し（図47）、トラバースを与点として座標を把握する方法を採った。

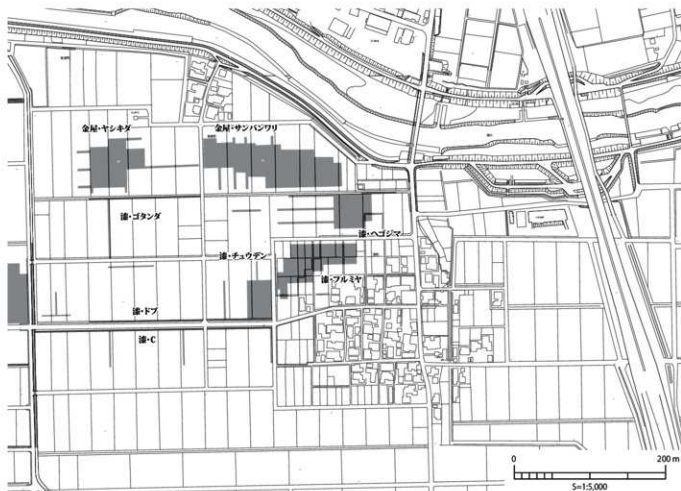
なお、調査地の名称は、公特に係る既往の調査に則って「町名・通称名」とし、「白江・ツカマツ地区」と呼称するものとした。

3 調査の概要

10月20日、台風23号「TOKAGE」に伴う大雨で調査地周辺一帯は冠水し、翌日に予定していた着手日を一日順延せざるを得なくなった。台風の被害はさほどでもなかったが、北側に面する排水路との比高差が殆どないことから、調査着手までの排水の目的で切った畦畔を土嚢で復旧し、調査区の排水溝を掘削した。午後には浄化槽区の発掘にかかり、少量の遺物は出土したものの遺構はなく、半日で完了した。

週が明けた10月25日、排水の進んだ地盤改良区の掘削を開始した。出土する遺物は同様に少量だったが、調査地の土性は重粘土で掘削にかかる負担が大きく、すべからく遺構精査にもある程度の熟練を要する状況であった。包含層の掘削は7日間を要し、11月5日に完了した。

遺構精査は、包含層掘削に並行して調査員2名により先行して始めていたが、11月8日より作業員もこれに加わった。この結果、検出された遺構は土坑1基と溝1条で、ほかは自然流路跡を検出したのみであり、11月25までにすべての作業が完了し、12月1日に事業者に引き渡した。



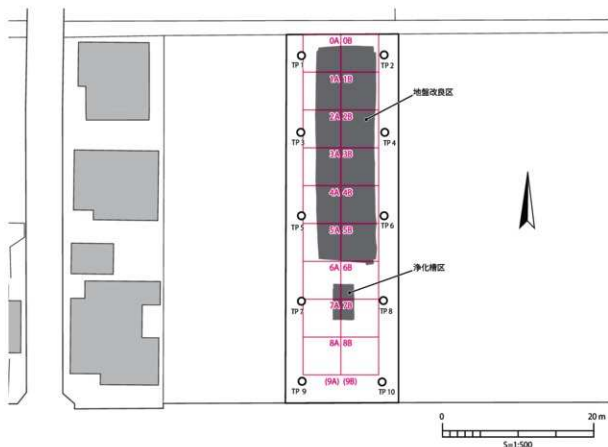


図 47 漆町遺跡（白江・ツカマツ地区）グリッド配点図

4 出土品整理

出土物はわずかで、土坑出土の打製石鏃 1 点を除いてほかは包含層出土であり、調査完了の時点で洗浄と注記は調査員の手により完了していた。本報告に係る実測作業は、出土品整理作業員により平成 18 年度に実施した。トレースはデジタルトレースにより調査員が行い、拓影は調査員が採拓ののち 600dpi モノクロモードでスキャンした画像（TIFF 形式 ZIP 圧縮保存）を使用した。

第 2 節 既往の調査の知見

はじめに

本報告に係る白江・ツカマツ地区（以下、本地区）については、報告すべき内容が極めて限定的であることから、まず、漆町遺跡における既往の調査から得られた知見を俯瞰しておこう。

漆町遺跡は、公特に係り石川県立埋蔵文化財センター（以下、県埋文）が実施した試掘および発掘調査により、梯川左岸域約 200,000m² に亘る弥生時代中期～中近世にかけての複合集落遺跡とされている。調査地の位置と呼称は図 46 に示すとおりである。第一小学校々々地内地区と本地区を除いては公特に係る調査地で、これらのうち、白江・チョウジャワリ地区（調査当時は「漆町西遺跡」）、白江・ネンブツドウ（南）地区（調査当時は「白江念仏寺塔遺跡」）、漆・C 地区は市埋文（当時は社会教育課、以下同じ）が発掘調査を受託して実施している。

これら調査の成果で最も特筆されるのは、古墳時代の土師器編年、いわゆる「漆町編年」（田嶋 1986）だろう。分類は緻密かつ明快で、その後若干の修正が加えられているが、北陸においては、少なくとも須恵器出現より以前の古墳時代の時間軸は事実上これを基軸としている。

集落遺跡としての時代は、大きく分けて弥生～古墳時代と律令期以降の古代～中近世に区分できる。概ね、前者は古墳時代前期～中期に盛期があり、後者は平安～鎌倉時代にかけて盛期がある。漆町遺跡は、実質的にこの二時期の複合集落遺跡と捉えるのが現段階では妥当だろう。包含層遺物はあくまで傍証的な資料であり、集落遺跡としての評価に安易に直結させるのは適当でないだろう。

1 弥生～古墳時代

前述の「漆町編年」でいえば、主要なところは漆・5～13群、すなわち白江期～宮地期とされる。該期の遺構は溝状遺構と土坑が主で、県埋文の調査に係る白江・ネンプツドウ（東）地区と金屋・サンバンワリ地区で遺物量が膨大で、件の編年資料に供されており、碧玉製腕飾類未成品や滑石製模造品などの出土もある。集落遺跡としても、この両者に分布的中心が求められる。

建物跡は、相対的に掘立柱建物跡が主で、報告書を瞥見する限り、竪穴建物跡は遺構としての構造が明確にできる状態での検出例に恵まれていない。市埋文の調査に係る第一小学校々地内地区で「方形周溝状遺構」と報告されたもの（市教委 1987）は、後に「平地式建物跡」として敷衍される緒例となる遺構である。そういう意味では、例えば白江・ネンプツドウ（東）地区には同様に複合する溝状遺構が円周を描く箇所も見え（県埋文 1989）、記録類の再精査は必要だろう。

2 平安～鎌倉時代

律令期以降、集落としての盛期を迎えるのは概ね平安時代で、漆町遺跡のうちでは最も遺構の分布が広い。掘立柱建物跡と井戸跡が普遍的に分布し、主に9世紀後半以降の時期に掘立柱建物群が濃密に分布する状況が、金屋・ヤシキダ地区や漆・フルミヤ、漆・チュウデン地区で顕著であり、これらの区域に分布的中心を求められそう。分布は総じて白江・チョウジャワリ地区以東にあるようで、白江・フジマキ地区は耕地跡とされ、これ以西では、第一小学校々地内地区で別の遺構群を形成しているようだ。出土遺物には、瓦片のように建物跡の属性に係る傍証的な資料や、墨書土器、緑釉・灰軸陶器、石帯類など、集落跡の性格を示唆する資料が得られている。

中世には、分布の傾向は現集落の分布と近く、白江集落に隣接する白江・ネンプツドウ地区、金屋集落の立地する自然堤防上の金屋・ヤシキダ地区、金屋・サンバンワリ地区に領域としては縮小し、古墳時代の分布領域とほぼ同じ状況となる。こうした分布状況の主体は鎌倉時代で、金屋・サンバンワリ地区のみ、南北朝期以降室町時代まで存続する趨勢のようだ。

引用・参考文献

- イ 石川県埋蔵文化財センター（1986）漆町遺跡Ⅰ
- 石川県埋蔵文化財センター（1988）漆町遺跡Ⅱ
- 石川県埋蔵文化財センター（1989）漆町遺跡Ⅲ
- 石川県埋蔵文化財センター（1989）漆町遺跡Ⅳ
- コ 小松市教育委員会（1987）第一小学校々地内漆町遺跡発掘調査報告書、石川県
- タ 田嶋 明人（1986）考察―漆町遺跡出土土器の編年的考察―、漆町遺跡Ⅰ、石川県埋蔵文化財センター、p101-186

第3節 層位の所見と検出された遺構

1 層位の所見（図48）

本地区は、漆・ヘゴジマ地区を基点に叉状に分布する自然堤防群の南側に位置し、北に緩やかに傾斜している位置にある。10月20日の大雨で冠水した際の状況では、白江集落との間にある農道は完全に水没し、間に緩やかな谷地形があることが容易に看取された。また、包含層掘削の際に悩まさ

れた重埴土層は、自然堤防に挟まれた後背湿地の状況を示しているものと理解された。

AS層は公特客土で、表土除去の段階で著しく硬化して跡床を形成している状況が明らかだった。Sect. 2とSect. 5の地点で見られるApg層は、公特以前の旧耕土の跡床層である。少なくとも、ここまでの土層は、耕地の造成に伴う人為的な地層であることがはっきりしている。

Ag層は遺物包含層となっていて、試掘調査の所見ではApg層と区別されていない。Ag層は、Sect. 4の地点周辺を除けば下位のCg層と不連続な重なり(連続的でない堆積という意味で、層界の「不連続」とは別義)を呈し、明確な攪拌は看取されないものの、大正期の耕地整理などで改変された人為的な堆積層の可能性を考慮しなければならない。結論を先に述べれば、Ag層に包含されていた遺物の分布状況は、検出された遺構となら相関性が認められず、人為層としての蓋然性が高い。

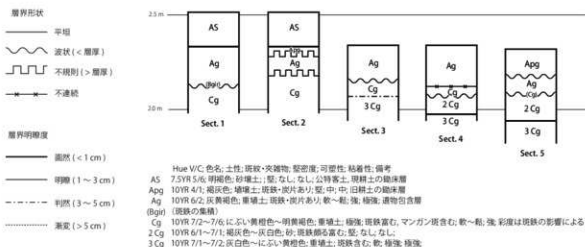


図 48 漆町遺跡(白江・ツカマツ地区) 西壁セクション土層柱状図

2 検出された遺構(図 50)

(1) SK 01

検出した段階では溝(破線のプラン)と思われた土坑であり、破線のプランは検出面から溝状に僅かに凹むだけで、この東隅に土坑を確認した。溝状の凹みは、土坑から溢れた水が流出した痕跡のように思われた。土坑の覆土は遷移的で下底部は粗糲な泥層であり、木葉層を挟む部分的なビートも見られ、ある期間、水が溜まった状態の穴ではあったようだ。ここから打製石鏃が1点出土した。

(2) SD 01

自然流路から鉤状に分岐する溝である。自然流路は複数交叉した状況が見られ、砂を帯びた埴土層となっていた。判然としないプランにも人為性は認めにくい。しかるに旧河道というほどの恒常的な流水痕とも認めにくく、侵食の痕跡か、洪水した後背湿地の吐水の過程で生じたものと思われる。流水痕は概ね南東から北西に向いており、SD 01もSK 01から延びる流水痕も同じ方向を向いている。旧地形の傾斜を暗示するものだろう。

SD 01はこの自然流路の掘削中に検出されたものであり、プランは右肩で明瞭であった。下底部には木炭片の集積があり、人為的な溝であることに相違ない。分岐箇所は自然流路の下底より低く掘り込んでおり、排水を促したのか、何らかの目的で水を引き込んだものと思われる。SD 01・自然流路ともに、出土遺物はなかった。

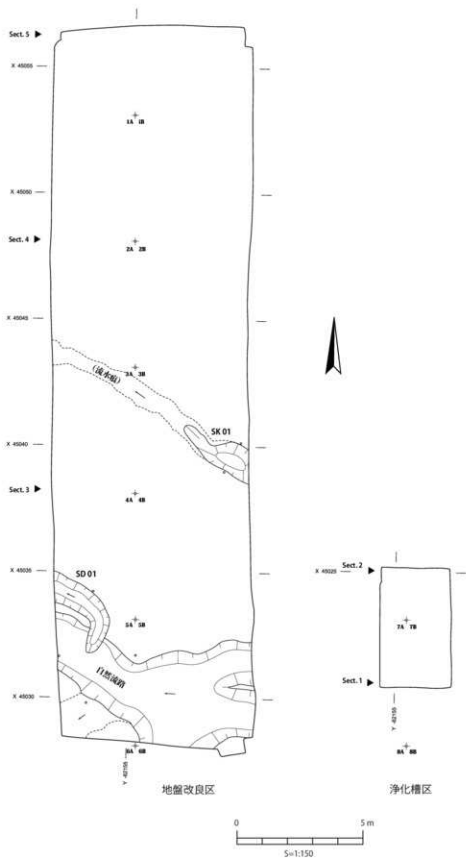


図49 漆町遺跡（白江・ツカマツ地区）平面図

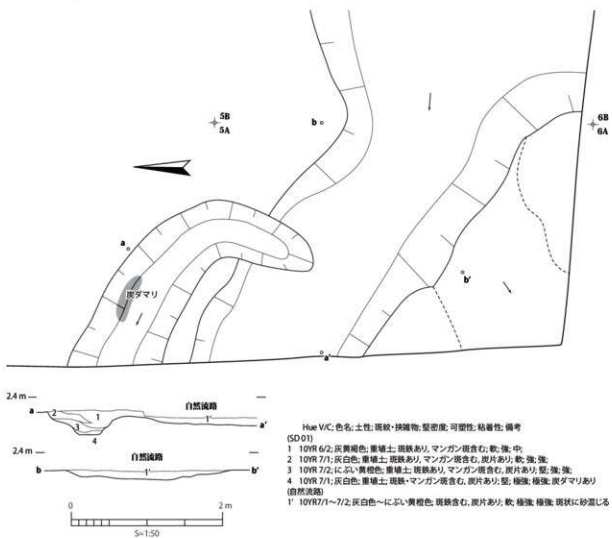
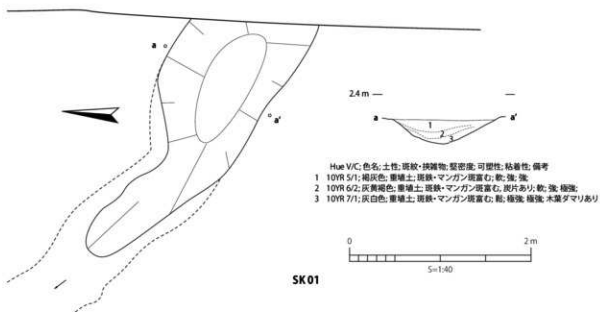


図 50 漆町遺跡 (白江・ツカマツ地区) 遺構実測図

第4節 出土遺物

1 古墳時代～古代の遺物

(1) 土師器（図51-1～6）

1～3は釜である。「く」の字口縁となる1・2は古代Ⅱ期後半頃、屈曲して縁帯をなす口縁の3は古代Ⅶ期まで下がる資料か。

4～6は内黒埴である。4は有高台、ほかは無高台であり、いずれにも赤彩はない。古代Ⅵ期の範疇で理解される資料であろう。

(2) 須恵器（図51-7～図52-38）

7～11は坏Hである。8・9の蓋身はTK10～TK43、10・11の身はTK209～TK217に比定される型式と思われ、後者は概ね古代Ⅰ期の範疇で理解される。

12～20は坏G・坏Aである。15は坏Gの身かもしれないが、16～20の底部破片はいずれも坏Aである。坏Gの蓋となる12～14は概ね古代Ⅰ～Ⅱ期の範疇、坏Aは古代Ⅵ期までの資料を含むようだ。

21～29は坏Bである。蓋の特徴でいえば、古代Ⅳ～Ⅴ期の範疇で理解される一群であろう。

30～36は甕、37・38は壺である。30の口縁端面を縁帯とする特徴は古代Ⅵ期の範疇で理解されるが、殆どは細片資料で、ほかに有意な特徴は見出されない。

2 中世の遺物（図53-39～45）

39は加賀大甕である。口径は復元できない。口縁部の特徴から13世紀中葉の所産と思われる。

40は珠洲擂鉢である。口縁部が欠損しているが、鮮明な鉾目は13世紀後半以降の所産だろう。

41は加賀片口鉢である。片口の部分は殆ど推定だが、指オサエの痕はよく見える。体部は成形に伴う工具痕と見られる条線が明瞭である。

42・43は瀬戸である。42は直縁大皿と思われるが施軸が認められず、内面に発泡した溶着物が認められる。43は折縁小皿である。これらはいずれも古瀬戸後期と思われ、15世紀代の所産か。

44は土師器皿である。胎土精良、薄手の成形である。

45は白磁碗である。高台の特徴は森田B群（森田1982）に比定され、14世紀代の所産だろう。

3 その他の遺物

(1) 打製石鎌（図53-46・47）

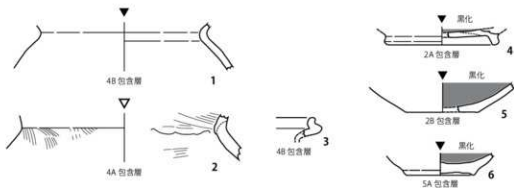
SK01出土は47で、46も周辺の精査中に包含層なし攪乱層（Ag層）から出土した。46は基部を折損し、石鎌としては大型の部類である。これらの共時性は不明だが、弥生時代の所産だろう。

(2) 鍛冶関連遺物（図53-48・49）

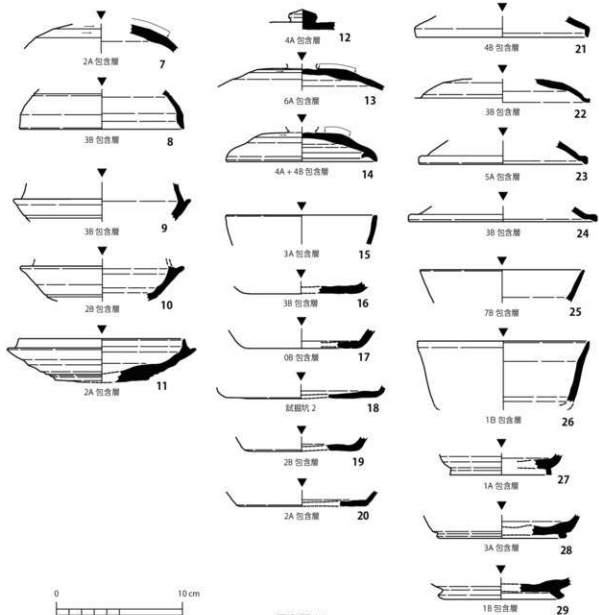
図示したのはいずれも杓形鍛冶滓であり、鉄塊片を含む。羽口片のほか、鋳造品と思われる鉄片も出土した。時代比定する根拠はないが、平安時代～中世のいずれかのものと思われる。

引用・参考文献

- コ 小松市教育委員会（1987）第一小学校々地内漆町遺跡発掘調査報告書、p22-23、石川県
 タ 田嶋 明人（1986）考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－、漆町遺跡1、石川県立埋蔵文化財センター、p187-202。
 モ 望月 精司（1990）考察－南加賀古窯跡群成立期の様相－、二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡、小松市教育委員会、p126-148、石川県
 森田 勉（1982）14～16世紀の白磁の型式分類と編年、貿易陶磁研究2、日本貿易陶磁研究会、p47-54。



土師器



須恵器 (1)

図 51 漆町遺跡 (白江・ツカマツ地区) 出土遺物実測図 1

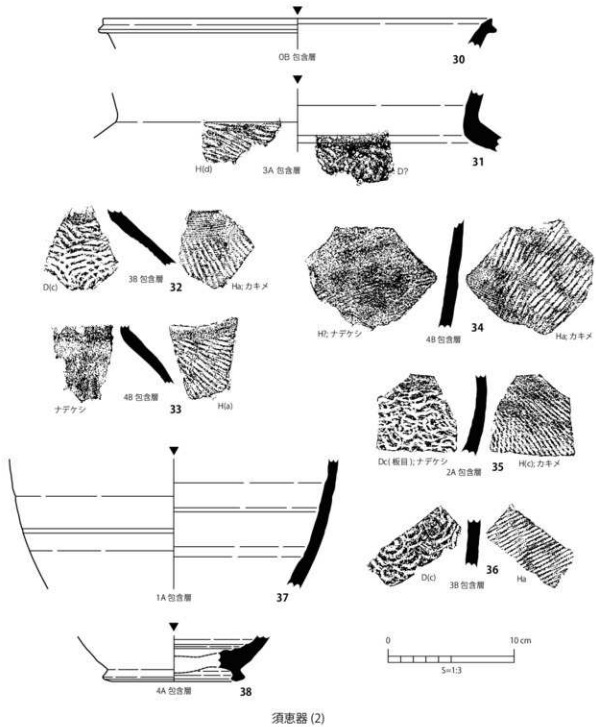
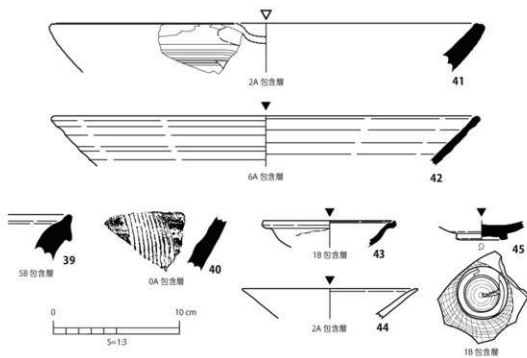
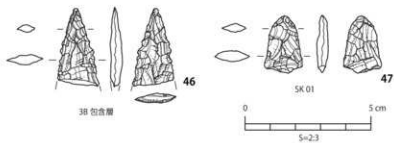


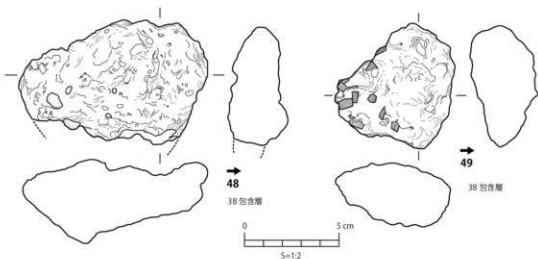
図52 漆町遺跡（白江・ツカマツ地区）出土遺物実測図2



中世陶磁器ほか



打製石鏃



鍛冶関連遺物

図 53 漆町遺跡 (白江・ツカマツ地区) 出土遺物実測図 3

第5節 小結

既述のとおり、本章で報告すべき内容はきわめて限定的である。本地区の地理的位置は、自然堤防を南側に控えた後背湿地に傾斜する地点に当たり、自然流路をはじめとする流水痕跡は南東から北西に進路をとっていた。これは、第一小学校々地内地区で検出された溝状遺構群ともほぼ一致し、この境界で用排水路が整備される以前の明治期の白江用水の進路とも一致する方角を向いている。したがって、これら溝状遺構群が水路としての役割を担っていたとすれば、地形的な要因ですばからく同様の方角に掘削されたといえるもので、少なくとも、古墳時代以降に自然堤防を発達させるような洪水等の自然災害はなかったと見られる。公特以前にはほぼ耕土直下で遺構が検出される状況だったこともこの傍証となるだろう。遺跡は殆ど埋没していなかった。

こうした状況は、既往の調査地の地区名に冠される通称地名でも、昔時の集落を示唆する「ヤシキダ」、「ヤシキワリ」をはじめ、「フルミヤ」、「チョウジャワリ」、「ネンブツドウ」といった、かつて存在した「何か」にまつわる伝承に由来すると見られるものが目立つ。本地区にかかる「ツカマツ」もいずれかの時期まではそこに塚状の高まりが存在したことによるものだろうが、「塚」にまつわる伝承のようなものは無い模様で、「塚」から想起される、例えば古墳であるとか経塚であるとか、そういったものの存在と結びつく要素は、今回の調査では見つからなかった。

本地区の出土遺物は、打製石鏃 1 点を除けばすべて包含層（Ag 層）からの出土で、広くうすく「まんべんなく」包含しているという印象だった。検出された遺構との相関があるとすれば、遺物は殆ど出土しない状況であったと考えられる。ゆえに本地区の包含層は人為層としての蓋然性が高く、同じような状況は周辺一帯に認められたはずである。

さて、図 54 は『軽海用水誌』（編纂委 1996）210～211 頁の水路図を基図として、包蔵地範囲と漆町遺跡の調査区を合成したものである。出典は概見測図であり正確なものではないが、耕地整理により用排水路が整備される以前の状況がよく分かる。これら水路群は、自然河道を利用したものであったといわれている。本地区の西側に近接して、平成 15 年度の試掘で溝状遺構を伴う包蔵地が確認されており、「白江遺跡」と別の名称を付しているが、既往の調査区とかけ離れた位置にある本地区の包含層出土遺物は、むしろこれと相関する可能性を考慮すべきではないだろうか。少なくとも、既往の調査地との間には、自然堤防に挟まれた後背湿地を介在しているようだ。



図 54 明治 20 (1887) 年の水路図と漆町遺跡調査区的位置関係 (包蔵地範囲分布は一部省略)

第 VII 章 薬師遺跡発掘調査

第 1 節 調査の概要

1 調査に至る経緯

平成 16 年 2 月 9 日、財務省北陸財務局（以下、財務局）より、小松市矢崎町地内の国有地売却に係り、埋蔵文化財について照会があった。折しも市道矢崎町 2 号線の発掘調査が実施された直後であり、件の国有地は、この道路に面する位置に所在した。この時は売却予定地の査定が目的だったため、財務局担当官に対し、当該地は既知の薬師遺跡の域内に所在し、埋蔵文化財調査室（以下、埋文）とこの取扱いについて協議を持ち、試掘調査の結果を踏まえて適切な保護措置を講じる必要がある旨を、口頭で伝えただけにとどまった。

平成 16 年度、当該地は競売に付され、これに入札する予定の（有）佐々木不動産より、埋蔵文化財に関する照会があった。同社は当該地を宅地として販売することを希望しており、入札の参考としたい由だったので、平成 16 年 10 月 8 日付で協議書を受け、財務局の承諾を得た上で、翌週の 10 月 15 日に試掘調査を実施した。この結果を踏まえ、参考として、想定される事務の流れを口頭で説明した。結果、当該地は同社が落札購入し、程なく住宅新築を希望する個人との売約が成立した。

平成 17 年 6 月 22 日付で、当該地の購入予定者より発掘調査依頼があった。当該地は事前を実施された地盤調査の結果、改良が必要とされ、発掘調査による記録保存が必要な由で、調査の目的が個人住宅建築であることから国庫補助事業対象とした。併せて同日、発掘調査に関する協定書を交換して発掘調査に着手する運びとなったが、土地売買契約の締結は発掘調査完了後とされていたために発掘調査の時点での当該地の名義は（有）佐々木不動産のままとなっており、国庫補助対象事業としては、協議から発掘調査に至る一連の事務の取扱いは最後まで変則的なものとなった。

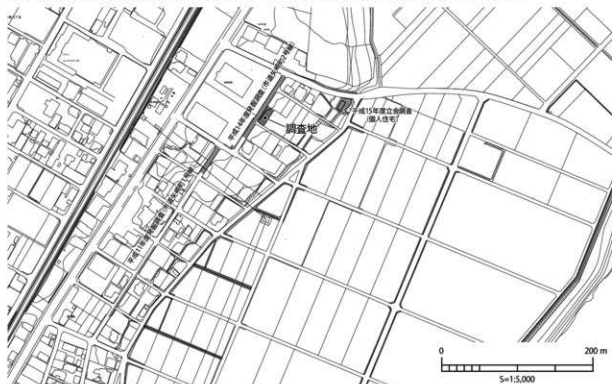


図 55 薬師遺跡 調査地位置図

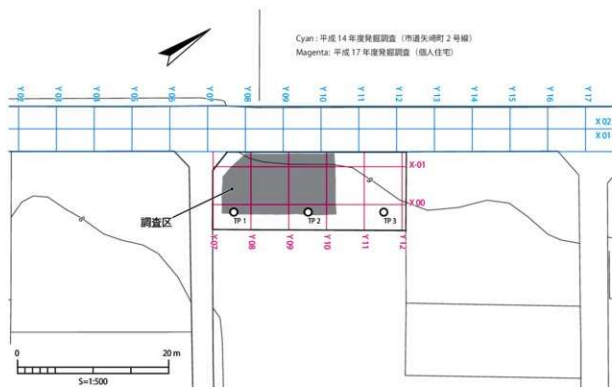


図56 業師遺跡 グリッド配点図

2 調査の方法

発掘調査に先立ち、4級基準点測量委託により調査地前面道路（市道矢崎町2号線）を通るトラバースを設定した。併せて3級水準点測量により仮BM点も設定されているが、既往の市道改良に係る調査平面図の標高値が不自然に大きいことに気がついた。当時の調査では既設のBM点を利用したということだったが、これに誤りがあったとは考えにくく、調査で利用する段階のミスとしても、誤差とはどうも考えられない3mを超えるものだった。今となっては憶測にすぎないが、別のBM値と取り違えたとか考えられない。

調査区のグリッドは、市道矢崎町2号線の調査で検出された掘立柱建物跡（SB 04）の柱穴が検出されることが想定され、平面図の合成を考慮し、当時の調査には基準点測量による公共座標の把握がされていなかったことから、これに準拠したグリッド配点の復元を試みたが、測角による配点があだとなり、調査後の測定では下り側に平均で725mmずれていると推定された（図56）。

本章では既往の調査図面を一部引用しているが、この際、標高値については、図上で矛盾をほぼ解消できる-3.30mと便宜的に仮定している。また、図56の調査区の位置は、図60の調査区の位置とずれているように見えるが、前者の地図は実際に舗装されている範囲が図化されているのに対し、後者は地籍上「道路」となる官民境界標識に基づいて図化されているためである。

3 調査の概要

発掘調査は、7月11日に重機により表土を除去し、同20日までに器材搬入等の準備作業を行い、その翌日より作業を開始した。また、20日には、平成14年度の配水管布設工事に立ち会った際に発見された竪穴建物跡（SI 05）が耕地の法面に露出した状態を平面図化した（図57）。排土の仮置き都合で、包含層掘削はY09のラインで前半と後半に分けることとしたが、ちょうどここに遺物が集中的に包含される傾向が認められ、カマドのソデと思しき焼土塊が顔を出すなど、プランを把握しかねる状況ではあったが竪穴建物跡の存在は確実視された（SI 09）。

とりあえず、この段階では竪穴のプランの検出に努め、おおよそのプランを把握した段階で、カマドの焚き口があると推定される部分を箱状に掘り、これを確認したが、Y09ライン上に辛うじて引っかかったカマドのソデがブツリと切れており、L字状に煙道が曲がる可能性も浮上した。この段階で調査区全体を掘削しなければ十分な記録が残せないと判断されたため、8月1日にこれまでの排土を撤出し、残る包含層の掘削を開始した。果たして、前半の掘削と同様にカマドのソデと思しき焼土塊が顔を出し、件のカマドがL字形となることが確実となった。結局、調査の大半をSI09に費やすこととなり、8月16日に完掘したが、この時点で当初完了を予定した期日は過ぎており、事前に依頼主に対して代理店を通して調査期間の延長を申し入れたものの、連日のスクールも相俟って作業は慌ただしく進めざるを得ない状況だった。SI09のL字形カマドについては、学術的な重要性に鑑み、8月22日に現地で記者発表したが、期間延長の申し入れは、これのためであった。

また、市道矢崎町2号線の発掘調査で検出されていたSB04の柱穴は1基だけが検出され、図上で合成した結果では建物は2間×4間と考えられた。グリッド点の位置がおかしいことに気がついたのは、実際のところこの時点でのことだった。グリッド点のズレは、図上で予め約700mmであろうと見当がつけられたが、官民境界線上のY07～10の地点について予め定めた基点からの距離を測り、これらの結果を平均して誤差を丸める方法を探った。この結果、図上では725mmずらして合成することにした。標高値のズレについてもいくつか補正の方法を検討したが、既設BMを測定しただけでは、実際にはこれを間接的に利用した調査図面の標高値に対する測定誤差を丸める方法がなく(標識として保存された測点がないため)、セクション図上で推定するほかに考えが及ばなかった。

なお、発掘調査はSI09の貼床層とカマドソデの断ち割りをもって完了し、8月26日までに器材等の撤去、工事掘削高までの埋め戻しを施し、代理店を通して依頼主に引き渡した。

また、調査期間中、7月25日に小松商業高校の生徒3名の企業実習を受け入れた。

4 出土品整理

出土遺物は、結果としてその殆どがSI09に直接・間接的に関わるもので占められた。これらの整理作業は、出土品整理作業員により、平成17年度に洗浄・注記から接合・復元まで、平成18年度に実測作業を実施した。トレースはデジタルトレースにより調査員が行い、拓影は調査員が採拓のち600dpiモノクロモードでスキャンした画像(TIFF形式ZIP圧縮保存)を使用した。

第2節 市道改良に係る調査から今回調査まで

薬師遺跡(以下、本遺跡)の所在する丘は今江町と矢崎町を境し、今江町では、昔時麓に薬師堂があったことから「薬師」または「薬師山」と通称され、これを遺跡名に冠しているが、矢崎町では、町内で最高所であることから「タカヤマ」と通称されてきた。昭和30年代の国道8号線建設等により削平されてしまい、昔時の面影はなくなってしまったが、眼下に木場潟を控えて白山を望む風光明媚な段丘地である。現在では、国道沿いに各種店舗が建ち並び、その背後は宅地化しつつある趨勢で、市道矢崎町1・2号線の道路改良により、インフラ整備も進んだ。これに係る発掘調査が、正式なものとしては最初となっている。

埋文では、国庫補助事業として個人住宅建築に係る発掘調査に対応すべく体制整備を進めているところだが、平成15年度からは建築指導課で建築確認概要書を開覧して実態の把握にも努めている。その所見としては、埋蔵文化財の取り扱いについて協議の上でこない事例は予想をはるかに超えて多く、併せてその周知徹底を講じる活動にも取り組んでいる。本遺跡については、平成16年1月に建築確認概要書により協議が上がっていないものが確認され、直ちに電話連絡により交渉した結果、

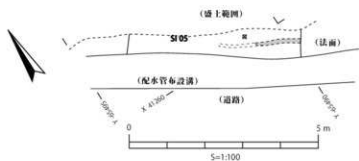


図 57 薬師遺跡 平成 14 年度配水管布設工事立会発見の竪穴建物跡平面概略図

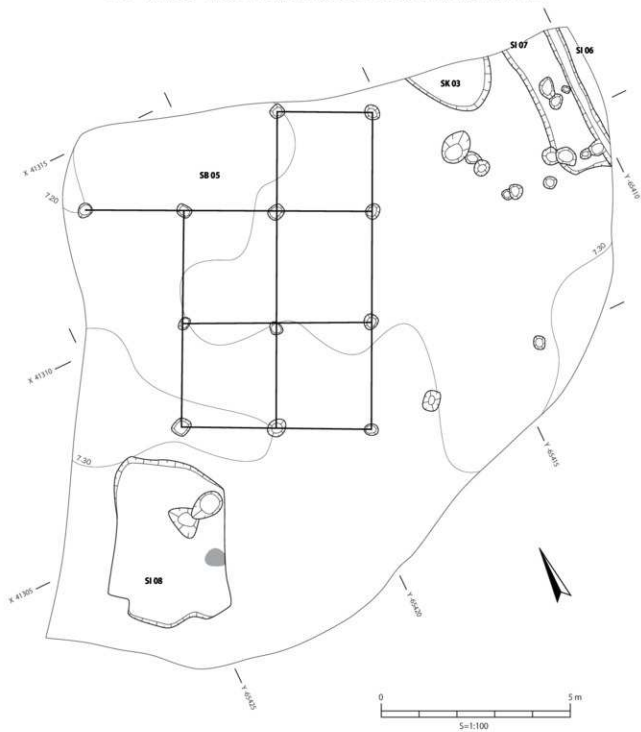


図 58 薬師遺跡 平成 15 年度立会調査平面図

表土鋤取りに立ち会い、応急的な調査を実施することで折り合った。これは現在でも唯一となる応急調査の例だが、建築確認の段階で察知したのではやむを得ない措置であった。この結果は、出土遺物こそ土師器・須恵器の細片がわずかに出土しただけであったが、掘立柱建物跡 1 棟 (SB 05) と竪穴建物跡 3 軒 (SI 06 ~ 08) 等が検出された (図 58)。この界隈の宅地化が進めば、その殆どで適切な保護措置として発掘調査が必要となるであろう。今回の発掘調査が、まさにこの事例にあたる。

第 3 節 層位の所見と検出された遺構

1 層位の所見 (図 59)

本遺跡に限らず月津台地上で普遍的にいえることだが、表土には黒ボク質の A 層が発達している。表層で耕耘される耕土は砂を入れていることが多く、図 59 でいえば Ap 層にあたる。2Ap 層は本来の土壌と見られるが、非常に粗鬆な土層で、入念に耕耘された印象だった。遺物が出土するのはこの層準である。これが旧耕土であれば、Ap 層は盛土された土層かもしれない。

2A 層は、耕耘などの攪拌の痕跡は認められず、この層準から 2B 層にかけて、土性は遷移的に壤質土から埴質土になる。2B 層は、上部は黒ずんだ埴質土 (2B1)、下部で酸化化によく発色した軽埴土 (2B2) が認められた。

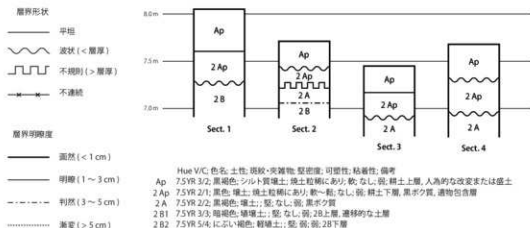


図 59 薬師遺跡 土層柱状図

2 検出された遺構

(1) SI 09 (図 61・62)

既述のように包含層掘削中にカマドソデの一部が露出したことで、2A 層上面付近での検出を試みた。結果としては、当初想定したプランよりひとまわり小さく、カマド自体も L 字形となった。包含層として掘削した 2Ap 層は一部床面まで到達しており、竪穴自体の覆土の保存状態は期待したほどよくはなかった。耕地として整地された時期は定かでないが、竪穴がくぼ地の状態で均された可能性がある。ここで出土した遺物の多くはくぼ地に投棄されたか造成土とともに流し込まれたものだろうが、いずれにせよ、包含されている状態は二次的なものだったと推定される。

竪穴のプランは 5.5m × 6m のやや歪んだ方形で、覆土は図 61 のセクションで 1・2 層が主要な部分となる。調査中には攪乱層として扱った 2Ap 層と明確に掘り分けられたわけではないが、セクションの観察で層界は明瞭であり、2Ap 層はいくぶん泥質を帯びた印象で、雨上がりには、2A 層と比べても明らかに乾燥が遅く、粗鬆な土層で空隙が多い分、雨水の浸透量が多いためのようだった。

貼床層は、埴質土の偽礫に富む黒ボク質土で、偽礫の色調と土性は主に 2B2 層のものと思われた。硬化面は図 61 の一点は線に示す範囲で、図ではカマド焼き口周辺から右側に偏っており、特に柱穴 P3 の周辺で硬化が著しい。また、硬化範囲には、竪穴中央部にあたる位置に焼面があり、カマドの他にも屋内炉として利用されたスペースがあったようだ。

柱穴の埋土も、セクションでは貼床層とよく似たテクスチャーだが、偽礫は貼床層のもののように堅密なものではなく、いくぶんほぐれた印象だった。平面図上で P1 と P3 に色を付けた部分は有意な凹みで柱痕と思われ、柱穴の下底部は相対的に堅密な 2B2 層をさらに掘り込んでいるために、硬化の状況を明確に認識することはできなかった。

カマドは煙道が壁面に沿う L 字形で、ソデは焼き口から左側の遺存状況が良好だった。煙道部分は、埋没後の土壌生物や植物根などの影響で「穴だらけ」の状態で、平面図上で破線の部分が多いのはこのためである。カマドの焼き口はソデの内側で幅 40cm と狭く、ソデ自体は厚さ 30cm ほどあり、見た目にも分厚い印象があった。図上の着色部分がソデで、これに対応する部分を図 62 のセクションにもつけたが、このうち 7' 層は煙道ソデの外側にもよく似た 7 層があり、どちらも偽礫の層で、調査時には煙道の貼床層と認識していたが、破壊時のものかもしれない。後者の場合、平面図上にはソデとしての着色があるが、竪穴壁面へのソデの構築はなかったと見られる。

床面出土遺物は、硬化面とは対照的にカマド焼き口周辺から左側に偏る傾向がある。特にカマドの左ソデに集中する土器片は、貼床層自体がない部分で床面のレベルより下に潜り込むように出土したが、べつだん土坑のようなプランも見えなかった。

出土遺物は、床面出土の主要なところは古代 I～II 期に比定される土師器・須恵器であり、これらは貼床硬化面の周囲に分散する傾向が看取されるが、資料化するべき有意な遺物が集中するカマド左ソデ周辺で、接合および個体識別資料の分散状況(図 62)はカマドの内外に跨る例がある。したがって、これら遺物の散布状況はカマド破壊後の状況と見られ、少なくとも建物の廃絶時期とは有意に結びつけられるだろう。また、カマド周辺に散布する遺物だけに、土師器煮炊具に著しく偏った組成が看取される。

(2) SB 04 (図 63)

矢崎町 2 号線調査区で検出された掘立柱建物跡 (SB 04) の一部となる柱穴 1 基が検出された。これより桁側には柱穴はなく、既調査との位置関係からは、2 間×4 間、約 470cm×740cm の建物規模と見られる。建物軸方位は、約 49° (右回り) である。

柱穴の埋土は、全てが黒ボク質土で、セクションではレンズ状に B 層の偽礫が認められた。これも SI 09 の柱穴の場合と同様に 2B2 層起源の埴土で、いくぶんほぐれた感じの偽礫である。平面図上の着色は柱痕と推定される有意な凹みだが、これもやはり柱穴下底部が相対的に堅密な層準に達しており、硬化の状況を明確に認識できなかった。

出土遺物は、土師器の細片がわずかで、時期は不明である。

(3) SK 04 (図 64)

SI 09 と SB 04 の間に、プランの不定な土坑が検出された。完掘の状態から A～D に細分し、掘方が複合する土坑と理解した。これらのうち A 坑は覆土の識別が容易で、ほかの掘方とは異質のようだ。C 坑は平面精査でプランがまったく分からなかった土坑であり、掘方下底面は 2B2 層に達している。カマドの構築または修復か、あるいは竪穴建物の床貼りか、SI 09 のセクションで観察されるコンシステンスが似ているので、いずれかの目的で粘土を採掘した痕跡の可能性はある。

出土遺物は殆どなく、A 坑でわずかに出土した土師器細片のなかに、縄文土器が混じっていた。

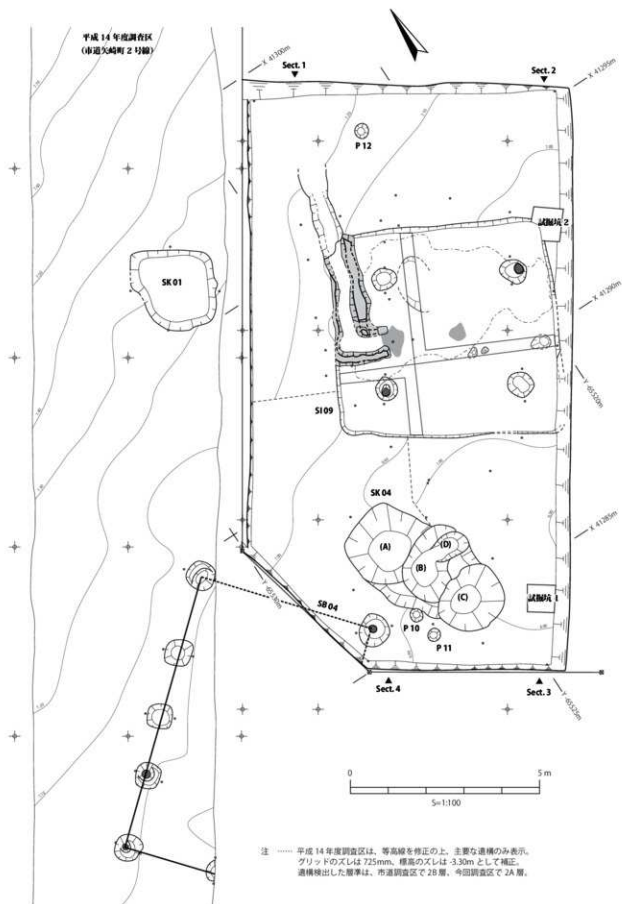


図60 薬師遺跡 平面図

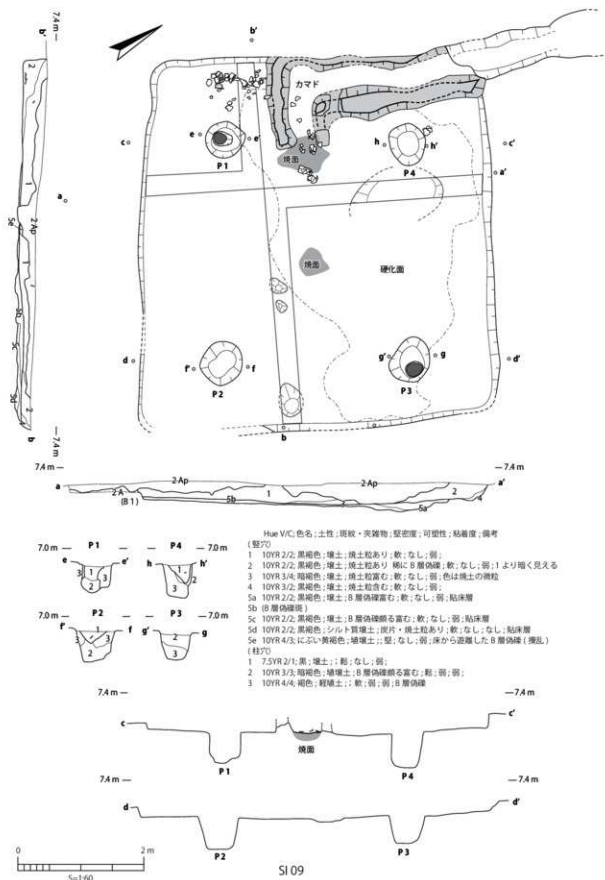
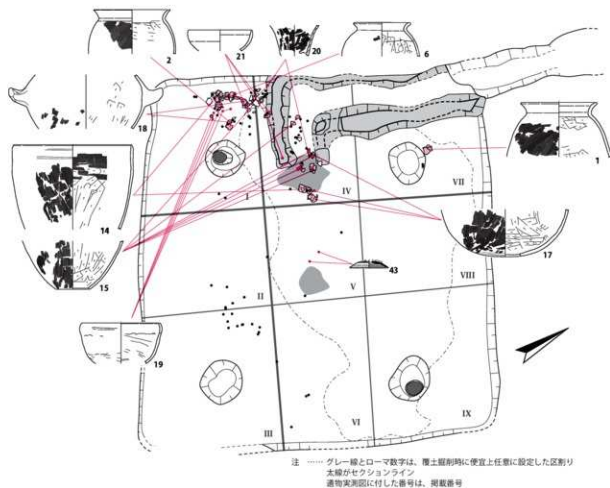
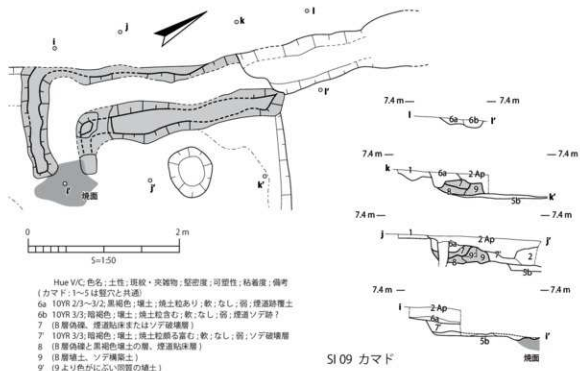


図 61 薬師遺跡 竪穴建物跡実測図 1



SI09 床面遺物散布状況 (遺構実測図 S=1:60, 遺物実測図 S=1:10)

図 62 薬師遺跡 竪穴建物跡実測図 2

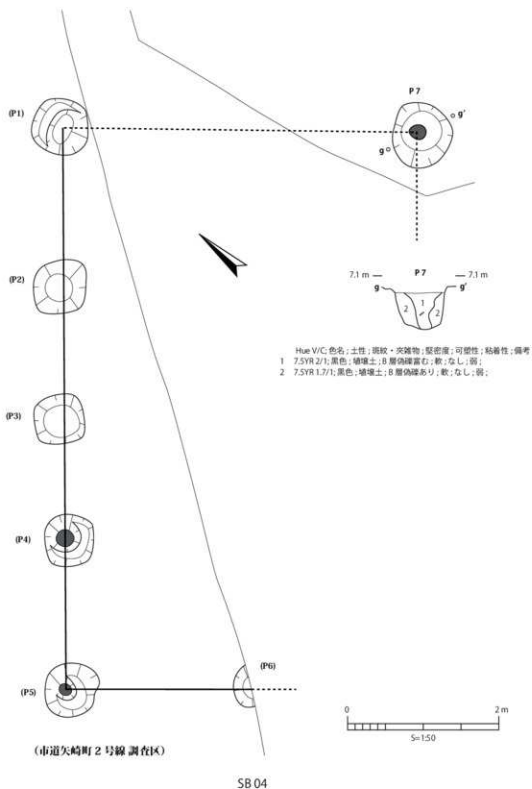
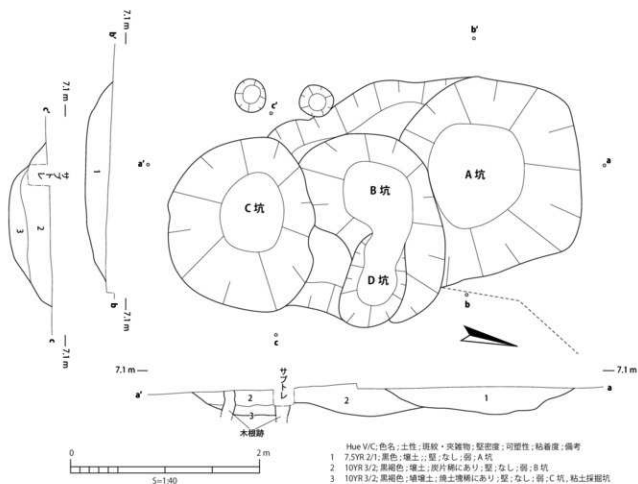


图 63 薬師遺跡 掘立柱建物跡実測図



SK 04

図 64 薬師遺跡 土坑実測図

表 8 SI 09 出土遺物プロットデータ

Plot	X	Y	H	層 色	種 別	器種 or 石材	実測 値 量
1	41.291.979	45.524.079	6.905	カマド床土	土師器		ドット
2	41.291.808	45.524.065	6.864	カマド床土	土師器	呪目	33
3	41.292.206	45.523.937	6.879	カマド床土	土師器	罫	38
4	41.292.172	45.524.228	6.940	カマド床土	土師器		ドット
5	41.292.034	45.523.841	6.835	カマド床土	土師器	罫	29
6	41.292.110	45.524.166	6.820	カマド床土	土師器		ドット
7	41.292.235	45.523.950	6.853	カマド床土	土師器	罫	38
8	41.292.224	45.523.850	6.855	カマド床土	土師器	罫	38
9	41.291.996	45.524.048	6.828	カマド床土	土師器		ドット
10	41.292.151	45.524.243	6.844	カマド床土	土師器		ドット
11	41.292.214	45.524.247	6.864	カマド床土	土師器		ドット
12	41.292.450	45.524.369	6.851	カマド床土	土師器		ドット
13	41.292.179	45.524.425	6.850	カマド床土	土師器		ドット
14	41.292.242	45.524.570	6.859	カマド床土	土師器		ドット
15	41.290.369	45.523.695	6.824	覆土	土師器		ドット
16	41.290.316	45.523.482	6.860	覆土	土師器		ドット
17	41.290.277	45.523.272	6.830	覆土	土師器		ドット
18	41.289.711	45.522.943	6.840	覆土	円鏝	安山岩	ドット
19	41.288.525	45.522.730	6.840	2Ap	須石器	坏身	ドット
20	41.288.773	45.522.843	6.880	2Ap	土師器		ドット
21	41.289.010	45.522.397	6.842	2Ap	円筒片	流紋岩	ドット
22	41.289.292	45.522.348	6.830	2Ap	土師器		ドット
23	41.289.259	45.521.912	6.775	2Ap	土師器		ドット
24	41.289.498	45.521.698	6.845	2Ap	須石器	罫	90
25	41.289.325	45.521.728	6.806	覆土	円鏝	ダイサイト	ドット

Plot	X	Y	H	層位	種別	岩種 or 石材	実測	備考
26	41280019	65.521782	6.870	覆土	土師窯			ドット
27	41288009	65.521640	6.865	覆土	土師窯			ドット
28	41288947	65.521582	6.890	覆土	土師窯			ドット
29	41288833	65.521371	6.915	覆土	土師窯	釜	(22)	ドット
30	41288795	65.521371	6.939	覆土	土師窯	釜	22	ドット
31	41288798	65.521290	6.928	覆土	土師窯	釜	(22)	ドット
32	41291342	65.522559	6.750	2Ap	ソデ石	軒石廻灰岩		ドット
33	41290524	65.522371	6.841	2Ap	土師窯			ドット
34	41290865	65.521959	6.806	2Ap	土師窯			ドット
35	41291257	65.522062	6.840	2Ap	須恵窯	襦	(90)	ドット
36	41291965	65.522594	6.839	2Ap	ソデ石	流紋岩		ドット
37	41292173	65.522725	6.888	2Ap	須恵窯	襦	90	ドット
38	41292336	65.521921	6.879	2Ap	土師窯			ドット
39	41292288	65.521005	6.836	2Ap	土師窯			ドット
40	41291614	65.519960	6.815	2Ap	土師窯			ドット
41	41291015	65.519879	6.815	2Ap	土師窯	釜	12	ドット
42	41291025	65.521535	6.785	2Ap	土師窯			ドット
43	41290988	65.521512	6.785	2Ap	土師窯			ドット
44	41291164	65.521036	6.776	2Ap	土師窯			ドット
45	41289719	65.522190	6.768	2Ap	土師窯			ドット
46	41289059	65.522342	6.769	2Ap	土師窯			ドット
47	41288883	65.522653	6.766	2Ap	須恵窯	反撃皿	(11)	ドット
48	41294647	65.523010	7.061	覆土	土師窯			ドット
49	41294438	65.522862	6.995	覆土	須恵窯	襦	9	ドット
50	41294368	65.522437	6.975	覆土	土師窯			ドット
51	41291502	65.523821	6.865	覆土	須恵窯	坏耳蓋	87	ドット
52	41291339	65.523703	6.825	覆土	須恵窯	襦	90	ドット
53	41291011	65.522342	6.728	覆土	土師窯			ドット
54	41291097	65.522190	6.768	覆土	ソデ石	軒石廻灰岩		ドット
55	41290944	65.522469	6.772	覆土	土師窯	小釜	25	ドット
56	41293327	65.523279	7.044	2Ap	土師窯	釜	24	ドット
57	41293369	65.523545	7.105	2Ap	土師窯			ドット
58	41293761	65.523445	6.910	カマドソデ破壊部	土師窯			ドット
59	41290905	65.523989	7.054	2Ap	土師窯	高坏	17	ドット
60	41290813	65.523975	6.961	2Ap	土師窯	坏蓋	18	ドット
61	41290469	65.522167	6.956	2Ap	須恵窯	坏B蓋	88	ドット
62	41290291	65.522284	6.865	2Ap	須恵窯	坏身		ドット
63	41289900	65.521475	6.842	2Ap	土師窯			ドット
64	41290016	65.521286	6.820	2Ap	須恵窯	襦	(90)	ドット
65	41289886	65.521092	6.840	2Ap	土師窯	襦	35	ドット
66	41289676	65.521134	6.825	2Ap	土師窯			ドット
67	41290270	65.522000	6.819	2Ap	土師窯			ドット
68	41290258	65.521929	6.785	2Ap	ソデ石	流紋岩		ドット
69	41290553	65.522928	6.800	2Ap	須恵窯	襦	90	ドット
70	41291460	65.519300	6.800	覆土	土師窯			ドット
71	41289994	65.519869	6.839	覆土	土師窯			ドット
72	41289830	65.519949	6.839	覆土	土師窯			ドット
73	41289935	65.521596	6.780	覆土	土師窯	(把手)	39	ドット
74	41290568	65.523195	6.790	覆土	土師窯			ドット
75	41290868	65.523104	6.801	覆土	土師窯			ドット
76	41294443	65.522110	6.959	覆土	土師窯			ドット
77	41293586	65.522752	6.891	覆土	土師窯	襦		ドット
78	41293305	65.522741	6.780	覆土	土師窯			ドット
79	41293279	65.523315	6.792	覆土	土師窯			ドット
80	41293524	65.524130	7.040	砂濶覆土	土師窯			ドット
81	41290571	65.523238	6.791	覆土	土師窯			ドット
82	41290754	65.523813	6.897	覆土	土師窯			ドット
83	41290702	65.523902	6.841	覆土	土師窯			ドット
84	41292175	65.523466	6.800	覆土	ソデ石	軒石廻灰岩		ドット
85	41292016	65.523529	6.765	覆土	ソデ石	軒石廻灰岩		ドット
86	41292037	65.523501	6.775	覆土	ソデ石	軒石廻灰岩		ドット
87	41292005	65.523417	6.760	覆土	ソデ石			ドット
88	41291804	65.523321	6.795	覆土	土師窯	襦	15	ドット
89	41291085	65.524171	6.840	覆土	土師窯			ドット
90	41291733	65.524773	6.946	覆土	土師窯			ドット
91	41291824	65.525256	6.889	覆土	土師窯	釜	32	ドット
92	41291684	65.525529	6.929	覆土	ソデ石	軒石廻灰岩		ドット
93	41291677	65.523687	6.855	2Ap	土師窯			ドット
94	41290047	65.522274	6.749	2Ap	土師窯			ドット
95	41289949	65.522263	6.765	2Ap	土師窯			ドット
96	41289883	65.522267	6.757	2Ap	土師窯			ドット
97	41291604	65.523951	7.024	砂濶覆土	須恵窯	坏身		ドット
98	41293681	65.522848	6.768	床面直上	土師窯			ドット
99	41293668	65.522820	6.772	床面直上	土師窯			ドット
100	41291550	65.522487	6.725	床面直上	須恵窯	坏C蓋	6	ドット

Plot	X	Y	H	層位	種別	器種 or 石材	実測	備 考
101	41,291,349	65,522,432	6,720	床面直上	須弥座	坏C蓋	6	F→T
102	41,291,008	65,521,998	6,718	床面直上	土師器			F→T
103	41,290,866	65,522,820	6,725	2Ap	土師器			F→T
104	41,290,807	65,522,925	6,725	2Ap	土師器			F→T
105	41,290,469	65,523,234	6,742	2Ap	須弥座	坏B蓋	3	F→T
106	41,290,704	65,523,979	6,777	床面直上	土師器			F→T
107	41,290,649	65,524,085	6,770	床面直上	土師器			F→T
108	41,289,808	65,522,893	6,772	床面直上	土師器			F→T
109	41,290,009	65,522,747	6,761	床面直上	土師器			F→T
110	41,290,165	65,522,467	6,730	床面直上	土師器			F→T
111	41,290,091	65,521,323	6,738	床面直上	土師器			F→T
112	41,290,217	65,520,614	6,729	床面直上	土師器			F→T
113	41,290,260	65,520,612	6,726	床面直上	土師器			F→T
114	41,292,018	65,522,571	6,703	床面直上	土師器			F→T
115	41,292,129	65,524,238	6,805	木版	土師器			F→T
116	41,290,134	65,521,932	6,730	床面直上	土師器	小蓋	26	F→T
117	41,290,084	65,521,870	6,735	床面直上	土師器			F→T
118	41,290,055	65,521,850	6,735	床面直上	土師器			F→T
119	41,294,988	65,523,849	7,030	木版	土師器			F→T
120	41,289,766	65,520,313	6,727	床面直上	土師器			F→T
121	41,290,802	65,522,834	6,715	床面直上	土師器			F→T
122	41,291,931	65,523,781	6,778	カマド開口	土師器	龜	(38)	F→T
123	41,291,934	65,523,797	6,780	カマド開口	土師器	龜	(38)	F→T
124	41,291,237	65,524,979	6,805	床面直上	土師器			F→T
125	41,291,329	65,524,975	6,798	床面直上	土師器	小鍋	34	F→T
126	41,291,379	65,524,964	6,789	床面直上	土師器	釜	24	F→T
127	41,291,163	65,525,160	6,819	床面直上	土師器	小鍋	34	F→T
128	41,291,260	65,525,175	6,819	床面直上	土師器			F→T
129	41,291,367	65,525,186	6,810	床面直上	土師器	小鍋	34	F→T
130	41,291,229	65,525,235	6,828	床面直上	土師器	小鍋	34	F→T
131	41,291,282	65,525,288	6,816	床面直上	土師器			F→T
132	41,291,118	65,525,595	6,840	床面直上	土師器			F→T
133	41,291,093	65,525,612	6,839	床面直上	土師器			F→T
134	41,291,674	65,525,336	6,776	床面直上	土師器	深鍋	36	F→T
135	41,291,728	65,525,041	6,800	床面直上	土師器	製甕土器	(20)	F→T
136	41,292,040	65,525,051	6,840	床面直上	土師器			F→T
137	41,292,069	65,525,056	6,849	床面直上	土師器			F→T
138	41,292,084	65,525,074	6,841	床面直上	土師器			F→T
139	41,292,117	65,525,121	6,842	床面直上	土師器			F→T
140	41,292,368	65,524,450	6,825	カマド床直上	土師器			F→T
141	41,291,688	65,524,871	6,797	床面直上	土師器			F→T
142	41,291,609	65,524,761	6,785	床面直上	土師器			F→T
143	41,291,513	65,524,877	6,785	床面直上	土師器			F→T
144	41,291,428	65,524,985	6,791	床面直上	土師器			F→T
145	41,289,826	65,522,481	6,745	床面直上	土師器			F→T
146	41,289,817	65,522,459	6,737	床面直上	土師器			F→T
147	41,289,741	65,522,402	6,730	床面直上	土師器			F→T
148	41,289,956	65,522,479	6,712	床面直上	土師器			F→T
149	41,289,862	65,522,338	6,755	床面直上	土師器			F→T
150	41,289,740	65,522,267	6,725	床面直上	土師器			F→T
151	41,289,700	65,522,174	6,760	床面直上	土師器			F→T
152	41,289,837	65,522,128	6,745	床面直上	土師器			F→T
153	41,289,913	65,522,109	6,739	床面直上	土師器			F→T
154	41,289,925	65,522,106	6,740	床面直上	土師器			F→T
155	41,290,054	65,522,035	6,715	床面直上	土師器			F→T
156	41,290,130	65,521,287	6,730	駄床	土師器			F→T
157	41,289,777	65,520,511	6,644	駄床	帯門牌石	瀬灰角礫石		F→T
158	41,293,823	65,523,006	6,807	床面直上	土師器	釜	30	備前
159	41,293,906	65,523,004	6,832	床面直上	土師器	釜	30	備前
160	41,293,906	65,523,036	6,816	床面直上	土師器	釜	30	備前
161	41,291,373	65,525,400	6,788	床面直上	土師器	龜	(37)	備前
162	41,291,359	65,525,307	6,811	床面直上	土師器	小鍋	34	備前
163	41,291,394	65,525,241	6,792	床面直上	土師器	深鍋	36	備前
164	41,291,347	65,525,250	6,822	床面直上	土師器	小鍋	34	備前
165	41,291,446	65,525,374	6,751	床面直上	土師器	釜	32	備前
166	41,291,430	65,525,385	6,761	床面直上	土師器	小鍋	34	備前
167	41,291,432	65,525,423	6,744	床面直上	土師器	小蓋	23	備前
168	41,291,417	65,525,409	6,763	床面直上	土師器	龜	(37)	備前
169	41,291,373	65,525,232	6,803	床面直上	土師器	小鍋	34	備前
170	41,291,467	65,525,434	6,746	床面直上	土師器			備前
171	41,291,431	65,525,474	6,766	床面直上	土師器	龜	(37)	備前
172	41,291,404	65,525,208	6,798	床面直上	土師器	小蓋	23	備前
173	41,291,478	65,525,385	6,735	床面直上	土師器			備前
174	41,291,553	65,525,388	6,738	床面直上	土師器	釜	31	備前

Plot	X	Y	H	層位	種別	岩種 or 石材	実測	備 考
175	41.291.522	65.525.340	6.731	床面直上	土師器	釜	31	焼痕
176	41.291.569	65.525.289	6.768	床面直上	土師器			
177	41.291.256	65.525.437	6.826	床面直上	土師器			焼痕
178	41.291.180	65.525.207	6.813	床面直上	土師器	小鍋	34	焼痕
179	41.291.589	65.525.334	6.745	床面直上	土師器	釜	31	焼痕
180	41.291.664	65.525.262	6.769	床面直上	土師器	深鍋	36	焼痕
181	41.291.730	65.525.156	6.779	床面直上	土師器	深鍋	36	焼痕
182								欠番
183	41.291.711	65.525.118	6.775	床面直上	土師器	製塩土器	(20)	焼痕
184	41.291.870	65.525.165	6.791	床面直上	土師器	釜	32	焼痕
185	41.291.901	65.525.135	6.793	床面直上	土師器	釜	14	焼痕
186	41.291.856	65.525.116	6.780	床面直上	土師器	製塩土器	(20)	焼痕
187	41.291.971	65.525.158	6.810	床面直上	土師器	釜	14	焼痕
188	41.292.028	65.525.203	6.830	床面直上	土師器			焼痕
189	41.292.076	65.525.049	6.837	床面直上	土師器			焼痕
190	41.292.021	65.525.077	6.849	床面直上	土師器			焼痕
191	41.291.984	65.525.049	6.845	床面直上	土師器	釜	14	焼痕
192	41.291.996	65.525.056	6.837	床面直上	土師器	釜	13	焼痕
193	41.291.845	65.524.994	6.792	床面直上	土師器	釜	28	焼痕
194	41.291.763	65.525.010	6.784	床面直上	土師器			焼痕
195	41.291.715	65.524.915	6.786	床面直上	土師器	呪石	33	焼痕
196	41.291.497	65.524.995	6.770	床面直上	土師器			焼痕
197	41.291.415	65.525.006	6.781	床面直上	土師器	深鍋	36	焼痕
198	41.291.336	65.524.900	6.799	床面直上	土師器	釜	24	焼痕
199	41.291.881	65.523.498	6.718	カマド竪口	土師器	釜	37	焼痕
200	41.291.895	65.523.264	6.701	カマド竪口	土師器		15	焼痕
201	41.291.650	65.523.281	6.694	カマド竪口	土師器	鍋	15	焼痕
202	41.291.965	65.523.314	6.688	カマド竪口	土師器	鍋	15	焼痕
203	41.291.983	65.523.787	6.777	カマド竪口	土師器	釜	(38)	焼痕
204	41.292.014	65.523.862	6.776	カマド竪口	土師器	釜	(38)	焼痕
205	41.292.152	65.523.718	6.793	カマド竪口	土師器	釜	38	焼痕
206	41.292.305	65.523.722	6.775	カマド竪口	土師器			焼痕
207	41.292.264	65.523.771	6.787	カマド竪口	土師器			焼痕
208	41.292.257	65.523.904	6.836	カマド竪口	土師器	鍋	15	焼痕
209	41.292.198	65.523.912	6.815	カマド竪口	土師器	製塩土器	(20)	焼痕
210	41.292.216	65.523.974	6.833	カマド竪口	土師器	釜	32	焼痕
211	41.292.203	65.524.217	6.820	カマド竪口	土師器			焼痕
212	41.292.148	65.524.257	6.795	カマド竪口	土師器			焼痕
213	41.292.233	65.524.488	6.838	カマド竪口	土師器	釜	(38)	焼痕
214	41.292.352	65.524.533	6.818	カマド竪口	土師器	釜	38	焼痕
215	41.291.834	65.523.330	6.705	カマド竪口	土師器	鍋	15	焼痕
216	41.292.241	65.523.892	6.824	カマド竪口	土師器	製塩土器	(20)	ドット
217	41.291.882	65.523.421	6.715	カマド竪口	土師器			ドット
218	41.292.215	65.524.003	6.796	カマド竪口	土師器			ドット
219	41.292.277	65.524.282	6.813	カマド竪口	土師器			ドット
220	41.292.294	65.524.337	6.803	カマド竪口	土師器			ドット
221	41.291.968	65.523.798	6.769	カマド竪口	土師器	釜	(38)	ドット
222	41.291.358	65.525.407	6.766	床面直上	土師器	小釜	23	焼痕
223	41.291.431	65.525.434	6.745	床面直上	土師器	釜	(37)	焼痕
224	41.291.966	65.524.799	6.817	床面直上	土師器	呪石	33	焼痕
225	41.291.924	65.524.790	6.802	床面直上	土師器	釜	28	焼痕
226	41.291.917	65.525.058	6.811	床面直上	土師器	釜	32	焼痕
227	41.291.839	65.525.054	6.768	床面直上	土師器			焼痕
228	41.291.852	65.525.055	6.771	床面直上	土師器	釜	38	焼痕
229	41.292.055	65.525.103	6.826	床面直上	土師器	釜	13	ドット
230	41.291.993	65.525.212	6.816	床面直上	土師器			焼痕
231	41.291.361	65.525.493	6.776	床面直上	ソシ石	流紋岩		ドット
231	41.291.361	65.525.493	6.776	床面直上	土師器			ドット
232	41.292.191	65.525.178	6.846	床面直上	土師器	製塩土器	20	ドット
233	41.291.307	65.525.245	6.813	床面直上	土師器			ドット
234	41.291.440	65.524.950	6.770	床面直上	土師器			ドット
235	41.291.492	65.525.153	6.765	床面直上	土師器	小鍋	34	ドット
236	41.291.552	65.524.650	6.740	床面直上	土師器			ドット
237	41.291.689	65.524.887	6.756	床面直上	土師器			ドット
238	41.291.904	65.525.211	6.764	床面直上	土師器			ドット
239	41.291.992	65.524.801	6.823	床面直上	土師器	呪石	33	ドット
240	41.292.114	65.525.067	6.840	床面直上	土師器	釜	14	ドット
241	41.291.666	65.523.577	6.710	床面直上	土師器			ドット
242	41.291.979	65.523.359	6.671	床面直上	土師器	鍋	15	ドット
243	41.291.354	65.525.430	6.721	床面直上	土師器	小釜	23	ドット

第 4 節 出土遺物

はじめに

既述のとおり、今回の発掘調査で出土した遺物は、直接的にせよ間接的にせよ、SI 09 と関わりを持つ出土状況だったものが殆どである。包含層で取り上げた遺物は、その極端に偏る分布状況から、SI 09 の存在がかなり早い段階から想定されたわけだし、事実、床面出土の土器片の一部にこれらと接合する例が確認された。SI 09 は最終的には人為的に埋め戻されたかと推定され、床面出土遺物以外は原則として二次的な包含状況であったと考えられる。

SI 09 床面出土遺物はカマド周辺に集中し、土師器煮炊具に極端に偏る一方で食膳具は著しく欠落している。これも既述したが、編年的に概ね古代 I～II 期、すなわち 7 世紀代に限定され、以下の報告には特に明示しないが、SI 09 は少なくとも 7 世紀後半には廃絶したと考えられる。必ずしも一括性が保証される出土状況ではないかもしれないが、適当に散らばった破片の分布と接合関係から、該期の土師器煮炊具の組成のあり方を傍証的に捉えることのできる良好な事例の一つに数えることができるだろう。

1 古墳時代～古代の遺物

(1) 土師器 (図 65 - 1 ～ 図 67 - 33)

1～12 は釜である。6～9 は長胴とならない小釜と思われるが、胴形態を推定できるところまで復元できなかったため、明確でない。外面は細密なハケメで、内面は頸部までケズリが施される。

13 は今回調査の出土遺物でなく、SI 05 が露出する法面で採集した表採資料である。一応、小釜として分類はしたが、器壁が厚くハケメも極端に粗い。印象だけでは、かなり異質感がある。

14・15 は甗である。SI 09 カマド周辺に散在する破片は殆ど接合しないが、識別は容易であり、これらは同一個体とみなされる。内外面に細密なハケメで、内面のケズリは口縁部まで及ばない。

16・17 は鍋、18 は把手付鍋、19 は小鍋である。17・18 は、外面は細密なハケメ、内面はケズリを施すが、16 は内外面がハケメで相対的に明らかに粗く、異質な印象がある。19 は粗いナデ調整で、接合痕が見える。

20 は製塩土器である。成形は粗く内外面に接合痕が明瞭で、尖底型の器形と考えられる。内外面は細密なハケメで、外面は白い付着物あるいは変色が顕著である。

以上、13・16 を除く 1～21 までが古代 I～II 期の範疇で、SI 09 に係る資料と考えられる。

23～25 は、赤彩された坏の蓋身である。23・24 は内外面に赤彩された坏 B 蓋、25 は外面のみの赤彩で、内面は無彩色でカキメの調整、外面はケズリ調整である。完全には接合せず、器形は図上での復元で、底部の形態に違和感があるが、一応、坏 A の範疇に分類したが、坏 G に近いものともいえる。これらは古代 II～III 期または III～IV 期の所産だろう。

26・27 は埴 A、28・29 は内面に黒化処理を施した埴 B である。26 は底部に糸切り痕があり、29 は外面に赤彩が施されている。これらは古代 VI 期の所産だろう。

30～33 は高坏の脚部である。30 は中実型で、外面はケズリ調整し無彩色、31 も中実型で、外面のケズリ調整は明確でなく赤彩を施し、坏部は黒化処理されている。32・33 は中空型で、ケズリはなく、ハケメカナデ調整され、坏部は黒化処理されている。これらは古代 II～III 期または III～IV 期の所産だろう。

(2) 須恵器 (図 68 - 34 ~ 図 69 - 72)

34 ~ 42 は坏 H である。形態的に古い特徴を持つものとしては、34・35 の蓋は天部が平坦で稜が明瞭なことから MT 15 ~ TK 10 に、39 の身は受部がタガ状にせり出す特徴から TK 47 に、40 の身は口縁端面に面取りされる特徴が古相とみられ、MT15 か TK 10 に、それぞれ比定される型式だろう。36 ~ 38 の蓋は有意な部分が欠落しているが天部が丸みを帯びる特徴が看取される。41・42 の身は、受部から下の体部が寸詰まり気味になる特徴が 36 ~ 38 の蓋と組み合う身の特徴と考えられるので、MT 15 ~ TK 10 に比定される型式と考えられる。これらはいずれも、中～粗粒砂に富む南加賀産の胎土と見られ、外来的特徴と見られるものは認められない。

43 は坏 G 蓋である。一瞥では砂が見えない精良な胎土で能美産と見られ、形態的には古代 I 2 ~ III 期の所産だろう。44・45 は坏 A 身の範疇で分類したが、底部が厚く体部にかけて丸みを帯びるので、坏 G に近いものだろう。45 も能美産か。

46 は盤 A 身、47 ~ 52 は坏 A 身である。48 は坏 G に近いものかもしれないが、概ね底部から体部にかけての屈曲が明瞭である。

53 ~ 64 は坏 B である。53 ~ 62 は蓋で、53・54 のツマミの形態や 55 ~ 58 の天部のケズリ調整は坏 G と共通した特徴であり、古代 II ~ III 期の所産と考えられる。61・62 は、口縁部の折り返しの特徴が後出的であり、古代 IV 期まで降るか。63・64 の身の高台の特徴は碗 B に近いもので、65 は碗 B であり、底部には糸切り痕がある。63 ~ 65 は古代 VI 期の所産だろう。

66 は小型の広口壺である。短頸壺かもしれないが、破片が小さく不明である。復元される直径から、肩の張り出しが大きいと見なした。肩部は釉化していない煤で黒くなっている。

67・72 は長胴瓶である。67 は内部にカキメが残っている。掲載位置が離れているのは割付の都合上のもので、他意はない。どちらも焼成は還元不全で、同一個体片かもしれない。

68 は厚底鉢である。外面は釉化していない煤で黒くなっている。

69 は鉄器を模した鉢である。外面は自然釉に覆われている。

70・71 は糞である。SI 09 とその周辺に散在する同一個体と思われる破片のうちの 2 片を図示した。胎土の砂が細かく精良な印象で、能美産と思われる。焼成が甘く、底部付近の 71 は生焼けの状態であり、内部は酸化色を発色している。

(3) その他の遺物 (図 69 - 73 ~ 84)

73 は縄文土器である。キャリパー形の口縁部片で、辛うじて観察される縄文は RL 単節である。

74 は弥生土器である。細頸壺と思われる直口型の壺肩部片で、糜状文が見える。

75 は磨石である。入念に火に焙られていて、表層が酸化して熱砕も著しい。磨り面はこの破砕痕を潰しており、被熱と用途に因果関係があるようだ。縄文時代か弥生時代のものだろう。

76 ~ 80 は椀形鍛治滓である。全て強く磁着し、表面のテクスチャーにも鉄塊らしいものが看取されるが、メタルの反応を示したのは 76 と 80 のみである。

81 は鉄塊系遺物である。表面にはヘマタイトらしい赤褐色を呈する皮膜がある。

82 ~ 84 は棒状の鉄製品である。84 は刃先と思われ、ノミの類か。

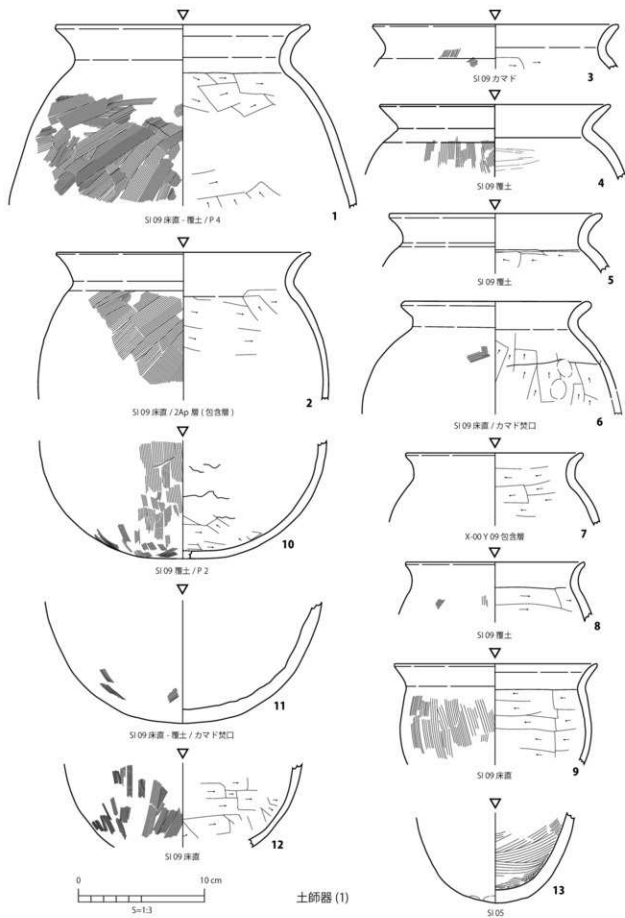


図 65 薬師遺跡 出土遺物実測図 1

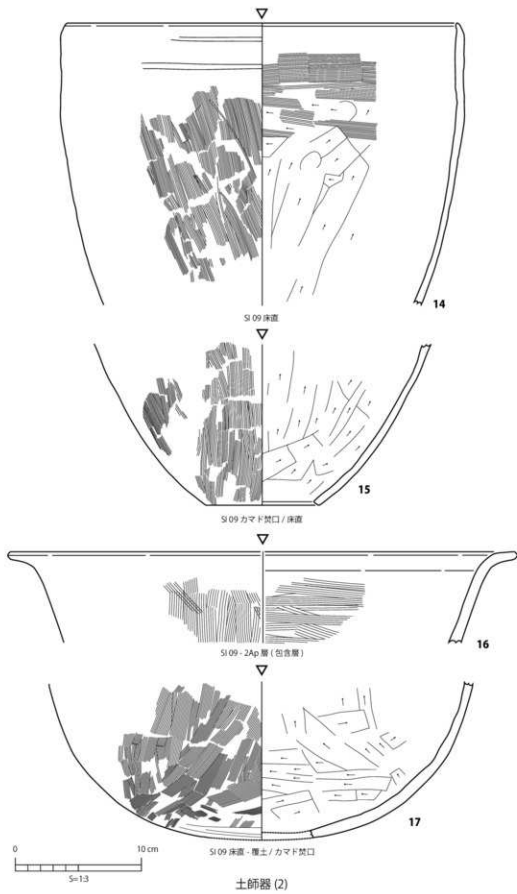


図 66 薬師遺跡 出土遺物実測図 2

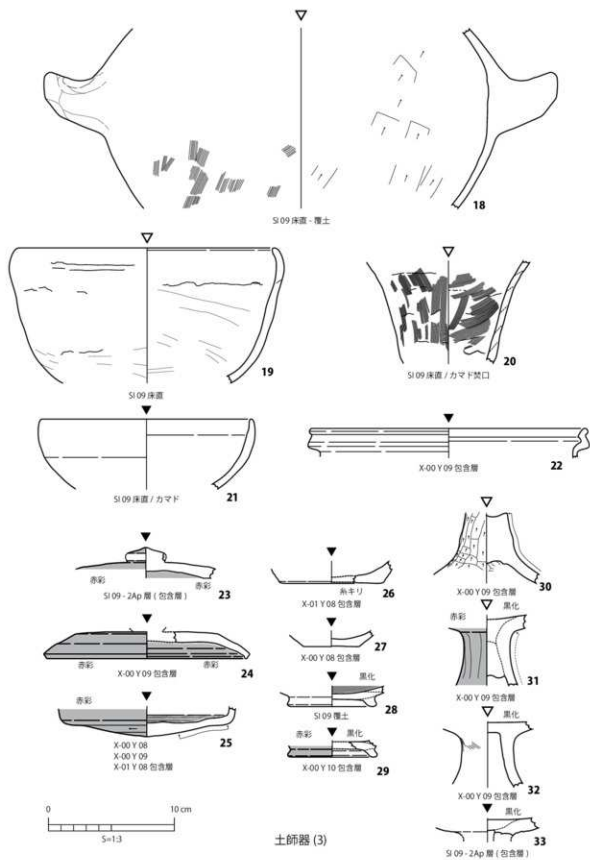
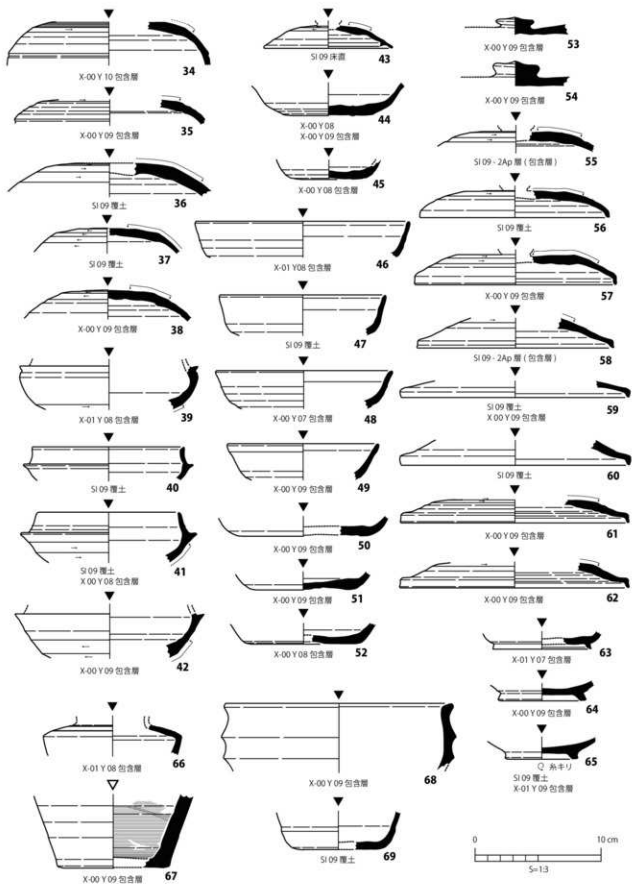


図 67 薬師遺跡 出土遺物実測図 3



須惠器 (1)

图 68 薬師遺跡 出土遺物実測図 4

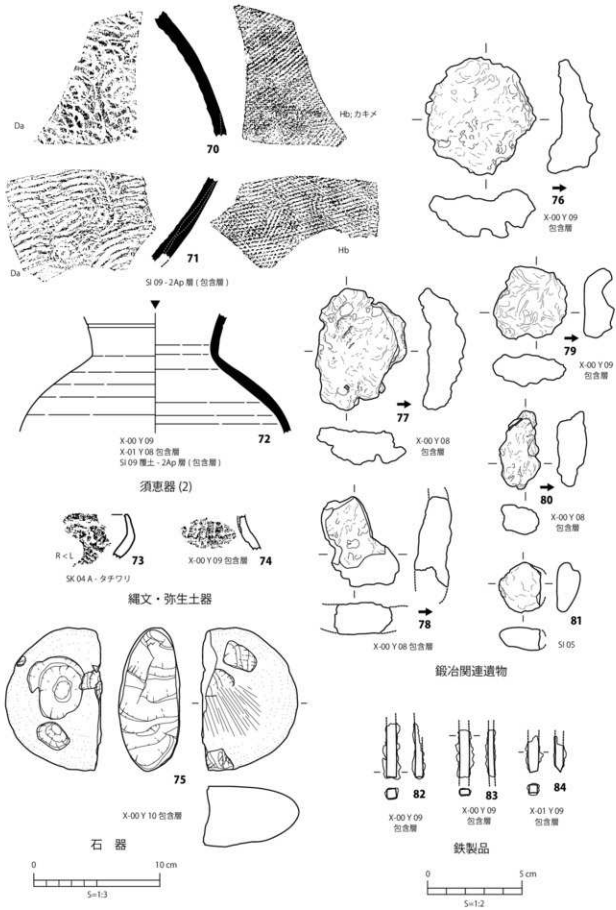


図 69 薬師遺跡 出土遺物実測図 5

表9 業師遺跡 出土遺物属性表1

図	地	出土位置	種別	規格	寸法 (cm) / 高さ	原製作所	土の色調	用途	出土層 (遺跡) 物	用途	備考
65	1	30 SI09 瓦葺・甍上 / SI09 P4	土師器	釜	11:20/017, 胴・17, 頸高 2.6	10YR 7/3 - 7.5YR 7/3	10YR 6/1 - 7.5YR 5/1	中・粗砂を含む, 赤粒あり	酸化良 未酸化良	古代 I	
		24 SI09 瓦葺 / SI09 2a(包合層)	土師器	釜	11:20/008, 胴・17, 胴・23, 頸高 2.3, 胴高 2.2	5YR 6/4 - 2.5YR 7/4	7.5YR 7/3 - 5YR 6/4	中・粗砂を含む, 赤粒細いあり	酸化良	古代 I	
		29 SI09 カマド	土師器	釜	11:20/008, 胴・19, 頸高 1.9	5YR 6/4	7.5YR 6/4	中・粗砂を含む	酸化良	古代 I	
		4 21 SI09 瓦葺上 / SI09 P2	土師器	釜	11:18/007, 胴・15, 頸高 1.8	7.5YR 6/4	7.5YR 6/2	中・粗砂を含む	酸化良	古代 II	
		5 27 SI09 瓦葺上	土師器	釜	11:17/008, 胴・14, 頸高 2.2	10YR 8/4	10YR 8/4	中・粗砂を含む	酸化良	古代 I	
		6 31 SI09 瓦葺 / SI09 カマド(包合層)	土師器	小釜	11:14/025, 胴・13, 頸高 1.5	7.5YR 7/4 - 7.5YR 7/3	2.5Y 7/1 - 2.5Y 6/1	中・極細砂を含む	酸化良	古代 I	
		7 63 X00 Y09 包合層	土師器	小釜	11:14/011, 胴・13, 頸高 2.0	5YR 6/4	5YR 6/4	細・中砂を含む	酸化良	古代 II	
		8 25 SI09 瓦葺, VI 瓦葺上	土師器	小釜	11:14/028, 胴・13, 頸高 1.5	7.5YR 7/4 - 10YR 7/4	5YR 6/4 - 2.5YR 6/4	中・粗砂を含む, 赤粒あり	未酸化良	古代 I	
		9 26 SI09 瓦葺	土師器	小釜	11:16/024, 胴・14, 胴・15, 頸高 1.8	10YR 7/4	2.5YR 6/4	中・粗砂を含む	酸化良	古代 I	
		10 22 SI09 P2 / SI09 瓦葺上 / X00 Y08 包合層	土師器	釜		(2.5YR 6/4)	(2.5Y 7/4)	中・粗砂を含む	酸化良		
11 32 SI09 瓦葺・甍上 / SI09 カマド(包合層)	土師器	釜		(2.5YR 6/4)	(2.5Y 4/1)	中・粗砂を含む, 極細砂あり	未酸化良	古代 II - III			
12 13 SI09 瓦葺	土師器	釜		(5YR 6/4)	7.5YR 7/3	細・中砂を含む	酸化良				
13 59 SI05 瓦葺地	土師器	小釜		7.5YR 7/4	7.5YR 8/4	細・中砂を含む, 極細砂あり	酸化良	古代 II			
14 37 SI09 瓦葺	土師器	甗	11:31/008, 胴・32	5YR 6/4 - 2.5YR 7/6	7.5YR 7/2 - 7.5YR 7/3	中・粗砂を含む	酸化良	古代 II			
66	15	38 SI09 カマド(包合層) / SI09 瓦葺	土師器	甗	底 5/0.19	7.5YR 6/4 - 5YR 6/3	7.5YR 7/4 - 7.5YR 8/4	中・粗砂を含む	酸化良	古代 II	
		36 35 SI09 (包合層)	土師器	甗	11:40/006	5YR 6/6	5YR 6/6	中・粗砂を含む	酸化良	古代 II	
		17 15 SI09 瓦葺・甍上 / SI09 カマド(包合層)	土師器	甗		(5YR 6/4)	7.5YR 6/4	中・粗砂を含む	酸化良		
		18 36 SI09 瓦葺 / SI09 瓦葺上	土師器	深鉢	胴・32	5YR 7/6	10YR 7/4	中・粗砂を含む	酸化良	古代 I	
		19 34 SI09 瓦葺	土師器	小鉢	11:20/017	2.5YR 7/4	7.5YR 8/3	中・粗砂を含む	酸化良	古代 I	
67	20	20 SI09 瓦葺 / SI09 カマド(包合層)	土師器	細皿上蓋		(2.5YR 6/4)	10YR 5/1	細・中砂を含む	未酸化良		
		21 33 SI09 瓦葺 / SI09 カマド	土師器	埴石	11:17/024	7.5YR 7/4	7.5YR 7/4	細・中砂を含む	酸化良	古代 I	
		22 64 X00 Y09 包合層	土師器	釜	11:22/008, 胴・20, 頸高 2.0	7.5YR 7/3	7.5YR 7/3	細・中砂を含む	酸化良	古代 VI	
		23 18 SI09 2a(包合層) / X00 Y08 包合層	土師器	灰皿蓋	頸高 1.2	10YR 8/3	10YR 8/3	赤粒 極細・細砂を含む	酸化良	古代 II	
		24 71 X00 Y09 包合層	土師器	灰皿蓋	11:16/007, 蓋高 2.1	10YR 8/3	10YR 5/1	赤粒 粗シムトを含む, 細砂を含む	未酸化良	古代 II - III	
		25 19 X00 Y09 包合層 / X01 Y08 包合層	土師器	灰皿身	底 (1.3)	10YR 7/4	10YR 8/2	赤粒 極細・細砂を含む	酸化良		
		26 62 X00 Y08 包合層	土師器	灰皿 A	底 5/0.47	7.5YR 7/3	7.5YR 7/3	極細・細砂を含む	酸化良	古代 VI	
		27 61 X00 Y08 包合層	土師器	灰皿 A	底 5/0.83	10YR 8/3	10YR 8/3	極細・細砂を含む	酸化良	古代 VI	
		28 16 SI09 瓦葺上	土師器	埴石 B	11:7/0.4, 台高 0.8	10YR 8/3	10YR 3/0	内質 細・中砂を含む	酸化良	古代 VI	
		29 69 X00 Y10 包合層	土師器	埴石 B	11:7/0.17, 台高 0.6	10YR 7/3	10YR 7/3	内質 赤粒 極細・細砂を含む	酸化良	古代 VI	
68	30	68 X00 Y09 包合層	土師器	高坪	胴・3.2	7.5YR 6/4	7.5YR 7/3	細砂を含む, 粗砂あり	酸化良	古代 III - III	
		31 67 X00 Y09 包合層	土師器	高坪	胴・4	10YR 8/3	10YR 4/1	内質 粗シムトを含む, 粗砂あり	未酸化良	古代 III - III	
		32 17 SI09 (包合層)	土師器	高坪		7.5YR 7/4	7.5YR 8/3	内質 細・中砂を含む	酸化良	古代 III - IV	
		33 70 X00 Y09 包合層	土師器	高坪	胴・3.6	10YR 8/3	N 5/0	内質 赤粒 細・中砂を含む	未酸化良	古代 III - IV	
		34 55 X00 Y10 包合層	須恵器	灰皿蓋	横 1.6, 蓋高 3.4	N 6/0	N 6/0	細・中砂を含む, 鉄屑上層物を含む	還元良	南加賀, MT15 - TK10	
		35 51 X00 Y09 包合層	須恵器	灰皿蓋	横 1.5, 蓋高 3.5	N 6/0	10YR 6/2	中・粗砂を含む, 鉄屑上層物を含む	未還元良	南加賀, MT15 - TK10	
		36 89 SI09 瓦葺上	須恵器	灰皿蓋		10YR 6/2	10YR 6/2	細・中砂を含む	未還元良	南加賀, TK10 - TK43	
		37 87 SI09 瓦葺上	須恵器	灰皿蓋		N 5/0	N 6/0	中・粗砂を含む	還元良	南加賀, TK10 - TK43	
		38 86 X00 Y09 包合層	須恵器	灰皿蓋		N 7/0	5Y 7/1	中・粗砂を含む, 鉄屑上層物あり	還元良	南加賀, TK10 - TK43	
		39 54 X01 Y08 包合層	須恵器	灰皿身	受・14	N 5/0	N 6/0	細・中砂を含む	還元良	南加賀, TK47	
68	40	8 SI09 瓦葺上	須恵器	灰皿身	11:12/008, 受・14	5Y 7/1	N 6/0	中・粗砂を含む	還元良	南加賀, MT15 - TK10	
		41 7 SI09 II, IV, VI 瓦葺上 / X00 Y08 包合層	須恵器	灰皿身	11:11/022, 受・14	N 7/0	5Y 6/1	中・粗砂を含む	還元良	南加賀, TK10 - TK43	
		42 52 X00 Y09 包合層	須恵器	灰皿身	受・15	N 5/0	N 6/0	中・粗砂を含む	還元良	南加賀, MT15 - TK10	
		43 6 SI09 瓦葺	須恵器	灰皿蓋	11:10/044, 蓋高 1.8	N 5/0	N 7/0	細砂細いあり	還元良	南加賀, 古代 II - III	
		44 40 X00 Y08 包合層 / X00 Y09 包合層	須恵器	灰皿身	底 7/0.69	2.5Y 8/2	2.5Y 8/1	中・粗砂を含む	還元不良	南加賀, 古代 II	
		45 83 X00 Y08 包合層	須恵器	灰皿身	底 6/0.31	N 5/0	7.5YR 5/2	極細・細砂を含む	未還元良	南加賀, 古代 II	

図	図名	出土位置	種類	形状	寸法 (cm) / 片率	表面色調	胎土色調	胎土土層(混入)物	焼成	備考
46	53	X01 Y08 包含物	須恵器	甕 A	口:17/008	N 4/0 2.5G 6/1	2.5G 6/1	細・中砂混む	還元良 還元良	南加賀、 古代 IV
47	1	SI09 IV 甕上	須恵器	坪 A 身	口:13/006	7.5Y 6/1	5Y 6/1	中・粗砂混む、焼結層にあり	還元良	南加賀
48	41	X00 Y07 包含物	須恵器	坪 A 身	口:14/008	(10YR 3/1)	10YR 5/2	中・粗砂混む、鉄質土鉱物あり	還元良	南加賀、 古代 II
49	44	X00 Y09 包含物	須恵器	坪 A 身	口:12/035	2.5Y 6/1 2.5Y 7/1	2.5Y 7/1 2.5Y 7/2	中・粗砂混む	還元良 未還元良	南加賀
50	85	X00 Y09 包含物	須恵器	坪 A 身	底:10/018	7.5Y 6/1	5Y 7/1	細・中砂混む	還元不良	南加賀
51	43	X00 Y09 包含物	須恵器	坪 A 身	底:8/078	2.5Y 8/1	2.5Y 8/1	中・粗砂混む、鉄質土鉱物あり	還元不良	南加賀
52	84	X00 Y08 包含物	須恵器	坪 A 身	底:9/019	10YR 8/2	10YR 8/2	焼結・粗砂あり	未還元不良	能美
53	46	X00 Y09 包含物	須恵器	坪 B 蓋	直径 0.7	2.5Y 6/1	2.5Y 7/1	中・粗砂混む、鉄質土鉱物混む	還元良	南加賀、 古代 II・III
54	47	X00 Y09 包含物	須恵器	坪 B 蓋	直径 1.1	5YR 5/2 N 5/0	7.5YR 5/3	中・粗砂混む	未還元良	南加賀、 古代 II・III
55	88	SI09 (包含物)	須恵器	坪 B 蓋		2.5Y 7/1	10YR 6/2	細・中砂混む	還元良	南加賀、 古代 II・III
56	4	SI09 III 甕上	須恵器	坪 B 蓋	口:15/006, 蓋高 2.0	N 5/0	N 7/0	中砂混む	還元良	南加賀、 古代 II
57	48	X00 Y09 包含物	須恵器	坪 B 蓋	口:16/008, 蓋高 2.3	N 6/0	7.5YR 5/2	細・中砂混む	未還元良	南加賀、 古代 II・III
58	3	SI09 2A(包含物)	須恵器	坪 B 蓋	口:15/013, 蓋高 2.4	2.5Y 6/1	2.5Y 6/1	中・粗砂混む、鉄質土鉱物 層にあり	還元良	南加賀、 古代 II
59	2	SI09 II 甕上 / X00 Y09 包含物	須恵器	坪 B 蓋	口:18/007, 蓋高 1.3	2.5Y 6/1	2.5Y 6/1	中・粗砂混む、鉄質土鉱物あり	還元良	南加賀、 古代 II・III
60	5	SI09 V 甕上	須恵器	坪 B 蓋	口:18/003, 蓋高 2	7.5Y 6/1	7.5Y 6/1	中・粗砂混む	還元良	南加賀
61	49	X00 Y09 包含物	須恵器	坪 B 蓋	口:18/008, 蓋高 1.8	N 7/0	N 7/0	中・粗砂混む、鉄質土鉱物層に あり	還元良	南加賀、 古代 IV
62	50	X00 Y09 包含物	須恵器	坪 B 蓋	口:18/006, 蓋高 1.9	N 8/0	N 8/0	中・粗砂混む	還元良	南加賀、 古代 IV
63	42	X01 Y07 包含物	須恵器	坪 B 身	径 8/28, 台高 0.4	N 5/0	5Y 6/1	細・中砂混む、鉄質土鉱物層に あり	還元良	南加賀、 古代 IV
64	45	X00 Y09 包含物	須恵器	甕 B	口:15/031, 台 7/31, 台高 0.6	G2.5Y 8/2	N 8/0	細・中砂混む、粗砂あり	還元良	南加賀、 古代 IV
65	9	SI09 甕上 / X01 Y09 包含物	須恵器	甕 B	径 6/69, 台高 0.5	2.5Y 8/1	2.5Y 8/1	細・中砂混む	還元不良	南加賀、 古代 VI
66	82	X01 Y08 包含物	須恵器	口:陶	径 11	N 6/0	10YR 6/2	細・中砂混む	未還元良	南加賀
67	56	X00 Y09 包含物	須恵器	長軸鉢	底 9/014	N 6/0	2.5Y 6/1	中・粗砂混む	還元良	南加賀
68	57	X00 Y09 包含物	須恵器	厚底鉢	口:18/008	N 4/0	2.5Y 7/1	細・中砂混む	還元良	南加賀 古代 IV
69	10	SI09 V 甕上	須恵器	鉄器型跡	底:7/019	2.5Y 7/1	10YR 7/2	細・中砂混む	未還元良	南加賀、 古代 VI
70	91	SI09 2A(包含物) / SI09 I, III, V 甕上 / X00 Y09 包含物	須恵器	甕		2.5Y 6/1 2.5Y 8/1	7.5YR 6/3 7.5YR 7/3	細・中砂混む / 細・中砂混む、粗砂あり	未還元良 未還元不良	能美
72	11	X00 Y09 包含物 / X01 Y08 包含物 / SI09 2A(包含物) / SI09 V 甕上	須恵器	鉢(陶)	径 10	2.5Y 6/1	2.5Y 7/2 10YR 6/2	中・粗砂混む、焼結層にあり	未還元良	南加賀
12	SI09 2A(包含物)	土師器	甕	径 14	5YR 7/6	5YR 7/3	細・中砂混む	焼成良	古代 I	
14	SI09 床流	土師器	釜		5YR 6/4	10YR 4/1	細・中砂混む	未焼成良		
23	SI09 甕上	土師器	小釜	口:14/057, 径 12, 径高 1.7	7.5YR 6/3	7.5YR 6/4	中・粗砂混む	焼成良	古代 I	
28	SI09 床流	土師器	釜	口:18/008, 径 15, 径高 2.3	7.5YR 6/3	7.5YR 4/1	細・中砂混む	未焼成良	古代 I・II	
39	SI09 甕上	土師器	(把手)		7.5YR 7/4	7.5YR 7/2	中・粗砂混む	焼成良		
65	X00 Y09 包含物	土師器	小釜	口:16/006, 径 15, 径高 1.5	7.5Y 5/3	7.5YR 6/2	中・粗砂混む	焼成良	古代 I・II	
73	58	SK 04 A タチワリ	縄文土器	深鉢		10YR 6/2	10YR 4/1	細・中砂あり	未焼成良	縄文中期後半
74	91	X00 Y09 包含物	弥生土器	直口鉢		7.5YR 7/4	7.5YR 7/1	細・中砂混む	焼成良	弥生中期中葉

- 注 1 胎土混入 (混和) 物としての「砂」はその土成分としての石英・長石類を指す。
 2 胎土混入 (混和) 物としての「灰物」は、内側でもある程度結晶が看取されるものを指す。「鉄質土鉱物」は、ここでは内角石・輝石を指す。
 3 胎土混入 (混和) 物の含量は、土壌調査における酸度の表記法を採用し、0%・稀にあり <2%・あり <5%・含む <15%・含む <40%・頗る含む、とした。
 4 砂の粒径は Wentworth 法に準拠して分類し、1/16mm: 極細砂 <1/8mm: 細砂 <1/4mm: 中砂 <1/2mm: 粗砂 <1mm: 極粗砂 <2mm とし、実際の粒径には、これを準拠して作成した手製の粒度標準を使用した。
 5 焼成について、次の範囲を定義した。
 (1) 土師器は、内部の黒いもの (明度が 5 以下) を「未焼成」、表面の発色が鈍いもの (明度が 1 以下) を「不良」とした。ただし、表中に「不良」はない。
 (2) 灰物・陶磁器は、内部に発色があるもの (褐色系の色相が彩度が 2 以上) で「未還元」、生焼けを「不良」とした。ただし、「生焼け」の判定は任意。

表 10 薬師遺跡 出土遺物属性表 2

品	種別	出土位置	種別	寸法 (cm)	重量 (g)	石材	備考			
69	73	X.OO.Y.10 包合類	磨石類	長 11.2 幅 7.5 厚 4.8	583.1	20107	地熱温泉 熱湯の湯釜			
品	種別	出土位置	種別	寸法 (cm)	重量 (g)	発掘位置	内径色調	地層	メタル度	備考
69	75	X.OO.Y.09 包合類	陶形磁治埴・陶小(含鉄)	径 5.6 幅 0.2 厚 2.5	121.7	10YR 5/2		9	L ●	
77	79	X.OO.Y.08 包合類	陶形磁治埴・陶小(含鉄)	径 4.6 幅 0.4 厚 1.9	76.9	10YR 5/2		6	褐色 (△)	
78	74	X.OO.Y.08 包合類	陶形磁治埴・陶小(含鉄)	径 3.5 幅 0.7 厚 1.7	30.0	10YR 4/1	10YR 4/1	6	褐色 (△)	
79	76	X.OO.Y.09 包合類	陶形磁治埴・陶小(含鉄)	径 3.8 幅 0.8 厚 1.7	28.0	10YR 5/1	10YR 5/1	5	褐色 (△)	
80	80	X.OO.Y.08 包合類	陶形磁治埴・陶小(含鉄)	径 2.1 幅 0.4 厚 1.6	19.2	10YR 5/3		7	L ●	
81	60	SI.05 陶器	汎用系遺物	径 2.6 幅 2.2 厚 1.2	12.6	5Y 4/1	5Y 5/1	5	褐色 (△)	
82	77	X.OO.Y.09 包合類	鉄製品 (棒状)	径 3.0 幅 0.9 厚 0.7	1.4	10YR 4/1	10YR 4/2	4	褐色 (△)	
83	78	X.OO.Y.09 包合類	鉄製品 (棒状)	径 2.5 幅 0.9 厚 0.5	1.2	10YR 5/1	10YR 5/1	3	褐色 (△)	
84	81	X.OO.Y.09 包合類	鉄製品 (棒状)	径 1.9 幅 0.9 厚 0.7	0.7	10YR 5/1	N 4/0	3	褐色 (△)	

注 メタル度の判定は、H (○)・M (△)・L (●) の 3 段階のみ。特 L (☆) の判定はしていない。

第 5 節 小 結

本遺跡は、市道に係る発掘調査により、谷を挟んで南北 2 つの領域に遺構の分布することが凡そ明らかになっていた。この所見では、南側の領域で 7 世紀後半～8 世紀前半、北側の領域で 8 世紀前半～9 世紀後半の集落遺跡とされた（小松市教委 2003）。これだけを短絡的に敷衍すれば、南側から北側の領域に集落が遷移したともとれるものではあったが、今回の発掘調査で北側の領域に 7 世紀前半の竪穴建物跡を確認したことで、両者は、ある時期には並存していた集落領域といえることができる。さらにいえば、須恵器蓋坏の資料には 6 世紀前半代まで遡るものが含まれていた。

古墳時代の資料に関しては、本遺跡南側の領域に矢崎 B 古墳があり、主体部が切石積横穴式石室の円墳で、概ね 6 世紀後半代と考えられている（小松市教委 1992）。今回の発掘調査で出土した資料はこれを遡るものであり、未見のまま消滅した古墳がほかにもあったか、あるいは、本遺跡が古墳の破壊を伴って造成された集落跡であったか。既往の知見から集落の存在は考えにくい。

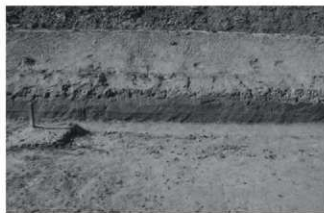
さて、今回の発掘調査で特筆される成果は、渡来系 L 字形カマドを伴う竪穴建物跡が検出されたことである。この遺構は、平成 8 年に額見町遺跡で北陸では初めて確認されて以降、同遺跡に 25 軒検出されたが、このほかには、周辺の額見町西遺跡と矢田野遺跡で合わせて 5 軒検出されていた。少なくとも、今回の発掘調査よりは、L 字形カマドの分布は、額見町遺跡を中心に月津台地西側に局地的に認められる状況と考えられてきたが、今回の発掘調査により月津台地東側にも確認されたことは、狐山遺跡、今江五丁目遺跡、矢崎宮の下遺跡、符津 C 遺跡、島遺跡といった、本遺跡と性格がよく似ていると考えられているこれらの遺跡にも、将来的に発見される蓋然性が生まれたことを意味する。ただ、昭和 30 年代までの土採取等で昔時の地形の大部分が失われた月津台地上で、今後同種の遺構が発見される確度は必ずしも高くない状況だが、全くないわけではないだろう。

引用・参考文献

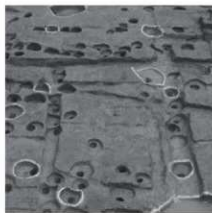
- イ (財)石川県埋蔵文化財センター (2000) 小松市額見町西遺跡
- (財)石川県埋蔵文化財センター (2006) 小松市矢田野遺跡群
- ロ 小松市教育委員会 (1992) 矢田野エジリ古墳発掘調査報告書、p10-11、石川県
- 小松市教育委員会 (2003) 薬師遺跡、P33、石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I、石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 額見町遺跡 II、石川県



高堂遺跡 全景 (南東より)



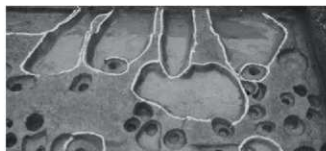
北壁断面の様子



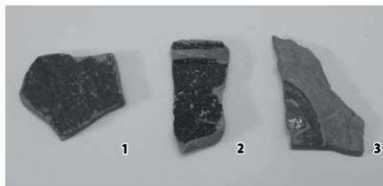
SB01



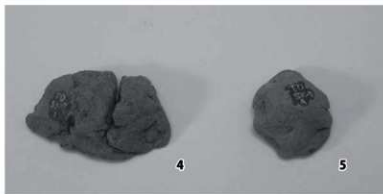
SK01



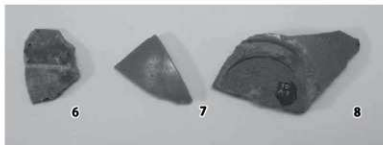
調査区北西隅部土坑・溝群



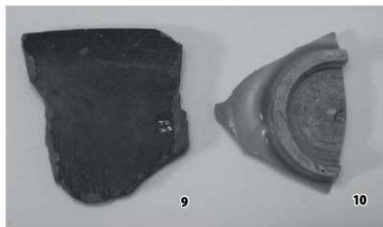
須恵器



焼成粘土塊



中世陶磁器(瀬戸・美濃、青磁)



近世陶磁器



千代才オキダ遺跡 全景



SK01 土層断面



SD01 遺物出土状況



SD01C-C' 土層断面



SD01 完掘状況 1



SD01 完掘状況 2



平面図測量作業の様子



1

縄文土器



4



2



5



7



8



9



13

弥生土器



2



3



5



6



11



12

須恵器



14



17



18



19



23



25



26



27



28



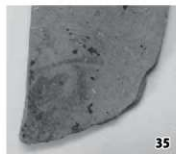
31



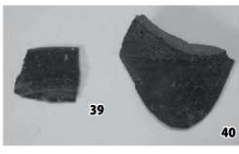
32



34

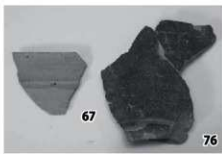


35



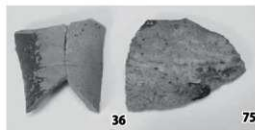
39

40



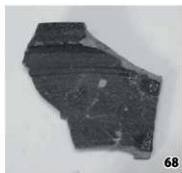
67

76



36

75



68



73

須恵器



42



42



44



44

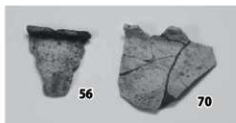
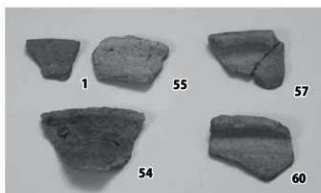
土師器



52



58



土師器



中世陶磁器



土錘



1



2

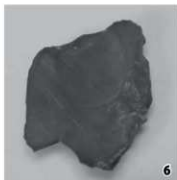
4



3



5



6

石器







符津C遺跡 空中写真



SX 01



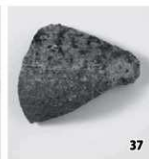
SB 01



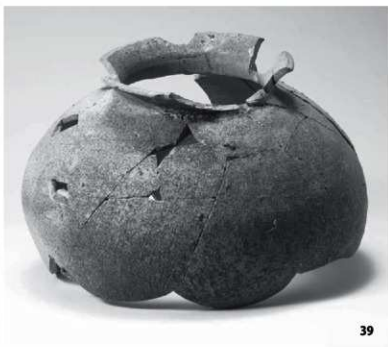
SX 02



(右から) SK 01~03



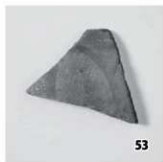
土師器



須恵器



鍛冶滓



中世陶磁器 (青磁)



漆町遺跡（白江・ツカマツ地区） 全景



SK 01



SD 01



自然流路



1



2

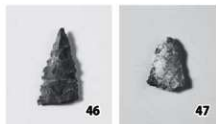


4



5

土師器



46



47

打製石鏃



11



14



27



29



38



20

須恵器



16



18



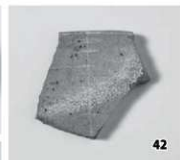
12



17



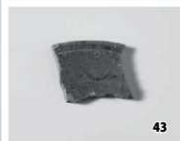
41



42



45



43

中世陶磁器



48



49

鍛冶関連遺物



作業風景（背後に木場淵を望む）



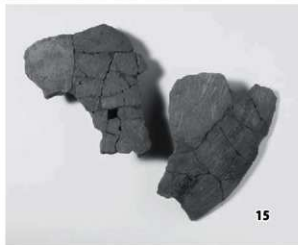
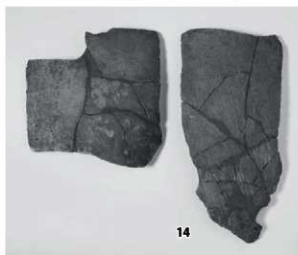
SI 09

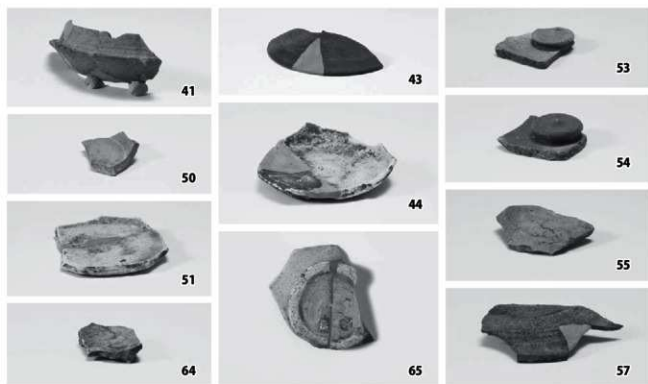


SI 09 L字形カマド焚口

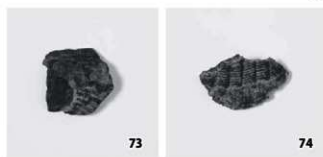


SK 04（手前） SB 04-P 7（奥）





須恵器



縄文土器

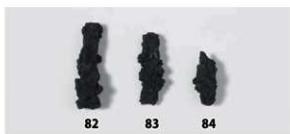
弥生土器



石器



鍛冶関連遺物



鉄製品

報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはつくつちょうさほうこくしょ3
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ
副書名	高堂遺跡・矢田野遺跡・千代オオキダ遺跡・符津C遺跡・漆町遺跡・薬師遺跡
巻次	
編・著者名	宮田 明・川畑謙二・岩本信一
編集機関	石川県小松市教育委員会
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 TEL (0761) 22-4111
発行年月日	西暦2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高堂遺跡	石川県小松市高堂町	17203	03302	36° 26' 8"	136° 29' 8"	1997.10.27～ 1997.12.26	125	個人住宅建設
千代オオキダ 遺跡	石川県小松市千代町	17203	03165	36° 24' 32"	136° 29' 17"	2000.06.19～ 2000.08.09	330	工場建設 (個人事業)
矢田野遺跡	石川県小松市月津町	17203	03104	36° 20' 41"	136° 22' 10"	2001.07.16～ 2002.03.26	1,500	個人住宅建設
符津C遺跡	石川県小松市符津町	17203		36° 21' 42"	136° 25' 55"	2004.07.14～ 2004.08.30	271	共同住宅建設 (個人事業)
漆町遺跡	石川県小松市白江町	17203	03177	36° 24' 14"	136° 28' 25"	2004.10.18～ 2004.11.30	300	共同住宅建設 (個人事業)
薬師遺跡	石川県小松市矢崎町	17203	03138	36° 22' 12"	136° 26' 12"	2005.07.11～ 2005.08.26	144	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高堂遺跡	集落跡	平安?	掘立柱建物跡	須恵器	時期は隣接地調査 成果による推定。
	散布地	中世		瀬戸、青磁	
要約					
古代集落遺跡縁辺部を確認したと考えられる。全体に擾乱を受けた状態であった。					
千代オオキダ 遺跡	集落跡?	縄文～古墳 前期	旧河道、土坑2	縄文土器、弥生土器、石器	
	集落跡	古墳後期～ 平安	掘立柱建物跡2、 旧河道、土坑3、 溝6	須恵器、土師器	
	散布地	中世		珠洲、瀬戸、青磁	
要約					
一般国道8号線小松バイパス調査区から続く旧河道を検出。また、奈良時代の集落が、西側へ展開していることが確認された。					

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢田野遺跡	散布地	古墳～平安		土師器、須恵器	
要 約	出土遺物の様相から、遺跡の盛行した時期は7～8世紀頃と考えられる。				
符津C遺跡	古 墳	古 墳	円墳1、方墳1	土師器	墳丘削平
	集落跡	古墳～奈良	掘立柱建物跡1 土坑3	土師器、須恵器、鍛冶滓	
	散布地	鎌 倉		加賀、白磁、青磁	
要 約	古墳と思われる周溝が検出された。古墳～奈良時代の集落跡は、これを削平して造成したようだ。				
漆町遺跡	散布地	弥生・ 古墳～中世	土坑1、溝1	打製石簾、土師器、須恵器、 加賀、珠洲、瀬戸、白磁、 椀形鍛冶滓	
要 約	出土遺物は、近現代の耕地の造成土に混入したものと考えられる。				
薬師遺跡	散布地	縄文～弥生		縄文土器、弥生土器、磨石	
	集落跡	古墳～平安	竪穴建物跡1 柱穴1、土坑1	土師器、須恵器、椀形鍛冶滓、 鉄製品(ノミ?)	竪穴建物跡は、 L字形カマド付設
要 約	L字形カマド付設竪穴建物跡の発見は、7世紀に朝鮮系渡来系移民の集落が月津台地全体に展開していた事実を示唆するものであり、周辺の集落遺跡にも埋蔵されている蓋然性がある。				

小松市内遺跡発掘調査報告書 III

高堂遺跡・千代オオキダ遺跡・矢田野遺跡・符津 C 遺跡・漆町遺跡・薬師遺跡

平成 19 年 3 月 30 日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町 91 TEL (0761) 24-8132

印刷 株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町 2-32 TEL (0761) 22-7031
